

---

# 願いは金に輝く時の影に

奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願いは金に輝く時の影に

### 【Nコード】

N7614V

### 【作者名】

奏多

### 【あらすじ】

主人公エリヤは銃技師を目指していた少女。ある日彼女が目覚めますと、知っていたはずの王都の景観は様変わり。どうやら100年前の過去に落ちてきたらしい自分を拾ったのは……世紀の極悪人？ファンタジー世界のタイムトリップ物語です。

## 1章 彼女の事情 1

エリヤ、人は魔力をそのまま使う事ができない。

銃は、魔法という願いを実現するために最適な形なんだよ。

父親の石造りの作業場には、いつも炎と、銀の煌きが舞い踊っていた。

炎は魔力を伝える。

銀色の粉は、炎で形を変え、魔力を込めた力ある金属となる。

それが銃身に絡みつき、溶け込んで、魔術式を浮かび上がらせるのだ。

持ち主の魔力を、術式を通して形にするため。

銃という形は、魔力を安定させながら発するのにも、最も適した形だ。

魔法を使うのは、幸せのためでなければ。その形が銃であっても、人を傷つけるためだけのものじゃない。

父が銃を造る様子は、とても綺麗だった。

だから自分も作れたらいいなと言ったら、父親はとても喜んでくれた。

熱心に教えられるようになると、銃を作る限り父親が傍にいてくれるのだとわかり、銃に触れる時間が大切なものになった。

ただ問題は、父親の語る理論がわかってても、エリヤには魔力が少ないことだった。

父親のように鮮やかに銃を作ることにはできない。けれどその夢を聞く度に、どうにかして実現できるようになりたいと思った。

父親の死後、その思いはさらに強くなる。  
だから銃技師の学校へ進んだ。

「だけど父さん……あたしには才能が、足りないみたいなんだ」  
どんなに理想が高くたって、実現する力がなければ、夢には近づけない。

\*\*\*

その日、目覚めたのは継ぎ目のない石造りの小部屋だった。  
毛布を被っていても壁は固くて、よりかかっていた背中が痛む。  
小窓から差し込む光で、エリヤは「ああ、朝なんだ」と思いながら伸びをした。

ここは作業場だ。  
火をおこし、金属を溶かすための炉があり、壁には鉄の工具がいくつも下げられている。

中央にすえられた石の作業台には、ようやく作り上げた銃が一つ。  
冷たい鉄色の銃身に、金の装飾がからみついた銃だ。

「そっか。また補習おわつたとたんに眠っちゃったんだ、あたし」  
魔術技師の学校は、授業のほとんどが魔術理論と実習の二つに大別される。

そのうちの銃技師コースに所属するエリヤは、実習が大の苦手だった。

魔力が少ないため、銃に炎と特殊な金属を使って魔術をこめる作業が、とても遅い。そのため他の生徒が2〜3時間でできる物も、自ら補習を行って夜中まで作業しないと、エリヤには仕上げられないのだ。

なので補習室に止まりこむのが、常態になってしまっていた。

「うわ、早く出ないと……」

となりの宿直室からは、コーヒの香りが漂ってきている。

朝からの守衛をしている人が、毎朝出勤するたびに淹れているのだ。

ということはおもう8時。

今日は休みだけれど、補習室を使いに来る生徒がいなわけではない。かち合う前に出て行くべきだった。

エリヤは毛布をたたんで隅にあるロッカーの中に入れる。

そのロッカーの小さな鏡をのぞいて、栗色の肩までの髪を一つに結いなおして補習室を出た。

念のため、隣の宿直室に声をかけ、不審者じゃなくていつもおり、エリヤが寝過ごしてしまったことをしらせた後、職員室に寄って提出すべき銃を預ける。

それから学校を出ようとした。が、

「おや、うちのクラスの劣等生がいるぞ」

校門まで続く、緑が配置されたごく短い道。その途中で、早々と学校へやってきた二人組みと出会ってしまった。

「また『巢』にいたのかよこいつ？」

「魔力が足りないせいだろ？ 今度の実習は、一体何日かかるんだかな？」

見慣れた黒灰色のブレザーを着た少年に、見覚えはあった。

いやなことに、二人ともエリヤと同じ組の人間だ。

彼らはくすくすとエリヤを見て笑う。

エリヤがいつも補習が必要なことを、彼らはよく知っているのだ。ふっとため息をつき、エリヤはかれらの横を通り過ぎようとした。実習に時間がかかったのは確かだし、彼らにいちいちかまってい

れない。

が、進行方向をさえぎるように、一人がエリヤの前に立ちほだかる。

「おいおい、クラスメイトが話しかけてやってんのに無視すんのかよ?」

もう一人はエリヤの横へ来て、さして背の高くない彼女を見下ろしてくる。

「わざわざ魔力の少ないやつに話しかけてやってるってのに、好意を無視すんなよエリヤ・サーディル」

「そーいやお前いつ学校やめんだよ? ここは魔力の少ないやつには授業についていけない学校なんだぜ?」

「実習の度にめざわりなんだよオマエ」

「なんとか返事したらどうなんだ?」

「……解除、闇の帳」

「は?」

ぼそり、つぶやいたエリヤは、既にホルダーから抜いた鉛色の銃を、地面に向かって打ち込む。

地を穿つように打ち込まれた黒い光が、一瞬にして煙りのようにわきあがる。

周囲を黒い煙で覆い尽くす。

「ちよっ」

「おまえ卑怯だぞ! 校内での銃の使用は……」

「禁止されてるわけじゃないけど?」

エリヤはさっさとその場を離れながら言い返した。

「それに危害を加える魔術じゃないからね?」

ただの黒い煙だ。

そもそも危害をおよぼす魔術以外は許可しないと、この学校で実習などできやしない。

「退学にしてやる！」

「あれ、あんた達より魔力が貧弱なあたしが撃った魔法で、怪我したって言いふらせるの？ 一生笑いものになるんじゃない？」

「くそっ！ 待てこら！」

黒い煙に覆われ、方向を見失った二人組みはまだその場で動きあぐねているようだ。

先に校門のある方向を確認していたエリヤは、そんなかれらを置いて、さっさと逃走する。

黒い煙の効果はそれほど長くないのだ。

学校を離れ、板石で舗装された道を走り、はなれた場所にある公園でようやくエリヤは足を止めた。

さすがに息切れがして、その場にうずくまって少し休む。

そして呟いた。

「ああ、やつちゃった……」

頭の中も冷静になってきたせいだろう。

「かつとなつて撃っちゃった……。今までがまんしてたのになあ、寝起きだったからかなあ」

小さい頃から銃が身近にある生活を送っていたせいだろうか。かっとなると、銃を使ってしまいうけがあるのだ。

今更ながらに銃を使ってしまったことが悔やまれた。

「本当に、退学には……ならない、よね？」

二人組にはああ言ったものの、授業でもないのにあんな目立つ術

を撃ってしまったのだ。教師にバレたらずまず間違いなく説教される。普通の生徒ならば、それで終わるかもしれない。

けれどエリヤは劣等生だ。

そしてこの学校は、一定の基準を満たさなければ退学にされる厳しい所である。

エリヤはいつもギリギリな上、真面目な態度でめこぼしをもらっていたのだ。もしかするとこの騒ぎを失点とされ、退学を宣告されるかもしれない。

「たいがく、か」

ふっとため息をつき、エリヤは歩き出した。



## 1章 彼女の事情 2

公園を出て、板石を敷き詰めた街路を進んでいくと、路地を出て大きな道へ出る。

時折魔術駆動のガリガリとした音を立てる車が行き過ぎる道の両端には、大きな建物が並んでいた。

建物は皆、ねじれた柱を元に、壁を積み重ねている。そのため、水を流せば良い感じに滝ができそうな段のあるビルや、上部がラッパのように広がって建てられた物もある。

これは全て、魔術で柱を作ったからだ。

世界の歪みから生じるのが魔術であるせいか、魔術で巨大な物を組成するとゆるやかなねじれがかならず生じる。建物の柱もその法則通りにねじれが生じるのだが、基礎を打ち付けて石を積み重ねるよりも早く建設できるということで、この工法が流行った。

それに伴い、ねじれすらも操って様々な建物の形を作るのが最近の流行になっている。

時折、間に挟まる古式ゆかしい木の柱に煉瓦を積み重ねた二階建ての建物が、非常に地味で古く見えた。

そんな大通から商店街へ。そこでパンに肉や野菜を挟んで折り曲げたものを買ひ、食べてからまた歩く。

やがて川を渡り、木立をぬける。

そこに広がっているのは新緑の草が風に揺れる丘だ。

頂きには古い石積みの館があり、その周辺には白い石が無数に立ち並んでいる。

王都東にある、共同墓地だ。

エリヤは墓地の中をゆつくりと進む。半ばまで丘を上がったところで、足をとめた。

そこにあつた白い墓標には、エリヤの両親の名前が刻まれていた。名前の下に書かれているのは、両親がどんな人々であつたのかを、刻んだものだ。

術式銃の発展に寄与した者。それを支えた妻とともに眠る。

父親の仲間達が、エリヤの祖父母と話し合つて決めた言葉だ。鉛の銃弾を使う銃が廃れた後も、魔術を撃ち出す銃は「術式銃」と呼ばれている。

術を発動させるための術式は未だ発展途上と言われ、あらかじめ織り込んだ術以外を使う技術も、まだ研究段階だ。

エリヤの父はその技術発展のために研究を重ねていた。

火をつけたら、消せるようにしなくちゃ危ないだろう？

今や術式銃は、魔法を使うための道具として扱われている。

限定された魔術に関しては、生活の中にも使われている物が多いのだ。だからこそ、安全のために消火ができる魔術なども並行して使えなければ、というのがエリヤの父の理念だった。

それが一部だけ実を結び、安全装置の術がどの術式銃にもほどこされている。

エリヤにとっては、偉大な父親だった。

「父さんみたいに、なりたかったけど……」

じつと、その名前を見つめる。

「退学になったら、どうしようかな」

つかつとなつてやってしまったことは、後悔している。けれど一方で、底辺を這い続けているエリヤでは、何かしらの要因で、早晚同じような事態になっていたのではないかとも思うのだ。

それに、少し疲れてしまった。

毎回夜中までかかって実習をこなすことも。

嘲られながらも学校へ通うことも。

できないことをわかっていながら、銃技師を目指すことも。

ふつとエリヤはため息をついて、墓の前を離れた。

墓地に来たところで、死んだ父親と話せるわけでもないのだ。

「考えてもしかたないし、言われたらその時考えようかな」

エリヤは考えるのを放棄し、そのままなにげなく墓地を散策した。

丘一つが墓地なので、頂上まで行くとけっこう眺めがいいのだ。

ただ、いわくつきの場所であるため、あまり遠景を眺めようなどと言う人がいないだけで。

「ほんとにここ、お化けなんて出るのかなあ」

ちらちらと見てしまうのは、丘の上にある廃墟だ。

100年前には『監獄離宮』とあだ名された王家の建物で、正式名をアヴィセント・コートという。

その頃は、まだ魔術が上手く利用できず、魔力持ちの人間が恐れられていた。そのため、魔力を持つ者は政府によってこの監獄離宮へ押し込められ、幽閉されていたらしい。

そんな人々の幽霊が出る、という噂があるのだ。

時々ここで肝試しをする者達もいるという。

「ぱつと見、綺麗な建物つぱいのね」

放置されて荒れているものの、外観は貴族の館といった趣の建物なのだ。アーチを描く出窓が並んだ美しい建物は、壁が薄汚れて灰

色に変色していても、瀟洒な雰囲気を保っている。

そんな怪談話もある建物を背に、エリヤはぐるりと丘の頂上をめぐる、家に帰ろうとした。

いいかげん家に帰って、少しは休まなければ。

そう思ったエリヤだったが、不意に背後から声をかけられた気がして立ち止まる。

「……え？」

振り返ったエリヤの視界は、金と黒の入り交じった光に覆われ。

## 2章 彼の事情

霧雨の降る暗色の空を、白い手が泳ぐ。

灰色の外套を翻し、黒い革靴で苔むした石橋の欄干に着地した小柄な男は、白い手袋を履いた手に黒と金の色が絡み合う銃を構えた。

「伏せる！」

グレイブが叫ぶのと同時に、銃口から強い光が放たれる。

暗い夜に沈んでいた石畳の路地が、刹那、閃光の白に染まった。

まぶしさに周囲の公安官達が顔を腕で覆う。が、何人かが間に合わず、呻く声上がる。

灰色の外套の男は、さらに左手の銃口を空に向けた。

爆発音が響き、右から左から熱波と破片が襲いかかる。

腕で自分の顔を庇いながら、グレイブは灰色の男が頭上へ向かって炎を打ち上げる姿を見た。

上昇した炎は弧を描いて地に落ちる。炎に触れた橋の一部が爆発した。

周囲の者達は石つぶてに悲鳴を上げる。

グレイブも足をかすめた破片に顔をしかめた。が、欄干上を逃げ出した男の姿に気づき、急ぎ追いかけた。

犯人を捕まえるのは、グレイブの職務だ。

連続殺傷事件が王都内で発生したのは、一ヶ月前のこと。

犯人は魔力を持つ者だった。

本来、魔力は素質ある者しか使えない。さらには魔力保持者の精神状態に左右されやすく、すぐに暴走しがちだ。

たとえ本人に他人を害する意志がなくとも、何を切っ掛けに暴走

するのかわからないため、警戒される。

だから魔力で人を傷つけた者は、事の大小にかかわらず全て捕縛対象だ。そして魔力が使えない設備が整った監獄離宮へ幽閉されなければならぬ。

しかし魔力保持者の犯罪だと思われていたその事件が、死んだ犯人の一人が魔力の素質がない者だと判明したことで、事態は急変した。

誰にでも魔力が使えるようになっては、社会が混乱する。

危機感をおぼえた公安により王都内の警備が強化され、グレイブ達公安官は監視網にようやくひっかかった犯人らしき男を見つけたのだ。

霧雨が視界をベールのように遮る橋の上を、グレイブは一心に駆ける。

足だけならばグレイブの方が早い。

犯人に追いつきそうになったが、灰色の外套がひらりとためき、男が橋から飛び降りた。

舌打ちしてグレイブも橋から飛び降りる。

が、敵の姿はもう見えなくなっていた。

それでも勘に従ってグレイブは近くの路地へ入った。

そこで足を止める。

一人の少女が、霧雨に濡れた石畳の上に転がっていた。

夜道を照らすほのかなガス灯の明かりの下、黒灰色の石畳にうつ伏せに寝転がる少女は、死体のようにびくりとも動かない。

が、少女がわずかにみじろぎしたことで、生きているのだと分かる。

少女の肩までの栗色の髪は、濡れて白い首筋や濃緑の男のようなシャツの襟にへばりついている。さらに羽織ったシャツの裾から伸びる足には、やはり男物の半分に切った丈のズボンを履いていた。白いふくらはぎが、近くを馬車が通ったのか、泥で汚れていた。

思えば、建て増しを重ねた、煉瓦造りの雑居アパートが連なるこの王都東界隈では、小道に死体が転がっていることは珍しくもない。そういった浮浪者のたぐいかと思ったが、着ている服が綺麗すぎた。

グレイブは、霧雨に茶金の髪や黒緋のコートの肩を濡らしながら、数秒思案する。

「どこかから虐待されて逃げてきたのか……」

髪の短さは、自尊心を傷つけるためだったのかもしれない。女性ならば髪は腰につくほどあるのが一般的だ。

服も、逃げられないように与えられず監禁されていた怖れがある。男物の服や半分に切ったズボンを履いているのは、加害者の服を奪ったからだろう。

事件だ、とグレイブは結論づけた。

浮浪者が飢えて死ぬのとは訳が違う。

グレイブは公安を司る者として、近くの公安分署へ届け、少女を保護させることに決めた。

どちらにせよ先ほどの男がどこへ行ったか、わからないのだ。追いつけない対象を探して、目の前の弱者を放り出すわけにはいかない。

運ぶ必要があるので少女を抱き上げた。自分より頭二つ分近く背の低い少女は、持ち上げても軽かった。

そして胸の前で握りしめている手を見て、むっと顔をしかめた。

白い手袋。

それは先ほど逃してしまった、犯人を連想させた。

もしかやと思つてさぐれば、やはり少女の腰のベルトには青灰色の銃がねじ込まれていた。

「……銃、だろつな」

引き金もある。

白い金属で繊細な装飾もされていて、貴人の観賞用に作られたものの様にも見える。けれど弾を込める弾倉がない。よくよく見れば、銃身の先まで白い金属の装飾が蔓のように伸び、発砲時に装飾を壊してしまいかねない構造になっている。

不可思議な銃の構造に、グレイブは見覚えがあった。

この少女は、重要事件の参考人となる。

そう考えたグレイブは少女を抱え直し、歩き出した。その時寝言だろうか、小さな声が聞こえた。

「お父さん……」



### 3章 貴方のお名前教えてください 1

朝は卵焼きをのせたパンを食べるのがエリヤの日常だ。

珈琲は飲めないのです、ミルクたっぷりの紅茶を用意する。

それを三分で腹の中に納め、道行く車をすり抜け、魔術技師の学校へ駆け出すのだ。

けれど今、鼻をくすぐったのは重たい香ばしさの珈琲の匂い。また補講室でねむりこんでしまったのだろうか？

エリヤはうとうととしながら考える。

確かに昨日は、補修室にいた。その後、家に帰らなかったのだろうか？

もう少し眠りたい、と思いつつながらエリヤは上掛けの中へ潜り込む。睡眠はエリヤの最も至福な時間だ。

なるべく長く堪能したいので、揺り起こそうとする手が肩に触れても、唸って抗議した。

けれどその手は、なおもエリヤを揺さぶってくる。あげく呼びかけてきた。

「起きろ身元不詳人」

しかも見知らぬ、低い男性の声

「……っ！！」

驚いて飛び起きたエリヤは、至近距離で藍色の瞳と目が合い、それが茶金の髪をした見知らぬ青年だと認識した瞬間、絶叫した。

「ぎいやああああああっ！！」

腹から喉から空気を絞れるだけ搾って叫んだ後、エリヤは寝起き

と酸欠でくらりとめまいがした。

そのまま、ばふんと寝台に転がり直した彼女を、金髪の青年は無表情に観察してくる。

釣り気味の目をした恐い表情で。

「見知らぬ状況に置かれ、見知らぬ人間と顔を合わせた際に叫ぶのは分かる。しかしお前には、今の自分の立場を思い出してもらいたい」

「自分の、た、立場って!？」

そんな言い方をされる状況など、小説で読んだ拉致された被害者とか、武装集団に乗っ取られた列車の客だとか、そんなものしかエリヤは思い浮かばない。しかもどちらにせよロクな物じゃない。

しかも自分の手には慣れ親しんだ銃がない。

誰か自分に銃を!

と言ったところで誰も渡してくれる人はいない。

抵抗できないなら命乞いしかない!

「こ、ここに、殺さないで! なんでも、なんでもするから!」

訳が分からないけど、きつと自分は犯罪に巻き込まれたんだ。そしてこの青年が犯人なのだ。

必死にエリヤは助命嘆願しながら、逃げ場所を探してわたわたと寝台の上掛けの中に潜り込もうとした。

が、

「まずは話を聞け」

両肩を押さえられ、寝台の上に仰向けにされた。

真正面から相手と目を合わせる羽目になったエリヤは、青年の冷たい眼差しに息を飲み、視線をそらすこともできない。

青年はややしばらく黙ってエリヤを見ていた。  
同じように見返していたエリヤは、それ以上のリアクションがないことで、だんだんと状況に慣れ、青年の顔を観察する余裕がでてきた。

（綺麗な瞳）

目覚めた時にも思ったが、青でも水色でもなく、藍色というのは珍しい。黒とは違いながら、それでいて深く暗い青をしている。

気づいて見れば、容貌も整っている。目つきこそ悪いが、彫りが深すぎるのではない顔立ちは、笑えば柔和に見えるかもしれない。今の所は綺麗だからこそ、魔王っぽい怖さを醸し出しているだけだ  
が。

次いで、あ、肌綺麗だなと思った瞬間、エリヤの乙女回路が動き出した。

最近、実習のために泊まり込みばかりしていた疲れか、肌が荒れ気味なのだ。

人並みに恥ずかしいと思った後、心に溢れるのは原因となった記憶だ。

魔力が足りないのにこんな学校来るからだって、という言葉と嘲笑。

でもエリヤだって別に、なりたくて魔力が少なく生まれついたわけじゃない。魔力が少なくなたって、実際に商売をする段になれば『銃技師』に魔力の有無なんて必要ないのに。

魔力の大小で蔑まれるなんて、悔しくて……。

だけど待つてエリヤ。そう自分に問いかける。

確かに朝は実習室で迎えてしまったけど、その後学校からは出たはず。

校門前で同級生に術式銃を使い、文字どおり煙に巻き、逃げたその足で両親の墓参りへ行つたはずだ。

王都東の河川敷から連なる丘の上にある墓地へ。

刈り込まれる前の伸び始めた初夏の草が、白い石に名前を刻んだ墓標を囲んで、風に揺れていたのを覚えている。

きらきらと水面が輝く川も。

「なのに私、どうして……ここに？」

その言葉に、エリヤがようやく落ち着いたことを察したのだろう。青年はゆつくりと、落ち着いた声で答えた。

「俺が見つけた時には、道端に倒れていた。アヴィセント・コートにごく近い場所だ」

「あつ、いせんと、コート……」

その名称にはちゃんと覚えがある。

コートとは宮殿のことだ。

墓地の近くにある、昔の離宮跡。むしろ墓地自体が、離宮を囲む広大な庭だった場所。

「倒れてた？」

首をかしげてみれば、気絶したような記憶は……あった。

墓地からの去り際に、変な幻覚みたいな光を見た。

さらにめまいがしたので思わずしゃがみ込み、気づいたら辺りは夜みたいになって暗くなっていた。

何が起こったのかわからなくて、恐くて、家に帰ろうとしたけど体が上手く動かなくて。不安で銃を握りしめたまま……。

そこからの記憶がない。だからそのまま倒れたのだろう。

しかしエリヤは、グレイブの言葉に違和感をおぼえた。

「アヴィセント・コートへ向かう道？」

倒れたのは墓地だったはずだと思ったところで、こほんと咳が出た。

「風邪か？」

エリヤを押さえつけていた青年は、ようやく彼女を離してくれた。代わりにエリヤの額に手を触れる。

冷たくも暖かくもない手の感触に、エリヤは肩に力が入る。母親の手でも自分の手でもない。見知らぬ男性の手が自分に触れるなど、緊張せずにはいられなかった。

「それほど熱はないように思えるが……風邪の引きはじめかもしれない。とりあえず栄養をとるべきだろう」

やはり彼は熱を測っただけのようだ。すぐに離れていく大きな手を見送り、エリヤはほっと体の緊張を解く。

そういえば、今の状況はとんでもないのではないだろうか。

見知らぬ男性に拾われ、先ほどは寝台に押しつけられ、なぜか体調を心配される。

この人は誰なんだろう？

「あの、あなたは誰ですか？」

立ち上がった青年に尋ねると、彼は紺色の瞳をすがめてエリヤを見る。

「うっ……」

睨まれてるみたいで恐くて、思わずエリヤは息を飲んだ。だから彼の名乗りの半分しかちゃんと聞こえなかった。

「グレイブ………だ」

ファーストネームだけ聞き取れた。彼はグレイブという名の人ら

しい。それだけわかっていれば問題ないかと、エリヤは考えた。

そして問題は、大抵後で発覚するのである。

### 3章 貴方のお名前教えてください 2(前書き)

お気に入り登録して下さい方々に感謝を！

### 3章 貴方のお名前教えてください 2

「起きられるか？」

問われて、うなずきを返す。

「だ、だいじょうぶです」

とりあえず道ばたで転がっていた自分を助けてくれたらしい彼に、敬語で応える。そうして寝台から立ち上がったエリヤは、すぐそこに揃えて置かれていた自分の革靴を見て、重大なことに気付いた。

靴下を履いてない。

それだけならばいい。着てる服も違う。

自分はシャツにズボンを履いていたはずだ。苦学生なエリヤは、おしゃれをする余裕がない。なので、逆に同じような服を何着か揃えて着回している。

なのに今、エリヤは自分のワードローブに存在しない、濃緑のリネンのワンピースを着ているのだ。しかも人形ぐらいにしか着せなような古風な袖が広がっている型で、スカートの裾も足首まであってやけに長い。あげく、白いレースのリボンが胸の下の切り替えに縫い付けられている、実に少女趣味なものだった。

「なっ、これっ……たしのっ……ふ！」

あまりの異常事態に噴火しそうな脳と口が上手く連動せず、言葉がとぎれとぎれになってしまう。

わたしの服じゃないんですけどっていうか、誰が着替えさせたのこれ！

まさかこのグレイブと言う人が着替えさせたのかとエリヤは真っ



赤になり、次に真っ青になる。

裸を見られたかもしれない羞恥もそうだが、自分の身は大丈夫なのか!? でも本人に面と向かって聞くのも恐かった。

呆然とそこに立ち尽くしたエリヤの様子に、部屋の隅のコート掛けから黒緋のコートを手に取ったグレイブが、しかめ面をする。

「服か？ 安心しろ。それは間に合わせだ。部屋着だと言っていた」  
「……は？」

「外へ着ていけるようなきちんとした服は、別に用意を頼んでいる。女子には今着ているコットだけでは足りないそうだ。ローブもジューブも必要だろうと言われてな」

「ローブ？」

女子に必要と言われたものの、自分はそんな服を着ていただろうか。でも確かに、エリヤは面倒だからと男物ばかり着用していたので、育ててくれた祖父母も「女の子らしい格好をしてくれない」と嘆いていた気がする。

きつとエリヤが疎いだけで、普通の女の子には必要なだろう。

同じ学校に通っていた少女達も、最近の流行だと言って華やかに重ね着をしていたから、そういうたぐいのものに違いない。

コットはなんとか分かる。確かワンピースの元の呼称だ。

「わ、わかりました」

うなずいたエリヤは、服以外に足りないものを思い出す。

父の形見の銃だ。

自作した銃は学校を出る前に、職員室へ寄って置いてきたのだ。

でもグレイブが何も言わないところを見ると、彼に拾われた時には持っていなかった可能性がある。

(気絶してる間に盗まれたかな……)

大事なものだっただけに、落胆は深い。

しかも銃が身近にないと落ち着かない。小さな頃から、エリヤはくまのぬいぐるみの代わりに銃に触れる生活をしてきたのだ。

思わずため息をつく。

そんなエリヤの内心など知らないグレイブが、淡々とした声で指示してきた。

「ついてこい」

黒緋のコートを羽織ったグレイブが、あっさりと部屋をでていく。エリヤは慌てて彼のあとを追った。

### 3章 貴方のお名前教えてください 3

廊下の漆喰の白壁といい、掛けられた明かり用らしいオイルランプといい、飴色の木の階段といい、エリヤの拾い主の家はやけにレトロだった。

エリヤが住んでいる共同住宅でさえ、小さな術式がどこに散らばり、光があり、引き金に似たスイッチを押すだけで明かりが付くのに、けれどその疑問は、階下に降りたところにある扉を開いたとたん、氷解した。

墨色の落ち着いたテーブルセットが並ぶ拾い室内。

カウンター席の向うには、硝子製の丸いサイフォンが並んでいる。ここは喫茶店だったのだ。

店舗兼住居だから、わざと古びた感じの内装や建物だったのだらう。

そしてカウンターの向うには、作業をしている人がいた。

茶色い髪の青年だ。年齢的には二十歳半ばに見える。

年はグレイブと同じくらいだろう。でも彼よりもずっと小柄だ。

薄い緑のシャツに黒のベストを身につけた彼は、こちらに気付くと顔を上げて微笑んだ。中性的な雰囲気その人は、笑うと女性と錯覚しそうだ。薄茶の瞳で、やさしげにエリヤを見つめてくる。

「おはようグレイブ。彼女も目が覚めたんだ？」

「ああ。ルヴェは？」

「もうすぐ来るよ。ラメル食べて待つてて」

そう言って青年はグレイブに皿をさしだした。カウンター越しに

グレイブが受け取ったのは、フライパンで焼いた塩気のあるパン『ラメル』に、野菜や肉を挟んで二つに折ったものだ。

「持て」

それをグレイブがエリヤに渡してくる。

反射的に受け取ったエリヤだったが、二枚目の皿を受け取ったグレイブが、早々にカウンターに座ってしまつたのを見て戸惑う。

すると喫茶店の店主らしい青年が声をかけてくれた。

「どうぞ座って、今飲み物も出すから。何を飲む？ …… ってそういえば名前を聞いてもいいかな？」

「はい、あの、エリヤです。できれば紅茶を」

無いのならば仕方ないが、できればいつもと同じものが飲みたかった。日常と同じ行動をすることで、この混乱した心が落ち着くかと思つたからだ。

「いいよ。ちなみに僕はフィン。グレイブの家の、一階を借りて喫茶店を経営してる者だ」

はじめまして、と自己紹介してくれたフィンのおかげで、エリヤの小さな疑問がまた一つ解ける。

家はそもそもグレイブのもので、フィンが店子というわけだ。

「そういえば、お前の名前を聞いていなかったな」

グレイブの言葉を聞いて、エリヤは今気付いたのかと驚いた。フィンも呆れたようにため息をつく。

「普通、最初に聞くものじゃないかい？」

思わずエリヤはうなずいてしまいそうになった。

拾った相手がどういふ相手か、普通は気になると思うのだ。 思え

ば住所もなにもかも聞かれなかった。

が、グレイブの答えは予想外のものだった。

「後で書類を作る時に聞いたただせばいいかと」

書類？ とエリヤはラメルに伸ばそうとした手を止める。なぜグレイブの書類とエリヤの名前が関係あるのだろう。

「仕事熱心だね」

フィーンはそう言って微笑む。グレイブは返事もしない。

だからなんとなく尋ねにくくて、エリヤは黙ったままラメルを掴み、食べ始めた。

甘酸っぱいソースが美味しい。

出してもらった紅茶とともに、エリヤは瞬間にラメルを食べてしまった。

その間にフィーンが喫茶店の開店準備だろう。窓の雨戸をひとつずつ開けていく。

硝子は気泡の浮く小さな板硝子をいくつも組み合わせたもので、やはりエリヤに旧市街にある古い民家や、懐古的な雰囲気売りにしたレストランを思い出させる。

と、フィーンがカウンターから出て店の出入り口らしき扉を開ける姿を目で追い、その先に見えた風景に目を丸くした。

「……………え？」

王都レネダは、近年編み出された魔法による柱造術を使って、一新した町並みが有名な場所だ。

ねじれた柱と、それに合わせて積み上げられた白灰色の石壁というのが、エリヤの知っている王都の景観の中にある建物だ。

が、それが一つも見あたらない。

全て赤茶けた煉瓦か、黒灰色の石を積み上げた建物ばかりだ。ねじれを描いて天へ伸びる柱が一本も見あたらない。

エリヤは思わず立ち上がる。

もつとよく見ようと、扉へ駆け寄った。瞼をこすつても、見えて  
いるものは変わらない。

それどころか、早朝らしい涼やかな空気の中、行き交う人々の服  
装もおかしかった。

煉瓦敷きの道に行く男性は、裾の長いジャケットの下にベストを  
着ていて、中にはマントまでつけている人もいる。女性は皆足首ま  
である長いスカートで、肩にはエリヤなど身につけたこともないケ  
ープを羽織っている。しかも帽子の着用率が驚異的だった。しかも  
造花が必ずつけられた、古典的な帽子である。

そして次々に通っていくのは、ガリガリと音をたてる車ではなく、  
人に乗せた馬車だ。

「こんな町知らない……」

エリヤは愕然とした。

町並みが、自分の記憶とはかなり違う。

教科書で見たような近世初期　百年前の町並みだった。

### 3章 貴方のお名前教えてください 4

「自分が逃げてきた場所もわからないのか？」  
不意に背後から告げられ、エリヤはのろのろとグレイブを見上げる。

「よそから攫われてきたのか……その方が秘密を外に漏らす心配はないだろうが」

彼はエリヤにはよく分からないことをぶつぶつと呟く。けれど今、エリヤにとって彼の言葉の内容などどうでもよかった。

「ここは、どこですか？」

自分は一体どこにいるのか。

父の墓参りに来ただけのはずだった。途中で倒れて、拾ってもらったというハプニングこそあったが、この後はお礼を言って家に帰るつもりだった。

けれどずっと王都に住んでいるはずなのに、エリヤには全く見覚えの無い景色が広がっている。

問われたグレイブは、淡々と答えた。

「王都レネダの東側。第二クレセント通りから少し外れた場所だ」

クレセント通りは、王都の西と東に一つずつある、弓状に曲がった通りだ。西を第一クレセント。東を第二クレセントという。

それはエリヤも知っている。けれど第二クレセント通りならば、エリヤは近隣の様子を詳細まで知っている。自分が部屋を借りているアパートも、第二クレセントの近くにあるのだから。

けれどこんな景色に見覚えなどない。まるで、百年前に自分だけ  
逆戻りしたような状態だ。

何より空気が違った。

鼻をつくのは、木や石炭を燃やしたような焦げ臭さが混じった匂  
いだ。

魔術式を使って車を走らせ、熱も空気を魔力で暖めてつくりだし  
ていたエリヤの知る王都では、漂うことのないにおい。

ぼんやりとするエリヤの様子を、グレイブは知らない通りの名前  
を聞いたせいだと思ったようだ。

「わからんのか？」

エリヤはうなずくこともできない。知っているが、エリヤの知っ  
ているものとは違うのだ。

「い、いま何年？」

唐突な問いに、グレイブは答えてくれる。

「一八八一年だ」

「せんはつびやく……」

ぼんやりと反芻するエリヤに、横から新聞が差し出される。エリ  
ヤはフィーンに礼を言って受け取った。

これもエリヤの見たことがない、なめらかさが足りない藁版紙に、  
インクの濃い匂いがする物だ。ただ、レネダ通信という名前は知っ  
ている。百年以上の歴史がある老舗の新聞社だ。

エリヤは震える手で新聞を受け取った。

新聞の上部に印字されているのは間違いなく、一八八一年四月八  
日の日付。下の記事は、賢王と『後に』呼ばれるようになる国王ヴ  
イオレント一世の謁見に関するものだ。



「おうさま。ヴィオレント」

これも間違いない。十九世紀の有名な国王だ。しかも記事には写真ではなく詳細な絵がついており、その姿を見る限りヴィオレント王はまだ十八歳位で、即位したての年齢に見える。

まさかここは、過去？

エリヤはめまいがした。

誰か自分に銃を渡して欲しいと切に願う。さわっていられると安心できるのに。

けれどそんな願いが叶うわけもなく、エリヤは足元から力が抜けて、その場に座り込みそうになる。

「おい！？」

実際くずおれそうになったエリヤは、後ろにいたグレイブに支えられた。

しかしエリヤは、今感じているこの人の手の力強さもなにもかも、現実だと思えるのに、目の前の景色だけが受け入れられない。

「ここは……どこ、ですか？」

エリヤはあえぐように問う。

「見覚えがないのか？ アヴィセント・コートは知っていたみたいだが……」

「記憶喪失かな？」

グレイブの疑問に、フィーンが戸惑った声が重なる。

「もう一つの可能性としては、何者かに別な場所をアヴィセント・コートだと偽られて、信じていたのか。お前、生まれ故郷はどこだ？」

グレイブに尋ねられて、エリヤは首を横に振る。

ちゃんと覚えて居る。王都から東のアーレント市だ。

けれど王都の様子を見ればわかる。エリヤの知っているアーレント市は、この世界に存在してない。

### 3章 貴方のお名前教えてください 5

エリヤの様子を、グレイブ達は記憶がないからだと判断したようだ。

「記憶が無いんじゃない、家出人の履歴を調べても……」

「行方不明者の記録を当たる。だが、この様子だと拉致されてからかなりの年数が経っているだろう。すぐに見つかるとはどうかはわからない。王都の記録だけでは、尋ね当たらないかもしれない」

エリヤは、二人の会話が遠ざかっていくような錯覚に陥る。

そのままふつと意識が遠のきかけた時、目の前に一人の少女が現れた。

艶やかな茶の髪を流しっぱなしにした彼女は、白いふんわりとふくらんだ造花を挿した帽子を被っている。手には大きな紙袋を抱えているが、背は高めでそれほど重さを苦にしているようには見えない。

エリヤと同じ十六歳ぐらいに見える彼女は、顔を合わせた瞬間、薄茶色の目を大きく見開いた。

「ちよつ、グレイブったら部屋着のまま店にその子連れてきたの！？」 これだからグレイブってば、女の子に対してデリカシーってもんがないんだから！ さああなた、こつち来て！」

まくし立てた上、彼女はエリヤの手を握り、階上の部屋へと連れて行く。

あれよあれよと言う間に元の部屋に戻されたエリヤは、部屋に入ったとたん打って変わって機嫌良さそうにする彼女に再び驚く。

「ほら、いろいろ買ってきたのよー。これなんてどう？ ルルド縫製社のシュミーズ。木綿だけどこの切り返しのレースとか、なかなかいいと思うのよね。こっちはコットよ。で、上からこのジューブスカート着て。赤と茶の格子縞で派手じゃないのに華やかで可愛いでしょ？ 上着はそれに合わせて梔色にしたのよどう？」

連射式の銃みたいにしゃべりつつ紙袋から服を出していく彼女に、エリヤはたじろいだ。

「あ、その、うん可愛いと思う……けど、あなたは、誰ですか？」

なんだかともって親切に服を揃えてくれた人だとはわかる。

彼女はきよとした表情で応えた。

「さつき喫茶店でフィーンと会ったでしょ？ あたしはフィーンの家族でルヴェっていうの」

髪の色こそ同じだが、顔立ちは似ていないので二重にびっくりした。

でも世の中に似てない兄弟などごまんといるのだ。

「じゃ、外出てるから着替えてねー」

エリヤも自分の名前を名乗った所で、ルヴェはそう言って部屋を出て行った。

取り残されたエリヤは、寝台に広げた見慣れない衣服をじっと見下ろした。

頬をつねってみる。

でもやっぱり目の前から古風すぎる衣服は消えてなくならない。

夢ではないようだ。

ため息をつきながら、言われた通りに衣服を身につける。サイズ

もぴったりだった。きつと着替えさせてくれたのもルヴェエなのだろう。が、裾の長い上着を羽織ったものの、帯の結び方がよくわからなかった。

さすが100年前の服。

そう思った瞬間、自分がこの荒唐無稽な状況を受け入れつつあることに気づいて、泣きたくなった。

どうしよう。

でもどうしようもない。

夢ではないのなら、生きていかななくてはならない。生きるためには、その場所になじまなければ。

そのためにも、まず服を着ようとエリヤは思った。

だから廊下を覗き込んで、そこで待っていたルヴェエに声をかけたのだ。

「着替え終わったの？」

「ううん、あの、帯の結び方が良くわかんなくて……教えてもらえませんか？」

こんな古風な服を着るのははじめてだ。そう思ってお願ひしたのだが、ルヴェエはちょっと驚いた表情になる。

「あたしで良いの？」

変なことを聞くなと思いつつうなずくと、ルヴェエはちょっと顔を赤くしながら部屋に入ってきて、帯を結んでくれた。

「こ、こんな感じで結べばいいわ」

ルヴェエは鮮やかな手つきで、左脇の辺りに蝶結びを作ってくれた。エリヤはこんな可愛い女の子の子供の服を着たのが久しぶりだったので、少し気分が浮き立つ。

「ありがとう。そうだ、ここに運び込まれた時に着替えさせてくれ

たのもルヴェさんなのかな？ お礼も言わずにごめんなさい」  
改めてルヴェに礼を言うと、なぜかルヴェは慌てる。

「や、あの、違うの。あたしがしたわけじゃないのよっ！」

「え？ じゃあまさか……グレイブ、さん？」

本当にグレイブが着替えさせたのか？ 真つ青になりかけたエリヤだったが、それは第三者の声が否定してくれた。

「違うよ。僕なんだ」

「え？ そうなんです……か……」

よかったとは言えなかった。

自己申告をしたのは、階段を登ってきたフィーンだったからだ。

「おおおおお、お、男の人に……っ！？」

自分はやっぱり男性に着替えさせられたのか！？ あまりのことにエリヤが愕然としてみると、今度はルヴェが慌てて訂正してくる。

「違うのよエリヤ！」

「えええ？ やっぱりルヴェなの？」

「いや、あたしじゃなくって、その、誤解してるのよエリヤは！」

「何を誤解？ やっぱり男のフィーンさんに……」

「だからフィーンは姉で、僕は弟なの！」

告げられた真実に、エリヤは一瞬頭がついていかなかった。  
フィーンが女？

エリヤはフィーンを振り返る。

後を追ってきたらしいグレイブがフィーンの背後に立っているが、確かに比べてみたら、フィーンは男性にしては華奢に見える。

そして柔らかな笑みを浮かべて謝罪してくれた。

「まぎらわしい格好してごめんね、姉弟そろって」  
次にエリヤはルヴェを振り向く。

自分より少し背は高いものの、長い髪の毛も自前っぽい上、エリヤよりもよっぽどドレスっぽい古風な衣装が似合っているルヴェ。だいたい、胸のあたりも膨らんでるじゃないかと、エリヤはじーっと注視してしまう。

それに気づいたルヴェが、エリヤの手を掴んで自分の胸に押し当てさせた。

明らかに布をぎちぎちに詰めたような堅い感触に、エリヤは目を丸くする。

「……それは、趣味？」  
ぐるぐると考えた末に、エリヤはそう尋ねた。

「似合うでしょ？」  
ルヴェは魅力的な微笑みを浮かべて、堂々とそう答えたのだった。

### 3章 貴方のお名前教えてください 6

ようやく着替えたエリヤは、グレイブによって外へ連れ出された。グレイブとフィーンが協議した結果、グレイブが職場へ行くついでにエリヤの身元を調べてみるようになったのだ。

……みんなとても親切だ。

突然「別世界に放り込まれた」と感じていたエリヤは、少しほっとした。

けれどどこか心許ない感覚は払拭しきれない。

全てが夢のようなのだ。

あきらかに時代が違う服を着て、煉瓦の石畳の道を歩いて、そして女の子だと思ったら男の子でその姉は中性的な青年にしかみえないのだから。

けれど少しずつでも認めないわけにはいかなかった。

ほおをつねっても痛い。念のため手の甲をつねっても痛かったし、夢だと思いたくても一向に覚める気配がない。

なにより、腕を掴むグレイブの手の感触。こんなにリアルで、体温をしっかりと感じるのだ。

(これは夢じゃない)

エリヤは観念してその事実を認めた。

(でもどうしてこんなことに)

何かの魔法の作用とかで過去に飛ばされてしまったのだろうか？  
けれど魔力の乏しいエリヤに、自分でそれを検証することも難しい。



それよりも切羽詰まった問題がある。

誰も自分を知る人間もいない、家もない、お金もない、どうやって今後生きていけばいいのだろう。生活基盤がなければ、元の時代に戻る方法さえ探せないではないか。

（元の時代……か）

けれど思い出すのは、学校での同級生の冷たい態度だ。

目的があつてエリヤは学校へ通つていた。けれど、自分は本当に戻りたいのだろうか。

戻つても待つてゐるのは、退学かもしれない。

銃技師になる目的を失つて、エ・レント市の祖父母の元へ帰つた後……自分はどうするのだろうか。

エリヤはふつと笑みを浮べた。

この時代なら、まだ魔術は存在はしていても忌むべきものという扱いだ。魔力がなくても後ろ指をさされることはない。むしろ魔力がない方が生きやすいはず。

まさか、学校でのことに堪えかねて自分はこの時代に落ちてきたのだろうか？ とエリヤは思った。

誰にも魔力の有無で貶められない、そんな場所へ逃げたくて。でもここでは、銃を造ることはできないだろう。

「それも、いいかな……」

エリヤは独り言を呟く。

初めは父のようになりたいという情熱があつたから、学校へ入つた。けれどももうこだわらなくてもいいのではないか、という思いはあるのだ。

銃は好きだつた。

なにより父に喜んでほしかったから、この道を選んだ。

けれどこんな風に耐えてまで道を進んで、ほんとうにいいのかわからなくなっていた。

だから父の墓へ行つたのだ。自分はこのまま頑張るべきなのかどうか、教えてほしくて。

本当は、もう頑張らなくて良い。逃げてもいいのだと誰かに言うて欲しくて。

けれどそんな風に言ってくれる人などいるわけがない。

「ここだ」

いつのまにか足下を見つめて歩いていたエリヤは、グレイブの声に顔を上げる。

そして見覚えのある建物に目を見開いた。

建てかえられることなく、エリヤの生きている時代にも使われ続けていた数少ない建物の一つ。四角い無骨な建物の、公安官庁。

「こ、公安……官？」

思わず指さして問いかけたエリヤに、グレイブはなんてこともないようにつなずいた。

「そつだ。俺の職業は公安官だ」

### 3章 貴方のお名前教えてください 6 (後書き)

ようやく拾い主の職業がでてきました……。

毎度スロースターターですみません。

読んで頂きありがとうございます。

### 3章 貴方のお名前教えてください 7

公安官とは治安維持を行うお巡りさんのことだ。

グレイブの職業を知ったエリヤは、銃を無くして良かったと思っただ。

記憶によれば、一〇〇年前の世界では、まだ魔法を扱う銃など出回っていない。

どころか、魔法は忌まれている時代だ。

銃を持っているだけでも怪しまれるだろうに、魔法に関わっていなうな代物と知れたら、逮捕されるどころだつた。

不幸中の幸いだと思いつつ、さくさく公安官庁へ入って行くグレイブに、エリヤはついていく。

白い石を積み上げて作られた公安官庁は、中へ入るとひんやりとした空気に満たされていた。

外が春の陽気といつていい暖かさだったので、エリヤは一瞬身を震わせた。

勤務している人間も寒いと感じているのだろう。入つてすぐの横長のエントランスの両脇にある暖炉では、薪が燃やされていた。

エリヤはその光景にじつと見入つてしまふ。

一〇〇年後の公安官庁では、実際に薪が燃やされることはない。そもそも暖炉すらない。代わりに魔法で暖かく保たれているのだ。パチパチと爆ぜる火の粉にすら、違和感をおぼえる。

「エリヤ」

呼ばれて振り返ると、エントランスの奥にある階段の前にグレイブが移動していた。

慌てて彼を追いかける。

グレイブはエリヤに短く「二階だ」と告げて階段を上り始めた。ついていくエリヤは、時折すれ違ふ職員の行動に首を傾げた。

グレイブと同じように黒緋の外套を着ているか、内側に黒っぽいベストを着用しているのか、彼らが公安官庁の職員だというのはわかる。黒緋の服が、この時代における公安官庁職員の制服なのだろう。

が、その職員達がみな、立ち止まってグレイブに会釈していくのだ。

グレイブの方は小さくうなずき返すだけで、足を止めることはない。むしろエリヤの方が申し訳ない気がして、彼らに頭を下げ下げ通り過ぎる。

そして上がった二階には、沢山の机が四つの区画に分けて並べられていて、座って書類を書いている者や、話し合っている者など様々な職員達がいた。

グレイブは迷わず右端の区画へ近づく。

と、書類をめくっていた若い男性職員に声を掛けた。若い男性職員は、慌てた様子で近くの棚へ走って行き、何かの冊子をいくつか抜き出した。それを捧げ持つような腰の低さでグレイブに渡す。

どうやらグレイブは、公安官庁の中でも高い階級を持っているらしい。

グレイブは当然のように受け取ると、フロアの隅に置いてあるソファセットにエリヤを座らせ、自分も向かいに着席する。

そのまま無言で冊子をめぐりはじめた。

「……………」

何を調べているのかも説明はない。

どうやらこのグレイブという人は、思った以上に口数の少ない人  
のようだ。

だから何をしているのか気になったエリヤは、勝手にめくってい  
る冊子を覗き込んだ。

一頁ごとに似顔絵と、説明書きが記載されている。写実的な似顔  
絵は、十代の女性のものばかりだ。名前と年齢、出身地の他『失踪  
日』や『失踪場所』の項目もあった。

行方不明者のリストのようだと思った所で、突然グレイブが顔を  
上げた。

「おまえ……」

「うわはいつ！」

覗き見たことを怒られるかと思ったエリヤは、飛び跳ねそうにな  
る。

「年齢は？　といっても出生地が分からないくらいなら、覚えてい  
ないか」

が、グレイブはぶつぶつと独り言をつぶやいて、さらに別な冊子  
をめくっていく。

決してエリヤの似顔絵など、見あたらないのに。それが申し訳な  
くて、エリヤは考えながら告げた。

「あの、誰かに十六くらいって言われたような記憶がつつすら……」  
「そうか。他に覚えていることがあれば吐け」

吐けと言われて、エリヤは尋問されている気分になる。

「いえ、その。生まれ故郷が田舎っぽかったようなことぐらい、か  
な？」

「倒れる前の記憶はどうなんだ？」

冊子をめくりながらのグレイブの問いに、エリヤは「うっ」と返事に詰まる。

「なんか、ずっと暗い場所にいたような……」

本当のことは言えない。だからエリヤは曖昧に濁そうと思ったのだが、突然のことで想像力がわいて来ない。

だから一番暗そうな場所を思い出しながら、明るくないのでよく周りのこともわからなかったと誤魔化そうとした。

「鉄の棒みたいなのが転がってて、他にも人がいたような」

参考にしたのは学校の実習室だ。

術を失敗させた時のために、魔術で作った外壁で覆った地下室である。そこで、銃に魔術を絡ませる金属を扱うのだ。

授業中は明るさが保たれているが、居残りとなると、広い精錬場全体に明かりを灯してくれることはない。

エリヤは夕暮れの光さえ入らないその場所で、薄暗い人工光の下作業することが多かった。でなければ、作品を作り上げることができなかつたから。

魔力の少ないエリヤは、必要な魔力を注ぎ込むのに人の倍は時間がかかるのだ。

「鉄か……」

「なんか工具みたいのも転がってたような」

曖昧な説明に、グレイブはどこかの工場にでもいたと勘違いしてくれたようだった。

その後は黙って冊子をめくりつづけた。

エリヤは手伝いたいと思ったが、公安官庁管理のものなので、部外者には見せられないと言われてじっと待つことにする。

### 3章 貴方のお名前教えてください 8

ただひたすら待ち続けるエリヤの様子を見かねたのだろう。年若い亜麻色の髪の公安官が、エリヤに飲み物をくれた。紅茶だ。

「退屈じゃないかい？」

声をかけてくれたその人に、エリヤはどう答えていいか戸惑う。ありもしない記録を、グレイブが調べているのはエリヤのせいなのだ。本当の事を言うわけにはいかないから。

そうでなくとも、自分の身元を探してもらっているのに、退屈などとは口が裂けても言えない。

「待つのは、苦手じゃないので……」

困った末にそう答えると、亜麻色の髪 of 公安官は「ああ、答えにくいことを言ってしまったね」と苦笑う。

「この方は、ただでさえ口数が少ないのに、集中するとほんと寡黙になっちゃうから。終わるまで、手持ちぶさただろうから紅茶でも飲んでるといいよ」

「あ、ありがとうございます」

「ジェイスって言うんだ。何か用事があったら声をかけてくれるといい」

ジェイスと名乗った公安官は、グレイブに「決裁をお願いします」と言って書類の束を渡していく。

受け取ったグレイブは、一端冊子を脇によけ、書類に目を通してサインしていく。



その作業が終わる頃、見計らったように再びジェイスがやってきて、エリヤにおかわりとグレイブに珈琲を差し出し、決裁が終わったらしい書類を引き上げる。

そして立ち去る前に、ジェイスがグレイブに尋ねた。

「副長官殿、迷子の身元でもお探しなんですか？」

副長官と聞いて、エリヤは目を丸くする。

どう見たって二十代半ばにしか見えないグレイブが、副長官？

と同時に、副長官という役職とグレイブという人物の名前で、何かを思い出しそうになった。

その驚きをエリヤは口に出さなかったのだが、グレイブにはその驚きが伝わってしまったようだ。

彼は自分とそう年の変わらない公安官を曖昧な言葉で追い返すと、ぼつりとエリヤに教えてくれた。

「俺は貴族の出でな」

「ああ……なるほど」

100年前は貴族制度の縛りがきつかったはずだ。それこそ、二十代そこそこの若者が、その家名だけで長く勤めた職員を追い越し、副長官になれるほど。

エリヤの時代にも王家は存続しているし、貴族もいる。けれど完全な上下関係や特権はかなり薄れているので、職に加味されることはほとんどないのだ。

妙なところで時代の違いを感じていたエリヤに、グレイブが尋ねてくる。

「生まれ故郷にいた頃、自分が何歳だったか覚えているか？」

その手元を見ると、五つあった冊子は閉じて重ねられていた。お

そるべき速さで見終わったようだ。

「たぶんその……五つぐらいだったような」

エリヤの一家は、一度田舎町から王都へ引越している。それを思い浮かべながら言ったから、嘘だとはわかりにくかったのだろう。

「もし失踪時が五歳頃だとすると、ますます探すのが厄介だな」  
グレイブは淡々とつぶやいた。

厄介というより、どんなに探したってエリヤの家族など見つかるわけがないのだ。だから身元を調べる労力を裂いてもらうのが心苦しかったエリヤは、諦めてくれた様子にほっとする。

が、そこで肝心なことに気付く。

そうすると、自分は今後、孤児院にでも入ることになるのだろうか。でも十六という年齢では孤児院に入るわけにもいかなさそうだ。ということとは、仕事を探さなければならぬ。

この見知らぬ世界で生きて行くために。

「あの……あたし、どうしたらいいんでしょう?」

公安官庁で、身元不詳者の職業斡旋などしてくれるのだろうか。そもそも、住む場所もない。

エリヤの胸に不安が湧き起こる。

でも公安官の仕事に詳しくはないが、それは管轄外という気がする。とすると、このまま放り出される可能性もあるわけで。

さーっと青ざめたエリヤだったが、頭を軽くたたかれ、グレイブの顔を見る。

大丈夫だとはげまされたのかと思ったが、彼は微笑んでもいなかった。

「外へ出るぞ」

しかも、答えてもくれない。

不安がいや増すが、頼れそうな相手はこの人しかないのだ。エ  
リヤはグレイブについて部屋を出た。

### 3章 貴方のお名前教えてください 9

口数の少ない彼のことだ。もしかしたら、そういう職業斡旋所へでも連れて行くこうとしているのかもしれない。

そう思ったエリヤだったが、公安官庁を出て、それほど離れていない路地裏でグレイブが足を止めたため、首をか上げた。

まっすぐに自分を見る視線から、何か話があることを察してそれを待つ。

するとグレイブはゆったりとした動作で、コートの内側から一丁の銃を取り出した。

まさか撃たれるのか？

そう思ったエリヤだったが、白地に金の装飾過剰な銃を見て思わず叫んでしまった。

「あっ！」

なくしたと思っていた形見の銃だ。

何故グレイブが持っているのだろう。まさか倒れたエリヤを見つけた時、取り上げられたのか。そうに違いない。

「この銃のことは覚えて居るのか？」

グレイブの声に冷たく鋭い響きを感じ、エリヤは背筋が凍るような思いをする。

そうだった。

エリヤは記憶喪失だとグレイブ達は思っているはずなのだ。

なのに銃を持っていたことを覚えていたことで、嘘だと気づかれたらどうか。そうしたら、公安官のグレイブに「牢屋行き」にされるのだろうか。怯えながら、エリヤは今さらながらに誤魔化す。

「あの、うつすらと……大事に持っていたことは」

「ならば銃にお前は関係が深いのだろうな。他の銃も見ていけば、もしかするとお前の記憶も戻る可能性はある」

「そうですか……ね？」

なにせ本当の記憶喪失ではないのだ。

「そのついでに協力をしてもらおう」

グレイブはこれと似た銃の製造者を捜しているという。

「おそらくこれは特殊な銃だ。魔法を撃ち出すための細工や機関、そして魔法が施されている……非常に危険な物なので製造の差し止めと生産者を逮捕する必要がある。お前の記憶が戻れば、製造場所や製造者について有力な情報が得られるはずだ」

エリヤは手にまで冷や汗がにじみ出す。

父の形見と同じ銃。それすなわち、一〇〇年後と同じ技術が使われた代物ということだ。

エリヤ以外にも、過去世界へ来ている人間がいるのか？

そうは思ったが、探しようもない。

けれど銃が見つかってしまった以上、グレイブはきつとエリヤの記憶を取り戻す努力を続けるだろう。犯罪者を逮捕するために。

「俺はこの銃の製造者突き止め、王都の平和のため排除しなければならぬ。その協力をするならば、お前がしかるべき後見人を得るまで面倒をみよう」

続いた言葉に、エリヤは目を見開く。

協力をすればその間グレイブがエリヤの生活について面倒をみってくれるということだ。右も左もわからない時代に滑り落ちた今、彼に保護してもらおうのが今は望ましい感じがする。

それにグレイブには、既に一宿一飯の恩義がある。

普通の火薬式銃しか存在しないはずの時代に魔法銃が犯罪に使われたならば、確かに市民生活も脅かされていることだろう。彼に協力して悪いことはない。

あと心配なのは『記憶喪失が嘘』だと彼にばれないようにすることだけだ。

「わ、わかりました」

うなずくと、グレイブがほっとした表情に変わる。

そうして穏やかな顔をしていると、グレイブは思ったよりも優し

げに見えて、エリヤは思わず注視してしまった。

「では、今日からこのグレイブ・ディーエがお前の後見人だ」

グレイブ・ディーエ？

グレイブから差し出された手を握り返しながら、エリヤは頭の中  
でもやもやとしていたものがかみ合った音を聞いた。

魔法と銃。

そのキーワードが、グレイブの名と副長官という役職に感じた違和感と組み合わせり、エリヤに重要なことを思い出させる。

グレイブ名を、別な場所で見ることがあった事、を。

(そうだ、あの人も確か100年前に生きてた人……)

エリヤの頭の中では、あらゆる書物に定型句のように記された一文が蘇っていた。

それこそが後の世で悪鬼と呼ばれ、忠誠を捧げた主ヴィオレント王の手により処刑された公安副長官グレイブ・ディーエであった。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 1

エリヤの覚えている限り、グレイブ・ディーエという人物は、人の心を持たない犯罪者として数々の歴史書に記されている。

時は一〇〇年前。魔力を応用した技術革新時代の初期。

様々な魔力を扱った発明品が生まれては、そのほとんどがディーエ公安副長官に潰されていった。

彼は当時の主力思想であった『魔力を持つ者は悪である』を体現するような人物だったと書かれている。

その印象を人々に最も植え付けたのが、都市で生活を営んでいた銃技師達を『魔力を持っていた』という理由で無差別に虐殺していた事件だ。

あまりの残虐さゆえに、それまで魔力を厭う習慣を持っていた人々でさえ魔力持ちを庇うようになったという。

ある意味、歴史転換のきっかけを作った人物でもある。

「そそそ、そんなおつかない人の、家……なわけ？」

思わずエリヤは、戻ってきたグレイブの部屋を見回してしまふ。

けれど極悪人の部屋が必ず赤と黒の配色などではないように、グレイブの家はいたって普通というか、むしろ渋い趣味の飴色の家具で統一された部屋だ。カーテンの色すらモスグリーンと渋さが極まっている。

だが、同姓同名の別人という可能性は限りなく低い。

本人が言った通りに貴族ならば「ディーエ」の家名を持つ人間に限られ、さらに王都に住む「副長官」の肩書きを持つ人間となると、

皆無だ。

「ありえない……」

思わず呻いてしまう。

自分が過去にいるらしい事だけでもエリヤは一杯一杯だったのに、保護者が世紀の極悪人（の疑惑がある）ときた。

確かにエリヤも魔力が少ないせいではいじめられ、魔法力の高い人間は意地の悪い人間ばかりだという偏見すら持っている。

が、それでも虐殺しようなどと思うことはない。

銃技師だった父や、父の死後もエリヤを気に掛けてくれたその友人達は総じて魔力が高い。虐殺するということは、そんな人たちの事まで否定することだ。

けれど史実によると、グレイブ・ディーエはそんな恐ろしいことを実行したのだ。

「しかも銃が絡む事件って」

銃技師を無差別に虐殺していった事件を連想させる。

ぞつとしたエリヤは、ふるふると首を横に振った。

「いやいやいやまさかそんなばかな。きつとまだ夢を見てるのよ絶対」

そう思っただけ頬をつねった……痛い。

エリヤの目に涙が浮かんできた。

ここが過去の世界でなければいいのに、と思った。

どこか魔術式の発達が遅れた外国だったら。

こんな不安に思うこともなく、素直にグレイブになにもかも打ち明けてしまえるのに。

さっきまで、この時代なら自分は悩みから解放されると、楽観視



しようとしていた事が嘘みたいだ。

けれど今日見たものも触れたものも、全てがエリヤに『過去の世界だ』と訴えてくる。

となればいずれ、自分を助けてくれたグレイブが何らかの理由で虐殺を起こし、王命によつて死刑にされるのだ。

エリヤは身震いした。想像するだけで恐ろしい。

そんなことを、保護者を買って出てくれたグレイブにして欲しくないと思う。

けれど彼が本当に、目的のためならば何人殺しても仕方ないと思うような人だったらどうしようとも思う。

自分が卵とはいえ銃技師だと知ったら、彼は自分も殺すのだろうか。

そんな自分が、殺人鬼みたいな人の家にい続けて無事でいられるのだろうか。

恐かった。

でも誰かに、話すわけにもいかない。

未来のことだと言って、誰が信じてくれるだろう。

頭がおかしいと思われたあげく、捨ててくれたグレイブ達にまで捨てられてしまう。そして知人の一人もない世界に放り出されて、生きて行けるのか。

一〇〇年前の世界の生き方なんて、何もわからない。ずっとエリヤは銃のことだけしか勉強してこなかったのだ。

不安でたまらない。

でも泣いたって仕方ない。誰かが助けてくれるわけがないのだ。

だからぐつと唇をかみしめ、目をしばたいて滲んだなみだを乾かそうとしていた。

その時、部屋の扉が開いた。

「……………」  
当のグレイブが、扉を閉めてエリヤに近づいてくる。

まさか、もうエリヤに不審感を抱いて、殺しに来たのだろうか？  
エリヤはびくつかないように堪えていたが、

「顔色が悪い。恐ろしい記憶でも思い出したか？」  
グレイブはそう言って彼はエリヤの手首に触れた。

彼が触れたのは手首の横だ。  
そこには小指側にはつきりと残っている、一文字に裂けた痕がある。

これはエリヤが銃の作成中に失敗して負った怪我の痕だ。

自分でもあまり意識していなかった。いつもは、銃作製時の怪我を防止するための手袋を履いているからだ。  
グレイブの指先が触れる自分の傷痕を見て、エリヤはまさかと思う。

彼は、エリヤのその傷を虐待かなにかの痕だと勘違いしているのか？

急に彼を疑ったことが申し訳なくなった。  
勘違いとはいえ、不当に扱われた人に優しくすることを知っている人なのだ。

この人が……望んで虐殺者になったのだとは思えない。

「ううん。大丈夫、ありがとう」

だから礼を言っただけで笑ってみせた。  
するとグレイブはそっと、触れるか触れないかというほどささやかにエリヤの頭を撫でてくれる。

「大丈夫そうだな。では寝ろ」

簡潔に言っただけでグレイブは部屋を出て行くこととする。

エリヤもうんとうなずいて見送ろうとし

はたと気付く。

「あ、あの、ここの部屋ってグレイブさんの……」

「確かに俺の部屋だが、しばらく使っただけで良い。見知らぬ場所にいるのだから、眠る部屋ぐらい慣れた場所がいいだろう」

グレイブの言葉に、エリヤは目を見開いた。

心細いだろうエリヤのために、一つでも見慣れた場所に居させようという配慮だったのだ。知らない場所に放り出されたエリヤの気持ち、優先しようというのだ。

なんて繊細な気遣いができる人だろう。

感動のあまり呆然とするエリヤを、グレイブは目を細めて見たあと、ふいに何かを思い出したように部屋の書き物机の引き出しを開けた。

取り出したのは白い手袋。

あ、と口にしてしまったエリヤに、グレイブは手袋を渡してくれる。

「お前の物だ。手を隠しておきたいなら、これを使えばいい」  
それから改めて部屋から出て行った。

エリヤは手袋を手にしたまま、グレイブの姿が消えた後も扉をじっと見つめてしまった。

「やっぱり、あの人が虐殺者なんて信じられない」

こんなに優しくて親切な人なのだ。

では、何か理由があるのだろうか。考えられるのは、魔力持ちに對して異常なまでの恨みがあるとか。家族を殺されたとか、恋人を失ったとか……。

思い浮かべた可能性に、エリヤは嫌な思い出を掘り返しそうになった。首を振って追い払う。

そんなことよりもグレイブの起こす歴史的事件だ。

グレイブが処刑されるような事態になった時、その庇護下にいる自分は一体どうなるのか。

もちろん虐殺事件など起こしてほしくはないが、正直に「あなたは将来虐殺を起こす予定で、それを止めてほしいのだ」なんて言うわけがない。

「どう説明しろっていうのよ……」

実はあたし、未来から来ましたとか言ったら、記憶喪失の可哀相な子から、一気に電波の頭のおかしい人間へ印象がただ下がることうけあいだ。

「とにかく、確かめない」と

本当に『彼』なのかどうかを。

でなければ、グレイブを止めて安全を確保すべきなのか、ここから逃げるべきなのかもわからない。

つばやきながら、エリヤは手袋をぎゅっと握りしめた。

## 4章 貴方の捜査に協力します 2

部屋を出たグレイブは、廊下の壁に背を預けていた人物と目が合う。

「悪魔のような、なんて言われてる公安副長官様が、お優しいことくすくすと笑いながら言ったのは、波のようなフリルだらけの服を身につけたルヴェだ。

グレイブの方は悪魔のよう、と言われる事には慣れている。

副長官という役職を持つているくせに、現場で最も魔力持ちを捕縛しているのはグレイブなのだ。その捕縛した相手をその場で射殺する人数が多いのもグレイブである。

彼とて、むやみに魔力持ちを殺しているわけではない。魔力の暴走が始まった時点で、部下達のみならず、近隣の住民までもが巻き添えになって死ぬ可能性があるかと判断した時のみ、容赦できなくなるだけだ。

部下の多くはそれを理解しているし、グレイブが最も魔力暴走の兆候に敏感だからこそ、彼が魔力持ちが関わる事件で現場に出てくることを歓迎もしている。

が、狩られる側や、他の市井の人間にそこまで理解はできない。だからこそこの呼び名だ。

グレイブはルヴェの挑発つきあう必要はないと判断し、通り過ぎようとした。

この少年は、人をからかう悪い癖があるのだ。

多少なりと魔力がある彼は、昔そのせいで虐待されたらしく、今

に至っても拭いきれない不安感が心の底に残っているのだろう。だから揺らぐ気持ちを隠そうとするため、無意識におどけた態度をとる。

この女装も、虐待から逃げるために姿を変えるために始め、それ以来癖になったものだとフィーンに聞いた。

気の毒なことだ、とグレイブは思う。

だが親切に付き合う気はなかった。それは姉フィーンの役目だ。

「ちよつ、また無視して！」

いつも通りルヴェエは気分を害したようだ。

「そんなんじゃ振られるわよ！」

しかし予想外の単語がルヴェエから飛び出し、グレイブは首を傾げた。

「振られる？」

一体その主語は何で、誰が、どのような理由で『振られる』のか理解できない。

何のことだと説明を求めてルヴェエを振り返れば、ルヴェエはげっそりした表情でこちらを見ていた。

「え、だってグレイブが人を拾ってくるなんて今までなかったし、女の子だし。そもそもグレイブ、東界隈にはもっと小さい女の子だつて倒れてたりするはずなのに、今まで綺麗に無視してきたじゃないのよ。あたしが大変だった時でさえ、あんな優しくなかったしさ」ルヴェエの話から、グレイブはようやく『振られる』の意味がわかった。

たしかにエリヤを拾った辺りは治安が悪く、浮浪者や行き倒れも多い。女子供が死体になって転がっているのも珍しくはない場所だ。

けれど今まで、グレイブがそこで倒れている人間を拾って来たことなどなかったから、ルヴェは訝しがつているのだらう。なぜエリヤを特別扱いしたのかと。

恋情だと曲解したのは、グレイブが彼女を拾った理由を話していないからだ。

そして今後も話す気はないので、やはり取り合う必要はないと断じる。が、

「それとも、捨てられたらしい様子の子を見過ごせなかった？  
自分を見るみたいで」

微笑むルヴェの表情に、グレイブは不快感を覚える。

「それを話したのは、フィンか？ 子供に余計なことを教えるなと釘を刺しておくでしょう」

言い捨てて立ち去ろうとした。

が、その言葉にルヴェがさすがに慌てたらしい。

「や、ちょっと待って！ 姉さんから無理に聞き出したのは私なのよ！ ごめんってば！ もう絶対言わないから！」

腕にすがりついてくる少年の必死な表情を見れば、本心からの言葉らしいとわかった。

だからフィンに告げ口することは止めておこうと、グレイブは思いながら職場へ出かけた。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 3

翌日、エリヤはフィーンに用意してもらった朝食を前に、謝った。

「あの、手伝えなくてすみません、フィーンさん」

夜中までいろいろと思いついて寝付けなかったエリヤは、朝早く起きられず、フィーンに手伝えなかったことを謝った。

エリヤはこの家に善意で置いて貰っているだけで、お客ではないのだ。

手伝うのが筋だろうと思ったのだが、

「昨日の今日じゃないか。自分のこともよく分からないんじゃない不安だっただろう？ 気にしないで二・三日はお客様扱いされて。お手伝いとか気にするのは、落ち着いてからでいいよ」

ほわんとするような柔らかな笑みと共にそう言われ、エリヤはフィーンの優しさにときめいてしまった。

「そうそう。そもそも姉さんは料理とか作るの好きだから、こういう店やってんだし」

笑いながらラムルを食べるルヴェの頭を、すかさずフィーンがはたく。

「いたっ」

「お前はお客じゃないんだから手伝いなさい。そもそも、先週から口を酸っぱくして注意してた部屋の掃除は済んだのかい？」

フィーンに小言を言われ、ラムルを急いで食べ終えたルヴェは、脱兎のごとく逃げ出した。



「あ、あの私、出勤してくる！」  
バタバタという淑女らしくない足音に続いて、ボタンと扉の閉まる音。

あつという間にいなくなったルヴェの皿を片付けながら、フィーンがため息をついていた。

「あれ、ルヴェさんて外でお仕事してるんですか？」  
尋ねると、フィーンがうなずいてくれる。

「女の子の格好のままでも出来るからって、ウエイトレスの仕事をしてるんだ」

やっぱりこの時代、十六歳ぐらいなら仕事をしなくてはならないようだ。

エリヤはそのうち職を探そうと考えつつ、食事を終えた。

「では行くぞ」

先に食べ終え、珈琲に口を付けていたグレイブがそう言って立ち上がる。

エリヤも、ルヴェに『外へ出る時は絶対必要！』とされていた帽子を手に立ち上がる。

「あ、そういえば後片付け……」

「いいんだよ。早く身元をみつける方が先だ。気にしないで」

片付けをどうしようと言う前に、フィーンはエリヤの皿をカウンターの向うへ取り上げてしまった。

そしてエリヤが被ったベルベットの黒い帽子の位置を、そっと直してくれる。

「ルヴェはあれでもセンスがあるからね。この帽子、エリヤによく似合っているよ」

確かにルヴェが揃えてくれた黒い帽子は、白いレースのリボンに淡紅色の八重咲きの造花が飾ってあって、とても綺麗だった。

そんな帽子が似合っているとわれ、エリヤは思わず赤面してしまいそうになる。

「気を付けて行くんだよ」

柔らかく微笑んで見送ってくれるフィーンに、エリヤはときめく。そして『フィーンが女の人じゃなかったら恋しそう』としみじみ思ったのだった。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 4

馬車や人が行き来する往来へ出たエリヤは、グレイブを追いかける。

今日から早速、捜査協力をするのだ。

エリヤは少し先で立ち止まっていてくれたグレイブの元へ歩きながら、ふと疑問に思う。

なぜフィーンとルヴェはグレイブと一緒に住んでいるのだろう。

足早なグレイブに半歩遅れつつ歩きながら、エリヤは試しに尋ねてみた。

「親戚なんですか？」

するとグレイブは、案外あっさりと答えてくれる。

「いや、訳あって預かった。いつまでかは分かんが同居する相手のことだ、知っておいた方がいいだろう」

そしてグレイブは歩く速度を緩め、行き交う人の波から外れた小道に入ると、とつとつと語ってくれた。

ルヴェは多少なりと魔力を持っているらしい。しかし自覚なく暴走させそうになった所にグレイブが居合わせたという。

「幸いすぐに収まったものの、本来ならば監獄離宮に幽閉するべきだった。一度暴走させた経験をもつ人間は、再度同じことを繰り返す可能性が高いからな」

「そうなんですか……」

エリヤの暮らしていた100年後の世界には、監獄離宮のような

ものはない。

魔力を暴走させやすい人には、それを抑える術式を刻んだ物を身につけさせるからだ。

これは魔術式が確立して、わりと早い段階で整えられた制度だ。これがないと、確かに他の人を巻き込んで惨事を引き起こす可能性が高いからだ。

しかしそういった物が知られていない時代ならば、確かに一カ所に押し込めるしかなかったのだろう。

— 当時監獄離宮は、その土地の特性なのか、魔力の発動を抑える唯一の場所として、知られていたらしいから。

「しかし家族がいるのならば、引き離すのも逆に本人の精神安定を崩し、再び魔力が暴走しやすくなると判断した。それにルヴェはある程度自分の力を制御できる。だから監視で留めることにした」

そこで、監視がてら同居することにしたらしい。

これだと、何かあればグレイブの家だけで被害は収まる。そして二度目が起きたなら、ルヴェもフィーンもアヴィセント・コートへ隔離されることについて諦めるだろうとも。

「ついでに家の維持も任せている」

恩ゆえに、弟思いのフィーンがグレイブを裏切ることはない。だから安心して家を任せられるのだと話してくれた。

エリヤは意外だ、と思った。

グレイブが『将来やるだろうこと』から想像するに、魔力を持つとわかった時点でルヴェなどその場で抹殺か、アヴィセント・コートに閉じ込めるだろうと思っていたのだ。

( やっぱり、魔力を持つ人を無差別に虐殺する人のようにには思えないんだけど…… )

なぜ彼が虐殺に走らねばならなかったのか、腑に落ちない。

何か切っ掛けがあるはずだ。

幸いにも、銃のおかげでエリヤは彼の捜査にくっついていくことができる。捜査協力しながら、エリヤは『きっかけ』を見逃さないようにと奮起した。

それはグレイブのためであり、今後のエリヤの平穏な生活のためでもあるのだ。

「今日はどこへ？」

他人に聞かせたくない話が終わったからと、再び大きな通りへ戻っていくグレイブに訪ねる。

「銃製造技師がいる場所。鉄の街だ」

返ってきたのは、当然と言えば当然な場所の名だった。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 5

鉄の街は、王都で唯一製鉄所がある場所だ。

そこに鉄鋼を扱う技師が集まり、それを商う商人達が店を構え、鉄製品を扱う見せや技術者ばかりが住まう地域となった。そのため『鉄の街』という呼ばれる。

やってきた鉄の街は、旧市街よりもさらにぼろぼろとした木と煉瓦を積み上げた通りを抜けた所にあつた。

この時代は、今だ石炭や薪を燃やして製鉄が行われている。そのため煙突からは黒い煙が空へと立ち上り、エリヤは煙の匂いで咳き込みそうになった。

建物も煤が張り付いているのではないかと思うような黒灰色のものばかり。煉瓦や石積み of 建築物ばかりなのは、製鉄や加工に火を使うため、万が一火事になった場合を想定してのことだろう。

一〇〇年後の煙を出さない魔術の熱で製鉄が行われる『鉄の街』しか知らなかったエリヤは、時代の違いを痛いほど感じた。

(ほんとに……過去なんだな)

もう何度思ったかしないことを、つぶやきそうになる。

しかしぼんやりとはしていられなかった。先へ進むグレイブに置いて行かれないよう、足を速めた。

「そういえば副長官って、公安官庁にいなくてもいいんですか？」

副長官というからには、長官がいるはずだ。その補佐か仕事を一部請け負うのが普通ではないだろうか。

「そうだった仕事はもうひとりの副長官がやる。俺は現場向きの人

間だからな」

確かにグレイブは、書類とにらめっこしているより、こうして周囲を威圧して歩いている方が様にはなっているが。

でも副長官が平みたいに町を練り歩いている姿というのも違和感がある。エリヤのいた時代でも、王国府の偉い役人は運転手付きの魔術駆動の車に乗って移動していたし、学校の校長ですら歩いてどこかへ行く、という姿を見たことがない。

そんなグレイブは、迷うことなく数ある店の一つに入る。

石積みみの建物で、どうやら奥に加工所があるようだ。店に入ると、金属音が微かに奥から聞こえてくる。

店の中は黒大理石のテーブルや床が印象的だが、商品棚も商品も見あたらない。

奥に店主らしき白髪交じりの髪を短く刈った男性がいた。その顔の日焼け具合や微かに火傷の痕が見て取れたので、エリヤは彼の元々の職種を察した。

鉄を扱う職人だ。

未来でも、鉄鉾を扱う職人は火傷が耐えない。魔力で熱を生み出して、加工するからだ。

けれど商品が見あたらないので、何の店なのかはまだわからない。店主の方は、ためらいなく店に入ってきたグレイブを見て慌てて立ち上がった。

「こ、これは副長官様！」

どうやらグレイブは何度かこの店に来ているらしい。しかも店主の顔が青ざめたところからして、あまり楽しい用向きではなかったようだ。

「本日はどうなさいましたか？ 私どもの店ではもうあのようなこ

とは無いかと……」

店主が立ち上がると、職人らしく黒っぽい前掛けをしているのがわかる。どたどたと駆け寄ってきた店主に、グレイブは無表情に告げた。

「今日は捜査に関わる用ではない」

「どんなご用で？」

「親戚に、一つ護身用に見繕おうと思つてな」

グレイブが顎でエリヤを示して見せる。

そこでようやく副長官登場に慌てふためいていた店主は、エリヤという付属品に目がいったらしい。更には連れていたのがエリヤのような少女だったからだろう。捜査で立ち寄ったわけではないと安心したのか先ほどまでの緊張が解け、店主の表情が商売人のそれに変わる。

「職務中ではございませんので？」

「ついでに見回りだ」

臆面もなくそう言つと、職人はにやりと笑う。

「天下の副長官様も人の子ですな」

いつもは厳しいグレイブが、親族のために規律を逸脱している事が、人間らしく思えたのだろう。緊張を解き、さきほどより柔らかい態度で「お座りになって少々お待ち下さい」と言い置き、店の奥へと姿を消す。

グレイブと一緒にエリヤが黒大理石のテーブル前に座ると、店主がいそいそと戻つて来た。

店主が両手に抱えてきたのは、銃だ。

思わず手を伸ばしてほおずりしたくなるほど、つやつやと黒光り



している。

誘惑に耐えながら、なるほどエリヤは納得した。

記憶のないはずのエリヤが、自分の持っていた銃のことだけは覚えていたのだ。昨日彼が言った通り、他の銃も見れば、何かを思い出すと思ってグレイブは連れてきたのだろう。

「それにしても可愛らしいお嬢様で。その細い指で扱えるのはこの辺りの品でしょうかね」

黒大理石のテーブルに並べられていったのは、小型拳銃ばかりだ。艶が出るまで磨かれた濃淡も様々な鉄色の砲身が、天井からつり下げられたシャンデリアの明かりにてらてらと輝いている。

いや、大型でもいけますと言いかけたエリヤは、装飾の美しさに目を奪われて言葉を失う。

「女性でしたらこういった形のも好まれるようですよ」

更に店主が追加して並べたのは、金や銀で装飾された銃だ。細かな彫刻がほどこされたり、中には宝石が埋め込まれているものもある。

この時代はまだ鉛玉を使う銃だったはずだ。発砲の衝撃で、この宝石がとれたりしないのかとエリヤは不安になった。

が、そんなことを考えながら注視していると、店主はエリヤが綺麗な銃を気に入ったと思ったのだろう。

「どうぞ持ってみてください」

と言って差し出してきた。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 6

渡されたエリヤは、いそいそと銃を手にとって壁に向かって構えてみる。

一〇〇年前の銃はさすがに重さが違った。鉛の弾を火薬で飛ばすために頑丈に作られているためか、ずっしりと腕に重みがかかる。

けれどこの重さも安心感があつた。

久しぶりに持った銃に心浮き立ったエリヤは、両手の平の上に置いてみて、その重さをしみじみ確認していたが、ふと視線を感じて振り返る。

店主があっけにとられた様子でエリヤを見ていた。

エリヤははっと我に返る。  
しまった。

何か一〇〇年前の世界では異質なことでもしてしまったのだろうか。

「お嬢様は銃に慣れておられるんですね」

店主はエリヤの構え方を見て、驚いたようだ。

確かにエリヤのような少女が、そうそう拳銃を撃つことなどないのだろう。エリヤの時代でも、銃技師になるため学校に行かなければ、そうそう銃など手に持つ機会はないはずだ。

驚かせたのはそっちの理由か、とエリヤは内心胸をなで下ろした。

「親の方針で習わせていたらしい」

グレイブもそれとなくフォローしてくれる。

「そ、そそ、そうなんです。ただこの間、愛用してたものを川に

落として無くしちゃって」

実際はグレイブが預かっているわけだが、犯人の持つ者と同型の未来の銃だったため、返してもらえない宛はない。無くしたも同然の状態だ。

取り繕うと、店主は笑ってうなずいてくれた。

「最近には護身用にお持ちになるご婦人が多いんですよ」

そのまま店主は銃を一つ一つ説明してくれる。

昔の銃など触れる機会があまりなかったエリヤは、興味を引かれて熱心に聞き入ってしまった。

そしてつい、銃身の中を覗いてみたいと言ってしまい、慌てて誤魔化した。

「あ、その。いつも銃の手入れは家の者がしてくれるので、一度きちんとして見たいなと。おほほほほ」

「お嬢様でしたら当然のことでしょう。ただいま職人を呼びますので、宜しければ組み立てる前の状態をご覧にいきましょう」

店主は気を悪くした風もなく、席を立って再び奥へ引っ込んだ。

「お前は銃の組み立て作業でもさせられていたのか？」

グレイブがぼそりと尋ねてくる。

「なんか、思い出せそうな気がして……」

エリヤは曖昧ににごす。とりあえず記憶を掘り起こせる可能性があるあるものについては、グレイブは反対しないことはわかっている。だから今この機会に、昔の銃というものをじっくり見ておきたかった。

(この件が無事に終わった後じゃ、銃に関われるかどうかかわからないもんね)

なにせグレイブの頭の中では、エリヤは銃に関わる場所から逃げ出してきたあげく、恐怖で記憶をなくしたことになるのだ。就職先を斡旋するにしろ、後見人を見つけてくれるにしろ、銃とは関わらない場所や人を選ぶに違いない。

ややあつて、店主が戻ってきた。

一緒にいくつか部品を持った赤毛の青年もいる。手に火傷の痕や黒い煤がついているところから、青年は職人だと一目でわかった。

ただ一見すると、とても職人をやつてそうには見えない人だ。むしろ裏町で徒党を組んでカツアゲしていそうな雰囲気がある。耳に何個も付けた金のリングピアスのせいかもしれない。

ふとそのピアスに既視感をおぼえる。

じつと見つめてしまったので、青年も視線に気付いたようだ。呆れるような笑みがうつすらと浮かんだのを見て、エリヤは失礼なことをしたと恥ずかしくなつてうつむいた。

「こちらうちの職人でローグと言います。さ、お嬢さんに見せてやれ」

金ピアスの青年ローグは、さっそくテーブルの上に部品をいくつか拡げてみせる。

「ご覧になりたいのは銃身で？」

尋ねられてエリヤはうなずく。

「どうなつてるのか、一度見たいなと思つて」

さきほどぱつと見たところ、やはりエリヤが扱っていた魔術銃とは違つようだった。それに店主がしきりに「うちの銃は精度が高いことが自慢なんですよ、お嬢さん」と言っていたのだ。

確かに鉛玉をまつすぐ飛ばすのは難しそうだ。魔術銃も直線に飛ぶようにとか、拡散させるなどの術式を組み込んでしまうのだが、昔の銃の場合はどうしているのかと興味を引かれたのだ。

「これが以前作っていた型の銃身。内部の旋条を見てください」  
ややぞんざいな言い方ながらも、ローグは丁寧な言葉でエリヤに部品を一つ渡す。

筒状の部品の先を、シャンデリアの明かりに向けてのぞき込むと、内部に刻まれた浅い溝が見えた。

「この溝で弾に回転をつけることで、弾が安定して真っ直ぐ飛ぶ。そして今渡したのが、他の工房でも作られてる一般的な施条の銃身です。で、こっちがうちの工房のです」

丁寧な言葉遣いが慣れていないのか、ローグの言葉がだんだんとくずれてくる。が、次に渡された筒状の銃身を覗くと、そんなことはどうでもよくなった。

施条の溝こそそれほど多くはないが、溝がそれぞれ深さが違う。

「これをローグが開発したおかげで、うちの銃の精度は飛躍的にあがりました。発射時の反動さえ上手く流すことができれば、あとは持ち主の目次第、というほどです」

「すごいですねえ」  
と言いながらエリヤは銃身の中から目を離そうとして、ふと違和感をおぼえる。

螺旋の溝に、何か見覚えがある気がしたのだ。が、続いて店主に尋ねられた瞬間、その違和感は霧散してしまった。

「いかがです？」

とたずねられたものの、エリヤは銃を買いに来たわけではない。

困ってグレイブに視線を向けると、

「そっだな、今のをもらおうか」  
意外なことに買うという。  
もちろん店主は大喜びだ。綺麗な布貼りの箱に入れ、渡してくれる。

グレイブはその箱をあっさりエリヤに渡すと、請求先を告げて素っ気なく立ち去った。

けれど店主もそうだったグレイブの対応には慣れていたので、気が悪くした風もなく、自分も立ち上がって見送ってくれた。

#### 4章 貴方の捜査に協力します 7

店を出て十数歩ほど進んだらどうか。

見送ってくれていた職人が建物の中へ戻ったのを確認して、グレイブがエリヤに尋ねてきた。

「……………どうだった？」

大変良い品でした……………と答えてはいけない。

聞いているのは、銃の良し悪しのことではないだろう。

「えと、確かにあたし、銃には慣れていそうだなと思いました。けど、はっきりとは……………ていうか、どうしてこれ買ったんです？」

銃はそれほど安い代物ではない。

100年後の世界だって、柱を造る術などに使ったため様々な形の銃が出回っているが、子供だましの術を使えるようにした物でさえ、それなりの値がつくのだ。

「予備にいいかと思ってな。それに銃を扱う店にわざわざ人を連れて行って、買わなければ不信感を煽る」

だから目くらましのためにも買った、ということらしい。

ふうんと納得してエリヤだったが、そこで考える事を中断する。すたすたと歩くグレイブに、置いて行かれそうになるからだ。

ここはエリヤも知っている町ではあるが、エリヤの時代とは違って非常に込み入った道ばかりだったのだ。

グレイブを見失わないように気を張っていたエリヤは、不意に音を感じてはっと足を止めた。

ギリ、と金属が擦れる音。

聞き慣れたそれは、魔術銃の発射前に、術式を描く金属がかみ合う音だ。

「グレイブさん！」

エリヤの声にグレイブが振り返ろうとした。その彼を、エリヤは抱きつくようにして突き倒す。

「なっ」

驚くグレイブの声と同時に、ごおつと風が渦巻く音、熱い空気がエリヤの背後を吹き抜けていく。

それを見た瞬間にグレイブは機敏に動いた。

エリヤを抱えた状態で身を起こすと、いつ抜いたのかもわからない銃の引き金を弾く。

硬質な銃声。

人を殺傷するために存在する武器の雄叫びだ。

エリヤの作っていた術式銃は、こんな怒声のように恐ろしい発砲音なんてしない。

久しぶりに聞いた銃声と共に、グレイブが狙う方向に人影が見えた瞬間、エリヤは硬直してしまった。

グレイブ撃った相手は、的なんかじゃない。

その姿が、以前、自分が人を撃った時と重なって……。

息を飲んで頭上を見つめてしまう。

銃弾を避けるようにしながら、人影はもう一度炎を銃から撃ち出した。



今度はグレイブも上手く避ける。

「諦めたか……」

銃声が数度続いた後、グレイブの淡々とした吐きが聞こえた。

どうやら銃撃戦は終わったようだ。それはわかっているのに、エリヤはいつのまにか握っていた、グレイブの黒緋のコートの襟から手を離せなかった。

「怪我はないか？」

静かに尋ねられて答えようとし、エリヤは自分が嗚咽しながら泣いていたことによく気づいた。

言葉に詰まりながらも、エリヤはうなずいて答えにする。

自分は大丈夫だと。

伝わったのだろう、グレイブがほっとしたように言う。

「無事ならば良い」

その時の微笑みに、エリヤは目を離せなくなる。

なんて綺麗に笑うんだろう。どうしてこんなに優しくて、暖かい笑顔をつくれるんだろう。

それなのに　なぜ彼は、あんな事件を起こしたんだろう。

「家に戻る。歩けるか？」

グレイブは彼にしては穏やかな口調で尋ねてくれる。エリヤも自分で歩けると言いたかった。けれど足は震え、まだ涙がにじんでくる。

(しっかりしろ、エリヤ)

自分に言い聞かせながら、とにかく右手だけでもグレイブの襟元から離し、エリヤは涙を拭う。

トラウマは払拭したと思っていた。

父の銃など、術式銃に触れるのは平気だった。

さすがに人を撃つて怖くなってしまった旧式銃だって、さわって撃てるように何度も練習するうちに、手が震えたりしなくなった。

学校へ通う前には、もう、両親が殺される夢も見なくなっていたのに。

泣いてちゃいけない。

グレイブが狙われたのだから、早くこの場所から遠ざからなければならぬ。

そう思ったエリヤだったが、

「……え」

生まれたての子馬のように足を震わせていたエリヤを、グレイブがあっさりと抱き上げた。

横抱き。ようはお姫様だっこだ。

「あ、あのっ」

涙声で慌てて下ろしてくれと頼んだが、グレイブは素っ気ない答えを返してきた。

「この状態で歩けるとは思えんな。安全な場所までは大人しくしていろ」

相変わらずの斬り捨てるような口調で言われたが、グレイブの腕はしっかりとエリヤを支えてくれていて、それだけでエリヤは心が落ち着くような気がした。

だから「はい」とうなずいて、それ以上反論しなかった。

大人しくしているエリヤを抱えたまま、グレイブは元来た道を戻りはじめた。

必然的に大きな通りをその状態で歩かせることになったが、グレイブは露ほども気にした様子はない。道行く人も振り返ったりはしない。

もしかしてこの時代では、わりと普通のことなのだろうか。

そんな事を考えているうちに、少しずつエリヤの心は落ち着いてきたのだろう。足や体の震えは収まり、涙も止まった。

けれどそれがわかつているのに、グレイブはエリヤを下ろそうとはしなかった。

代わりに尋ねてくる。

「それにしても、よく気づいたな」

最初の攻撃に気づいて、グレイブを突き飛ばしたことを言っているのだろう。

「助かった。礼を言う」

グレイブに感謝され、エリヤは慌てて答えてしまった。

「その、銃の、作動音みたいなのが聞こえたから……」

言ってしまったから「あ」と気づいたがもう遅い。

銃の術式を描く金属は、通常は安全のため分離した状態になっている。撃鉄を弾くとそれが組み合わさり、撃ち出した魔力が術式を通り抜ける際に変化し、組み込んだ通りの魔術を生み出すのだ。

けれど金属がかみ合う音などささやかなものだ。それに「気づくほど聞き慣れている」とグレイブも勘づいたのだろう。

「お前は技師だったのか？」

聞かれて、エリヤはさすがに知らぬ存ぜぬはできないとあきらめた。

「かも、知れません。そんな感じの知識が少し、あるみたい、です」  
それでも全てを話すことはできず、曖昧に誤魔化したのだった。

## 5章 貴方の部下と散策します 1 (前書き)

人が殺されるシーンなどがありますのでご注意ください。

## 5章 貴方の部下と散策します 1

あの日のことは、たぶん一生忘れられない。  
忘れてはいけない。

お昼を終えた後、大切なお客が来るから、子供は外で遊んでいなさいと言われた。

まだ十歳だったエリヤは、素直に隣の家へ友達を誘いに行った。

エリヤも知っていたのだ。自分の父の術式が認められて、政府の偉い人が契約を結びに来るのだと。

ちよつとでも粗相して、父の夢が叶う瞬間に傷をつけてはならないのだ。

だから戻ろうとは思っていなかった。  
けれど遊んでる途中、友達の妹がせがんできたのだ。

エリヤちゃんの花吹雪が見たいの。

父親に教えられながら、初めて作ったエリヤの術式銃。それは魔力で幻の花吹雪をつくるものだった。

エリヤも熱心にいわれて、悪い気はしなかった。

だからもう一度見せてやろう、と思った。

銃をとりに行くのも簡単だ。無害な術式のものなので、家の外にある作業小屋に放り込んだままなのだ。家の中に入らないのなら、平気だろう。

が、敷地の前に止まった黒塗りの高級車からも見えないうつそり鳶を匍わせた木垣の穴をくぐったところで、エリヤの耳はその音をつかまえた。

ギリ、と金属が擦れる音。

聞き慣れた、術式を描く金属がかみ合う音。

家の中で、何かが爆発した。

窓が内側から吹き飛び、見知らぬ黒い制服姿の人まで飛び出してきた。

エリヤは一瞬頭が真っ白になった。けれど、庭に倒れた人が動かないのを見て、我に返って駆け寄った。

「あのっ!？」

制服姿のその人は、あちこち火傷をつくった体を時々震わせ、呻くだけだ。

一体何が起きたのだと思ったエリヤは、振り返ったそこで決定的瞬間を目にした。

エリヤの家の居間は、すぐ目の前、まさに窓が吹き飛ばされた場所にあった。

焼け焦げて真っ黒に様変わりした居間に驚いたものの、エリヤはすぐに父の姿を見つけた。

大きな怪我もしていないようだ。

何が起こったのかわからないけど、この人の手当をしてもらおう。そう思っ呼びかけようとした時。

赤く細い炎が、剣のように父の体を貫いた。

「な……」

背中から血を吹き出し、父は倒れる。

そして誰かが叫んだ。

視線を動かせば、エリヤのいる庭を背に立つ、母の姿があった。その母も倒れた。

赤い炎の剣を生み出したのは、エリヤが見たことのない人だった。大柄で、熊のようだった。

その視線が、エリヤと合った。熊のような男が持っているのは、銃だ。

「……ひっ」

殺される。

そう思った瞬間、エリヤは側に倒れた人が落としたのだろう、黒い銃を手にした。

運命というのがもしあるのなら、その転機というのはとてもやさやかだった、とエリヤは後から思った。

もしねだらねなければ、エリヤは人を撃つことはなかった。

ねだつてくれなければ、エリヤは両親の最後の言葉を聞きそびれただろう。

もつと言えば、エリヤが花吹雪を生み出す銃を造らなければ、どうだっただろうか。

やっぱり何か取りに戻ることになったのだろうか。

それとも、戻ることはなく、犯人が誰かもわからずにいた未来とこのもあつたのかもしれない。

その日来ていた政府の偉い人は、エリヤが犯人を撃つたから助かった。



彼は犯人を殺したのは、亡くなった彼の護衛ということにして、子供だったエリヤを守ってくれた。

魔力が枯渴した時に備えて装備していたらしい、旧式銃で犯人が殺された事で、周囲はそれをあっさり信じてくれた。

これが、初めてエリヤが人を撃った日の記憶だ。

## 5章 貴方の部下と散策します 1 (後書き)

以上、エリヤのちょっと回想編でした。

## 5章 貴方の部下と散策します 2

結局、エリヤはグレイブに横抱きにされて帰宅した。

足の震えが止まった頃には、既にグレイブの自宅が近かったためだ。エリヤは重たいだろうから降りると言ったのだが、グレイブに拒否された。

「気にするな。酷い目にあつたはずの被害者を、再び同じ恐怖に晒したのは俺の失態だ。おそらくあれは俺を狙った襲撃だろう。恨まれる要因ならいくつも心当たりがあるからな……巻き込んですまなかつた」

エリヤは言葉に詰まってしまった。

確実に悲惨な方向に勘違いされている。

違うのだと訂正したい。

けれど本当のことは言えない。

思い出したのは両親が殺された時のことだと話せば、嘘が全部ばれてしまう。

結果、エリヤは曖昧にうなずいて大人しく従うしかなかったのだ。

家の中へは、一階の店舗からは入らないでいてくれた。フィーンや喫茶店にいるだろうお客様に見られずに済んだとほっとしていたが、

「あれ、どうしたの？」

ルヴェがいた。

案の定、ルヴェはまじまじとグレイブやエリヤの顔を見つめてくる。

こんなお姫様だつこ状態を見られて、エリヤは恥ずかしさでじた

ばたしたくなる。が、グレイブは淡々と返事をした。

「襲撃に遭った。エリヤに替えの服があったら渡してやってくれ」  
そこでようやく、床にエリヤを降ろしてくれた。

グレイブの手が離れる瞬間、不意に寂しいような変な感じがして、エリヤは思わずグレイブの顔を見上げてしまう。

目が合ったグレイブは、無表情ながらも微かに目を細め、昨日のようにエリヤの頭を軽く撫でた。

「俺は仕事に行く。エリヤを頼んだ」

そうして彼は、何事もなかったかのようにゆったりと立ち去った。

「はいはい旦那様つ、と」

スレた返事をしたルヴェエは、どこか訝しげな、探るような目をしていた。

その様子にエリヤは首をかしげそうになったが、すぐにルヴェエは一転して笑顔でエリヤを手招きする。

「裾とか汚れちゃってるわね。着替え持ってくるから部屋で座ってまってる」

グレイブの部屋へエリヤを引っ張っていき、ソファに座らせるとルヴェエはいそいそと出て行く。

そして戻ってきた時には、いくつかの衣服を腕に抱えていた。

「こつちが替えの服ね」

エリヤは、渡された薄い水色のコットや若草色のローブを受け取る。

てきぱきしすぎてつい流されてしまうが、よくよく考えてみれば、ルヴェエは男の子なのに同じような服を着てるんだなと思うと、エリ

ヤはちよつと微妙な気持ちになった。

「あと、こっちがエリヤが元々着てた服。一応洗濯しといたから渡しておくわ」

「あ、ありがとう」

見慣れたシャツやズボンを手にとり、エリヤは思わず『懐かしい』と感じてしまった。

ほんの二日でも『この時代』の服ばかり見ていると、郷愁が刺激されるらしい。感傷的な気分になっていたせいだろう、さらりと尋ねられた言葉に、エリヤは一瞬対応が遅れた。

「そつえばエリヤの生まれ年は……一九八〇年ごろ？ それとも一九七〇？」

「一九七五……つて、え!？」

素直に答えてから、エリヤは変な事を聞かれていると目を見開いた。

そんな様子には頓着せず、ルヴェは続けた。

「一九七五つてことは《本来なら》私と3つ違いなんだ。私の方がお兄さんだったんだね。なんか不思議」

ふふ、と笑うルヴェの顔を、エリヤがぼんやり見つめてしまう。

その間にもルヴェは滔々と話しつづけた。

「グレイブつたらオカしいんだよ？ あの時代なら女の子がズボン履くのなんて普通だし、短いのはファッションなのに、全然知らないもんだから勘違いしちゃってさ。エリヤが監禁されたあげく外に出られないよう、監禁主が服をとりあげてたから、エリヤが男物でもいいからつて適当な服を着て、命からがら逃げ出してきたんだと思ってるんだ」

だからグレイブは、エリヤに優しくかったのだ。まともな女性服す

ら着ていない、可哀相な子だと思っていたから。

グレイブの異常な優しさの理由を知って納得しつつ、でもルヴェエの話にエリヤはついていけない。

「……………つて、え！？ ルヴェエ、なんで？」

「なんでも何も」

ルヴェエはにっこりと微笑んだままエリヤに告げた。

「私も、元は約一〇〇年後の世界から過去に落ちちゃった人間だからよ？」

## 5章 貴方の部下と散策します 3

「あ……あたしと同じ?」

「そう。エリヤと私は同じ。数年前に『ここ』に来たからすっかり慣れちゃって、今じゃ私が未来人だなんてわかんなかったでしょ?」  
可愛らしく微笑むルヴェに、思わずエリヤは言ってしまった。

「じよ、女装は未来でもしてたの?」

「タイムスリップの先輩に、最初に聞くことがそれえ?」  
ルヴェはため息をつきつつ、教えてくれた。

「こつち来てからいろいろあつてさ。姉さんに拾われたんだけど、とりあえず周りに不審がられないようにって姉さんの死んだ妹が生きてたつてことにしてたのよ」

「そうなんだ……」

よもやそんな重たい理由があるとは思わず、エリヤはしゅんとしてしまった。

確かにエリヤ達は『本来存在しない人間』なのだ。そんな人間が暮らしていこうと思えば、様々な障害があつてあたりまえだ。

「ま、そんなことしてるうちについて……病みつきになっちゃったわけだけど。でもエリヤの方法もなかなかお得よね。拾ってくれた相手が良かったつて言うべき? このまま身元が分からないくつて結論がでたとしたら、きつとグレイブ、自分の特権使つて戸籍の一つもひねり出してくれるんじゃない?」

気にしていないと言つように、ルヴェは軽い調子でそう言ってくる。

「グレイブさんで、そんな権力あるの？」

公安副長官というのは、身元不詳人の戸籍の一つもぼんと用意できてしまうのだろうか。過去の政府機構とか役所の仕事には詳しくないエリヤには、よくわからない。

「できるでしょうよ。この時代はまだ、お貴族様が特権持って幅きかせてる時代なのよ？」

「あ、そっか」

グレイブは貴族だ。その特権があったからこそ、若くして一足飛びどころか十足飛びぐらいしていそうな副長官の地位を得ているのだ。戸籍を作るぐらいわけもないだろう。

そうすると、今後もグレイブに見放されなければ、なんとかかなりそうだと思えてエリヤは安心できた。

「なんか……いろいろ教えてくれてありがとう。それに同じような仲間がいたってわかって嬉しい」

礼を言うと、ルヴェは照れたように視線を斜め上に向けた。

「や、ほんとはもっと早く教えてあげようかと思っただけで、エリヤってば過去世界だったこともよくわかってなかったみたいだし、現状認識できてからって思ってさ。その……言っておきたいこともあったし」

「言っておきたいこと？」

尋ねると、ルヴェは渋い表情で切り出した。

「グレイブの史実について、エリヤは知ってるの？」  
「思わず息を飲んだ。」

そうかもしれないとは思っていた。

一方で、何かの間違いではないかと思う部分もあったのだ。



けれど今、同じ歴史を学んだはずのルヴェエから指摘されてしまった。

自分一人の勘違いではないのだと、そう突きつけられたのだ。

「その様子だと知ってるみたいね。だけど、信じられないと思ってる？ 一八八〇年代の世紀の虐殺者グレイブ・ディーエが彼だった」

ルヴェエは言いにくそうな表情をしながらも、続ける。

「疑いたくなるのもわかるわ、あのお人好しが虐殺事件を起こすわけ無いって。でも数年間この時代を過ごしてきた私は確信してる。まあ、こんな話して何が言いたいかって言うところ……」

一つため息をついて、ルヴェエは告げた。

「今あの人が関わってる事件は、おそらく彼が歴史に名前を刻むことになる切っ掛けになったものだと思うの。だから、巻き込まれたら大変よ。私も同郷の人間が、虐殺者の縁の人間だからって酷い目に遭わされるのは嫌なのよ。その前にもし離れたいなら、私が高んとかしてあげるわ」

離れる。

その言葉に、エリヤは胸が痛んだ。

グレイブから離れるということとは、あんなに良くしてくれた人が苦しんだ末、殺されてしまう運命を見て見ぬふりをするということだ。

取引の上とはいえ、見ず知らずのエリヤを後見してくれるといったグレイブ。

可哀相な目にあつたと勘違いして、優しくしてくれたその人が、死ぬのは……嫌だ。

だからか、気づいたらルヴェエに反論していた。

「でも……でも、もしかしたらグレイブさんは、どうしようもなく  
なつて事件を起こしたのかもしれないし。未来でどうなるか教えて  
ら、グレイブさんも虐殺は止めてくれるかも……」

「それは止めた方が賢明ね」

ルヴェはあっさり切り捨てた。

「もしグレイブを救うことができたとしましょう。その場合、虐殺  
は起こらないことになるはず。でも、後の歴史が変わってしまうわ  
グレイブの事件で魔力持ちは皆怯え、魔術を利用する技術の開発  
は五十年遅れたと言われている。その遅延がナシになるのだ。」

エリヤ達の暮らしていた時代は、さぞかし様変わりするだろう。

でもそれだけじゃないと、ルヴェは語った。

「その場合、私達がどうなるかわからないわ。死ななかつた人が  
生きていて、さらには居なかつたはずの人が生まれたりして。めぐ  
りめぐつて私達が未来で生まれえない可能性だつて考えられる。そし  
たら私は消えちゃうんじゃないかしら？ それだけは私は嫌だわ。  
事件に使われてる武器こそ未来の代物だけど、このまま時が進めば、  
虐殺事件とともにそれも解決するのよ」

断固とした拒否の言葉に、エリヤはうつむく。

魔法機関の発展如何によつて、医療技術や人の移動に関わる物だ  
つて変化してしまう。死ななかつたはずの人が生きている場合や、  
生きているはずの人が、死んでしまう場合だつてあるかもしれない。  
それなのにみんなが未来で同じ人とだけ巡り会い、結ばれるだ  
んなて事はないだろう。存在が『無かつたことになる』人もい  
るかもしれない。

ルヴェはそれを恐れているのだ。

エリヤの場合だって、もしかしたら父が死なずにいたかもしれない。そしたら自分は銃技師の学校へは行かなかったかもしれない。すると、自分の記憶というのはどうなるのか。

考え込み、黙ってしまったエリヤに、ルヴェは優しい声で言った。

「私の言うこと、わかってくれたかしら？」

エリヤは小さくうなずくしかない。

ただ納得はしていなかった。そのためにはグレイブが罪を犯すことを止めずにいた上、沢山の人が殺されると分かっているながら放置するのは、やはり抵抗があった。

そんなエリヤの内心を知らないルヴェは、念を押すように告げた。

「エリヤ、私達はこの過去の世界では異分子なのよ。そんな風に歴史を変えて人の運命まで変えてしまう権利なんて無い。だから私たちは大人しくしているのが一番よ。私だってグレイブには恩があるけど……世界を変えてしまう責任はとれないもの」

## 5章 貴方の部下と散策します 4

エリヤはそのまま、長いことじっと考えていた。

グレイブに何もかも話して運命を変えてしまったら、エリヤだけならまだしも、ルヴェエや沢山の人達の運命まで変えてしまいかねない。

でも、失われると知っていて黙っているというのは、納得できない。

こんな過去にやってきた意味があるとしたら、それを止めることじゃないのかと、そんなことまで考えた。

ふと、気分転換に外へ出ようと思った。

何かいい案でも思い浮かぶかもしれない。エリヤは、着替えることもしないまま部屋を出て、階段を下りた。

その時つい、裏口ではなく喫茶店へ出る扉から出てしまった。

カウンターにいたフィンと目が合う。フィンは微笑んで手招きしてくれた。

「お茶を入れてあげるよ。飲んでいかないかい？」

言われて、エリヤは喉が渴いていることに気付いた。

お言葉に甘えて、カウンターの椅子に腰掛ける。

たまたまお客がいない時間だったのだろうか、店の中にはエリヤとフィンだけで、ティーポットにお湯を注ぐ音だけがささやかに響く意外は物音もない。

やがて差し出されたのは、白磁のカップに入れられたミルクティだ。

礼を言って一口のむと、暖かさとおいしさにほっと吐息がもれた。

「ミルクティーが好きなんだね。お砂糖は？」

フィーンに尋ねられてエリヤは首を横に振る。

「いいえ。お砂糖はいいです。お砂糖なしのミルクティーが、好きなんです。昔お母さんがよく入れてくれた思い出が、うっすら心に残ってて……」

だから、飲むと落ち着くのだ。記憶喪失だという設定を思い出し、エリヤは慎重に言葉を選んでそう話した。

フィーンは変な顔もしなかったので、特別変だとは感じなかったようだ。

だから馬鹿にせず聞いて貰えると感じて、エリヤはつい心の中にあつた言葉をこぼしてしまう。

「もう子供じゃないのにこんなじゃ、弱すぎてだめですよね。いつまでもお母さんの思い出にすぎらないと落ち着けないなんて」

欲を言えば、父の形見の銃も抱きしめていたい。

ミルクティーと銃。この二つがエリヤにとっては、両親の代わりみたいなものなのだ。

「そんな風に卑下しなくてもいいと思うよ」

フィーンは匙を磨く手を止めて、エリヤを見つめてくる。そしていたずらっぽく笑って言った。

「内緒話をしようか」

「え？」

「私がこんな風に男装してるのはね、弱く見られなくなかったからなんだよ」

フィーンは、自分の男装の理由を話してくれた。

「両親を災害で亡くしてね。その時私はまだ十三だった。でも生きて行かなきゃいけないから働こうとしたんだ」

けれど保護者もない、後ろ盾もない十三歳の小娘をみんな見下し、時には騙されることさえあった。それどころか女の子だからと、危険な目にも遭ったらしい。

「そんな時、たまたま男物の服しか手に入らないことがあって。でも男物の服を着て仕事を探したら、これが上手くいったね。それで……女だから弱く見られるんだって思ったんだ。それ以来男の格好ばかりしているうちにこっちの方が居心地良くなってしまったんだよ」

そうこうしてるうちに、グレイブと知り合い、おかげで一階を店舗にして自分で店を持つことができた。

「もう男の振りをする必要はなくなった。けどね、いざ改めようかと考えたら、女らしい格好することが恐くなってる自分がいたんだ。最初は自分が恐がりになってしまったと思って悩んだよ。でも、グレイブに『別にいいだろう』って言われてね」

その時のことを思い出したのか、フィーンがふつと笑う。

「無表情なまま、人は弱いものだ。だから弱いことは悪ではない。必要なのは、強くあるうともがき続けることだ。なんて真面目に言われて、なんかそれでいいんだって思えるようになって……この状態のままなんだけど」

だから、とフィーンがエリヤを優しく見つめて言った。

「それを飲むだけで安心できるなら、それでいいんじゃないかな。誰だってそういう、強がるためのおまじないを持つてるものだよ」

おまじないという言い方に、エリヤは『フィーンは女性なんだな』と感じた。そして女性的なところがあるからこそ、男装した彼女がとても素敵に見えるのだ、と思った。

「ありがとうございます、フィーンさん」

礼を言ったエリヤに、フィーンは満足そうにうなずく。そして話題を変えた。むしろエリヤの気分を浮上させてから尋ねようと思ったのだろう。

「さつきは、ひどい目に遭ったみたいだね。グレイブが教えてくれていったよ」

フィーンは匙の次にグラスを手に取り、磨きはじめる。それほど重要な話ではないという態度をとることで、言いたくないのならば黙っていても構わない、という意思表示をしているのだろう。

「でも……怖がってるのとは違うね。何か悩んでる？」

先程までの内緒話で、気持ちがゆるんでいたエリヤは、つい何もかも告白してしまいそうになった。

けれど寸前で言葉を飲み込む。

言えない、と思った。

フィーンはいい人だと思う。優しく、落ち着きがあって、きつと相談すれば親身になって聞いてくれるだろう。

でも言うわけにはいかない。

彼女にとっても恩人であるグレイブが、虐殺事件を起こして処刑されるなんて。

きつとフィーンがグレイブを信頼しているほど、エリヤの言葉は疑われ、今向けられている微笑みさえ失われてしまうかもしれない。それがとても恐くて……。

## 5章 貴方の部下と散策します 5

「少し、外を歩いてきますね」

「エリヤ？」

とにかく気持ちを落ち着けたかった。

じゃなければ洗いざらい吐き出してしまいたいようで、怖くて、エリヤはなんとか笑みだけ浮べてみせ、外へ出た。

目の前に広がるのは、古い歴史の教科書の絵を見ているような町なみ。

まだ見慣れないその光景に、まだ夢を見ているような気分になる。でも立ち止まってはられない。

フィーンに呼び止められてしまえる場所から、遠ざからなければ。彼女に優しくなだめられ、そして手を握られでもしたら……極限まで自分の口が軽くなってしまいそうだったから。

だから早足に歩き出したエリヤだったが、

「エリヤ……さんだよね？」

呼び止められたのは、あの柔らかなフィーンの声ではなかった。

だから振り向いたエリヤは、少し驚く。

離れた街灯の側に立っていたのは、亜麻色の髪の青年だ。やんちゃな少年を思い浮かべる笑顔が、艶めいた大人の顔と同居しているような人だ。

見覚えがある。紅茶と、公安官庁と一緒に、エリヤの記憶に収まっていた人だ。

確かグレイブの部下だったはず。



「もしかして、ジェイスさん？」

「お、覚えてくれたんだね」

にっこりと笑ってくれる。

嬉しいのだとこちらがわかる表情に、エリヤは知らずに肩の力を抜いていた。

「お仕事ですか？」

「ん？ そうだね。副長官の命令であちこち……。君は？ どこかに出かけるのかい？」

「あー……」

どこへ行くと言えればいいだろう。

以前の世界だったら、適当に答えられた質問だ。

噴水公園は百年前にあっただろうか。いや、あれは魔術で作った噴水だから、ないだろう。いや、元々あそこは公園で、改装したのだから公園としては存在したはずだ。

でも、どんな名前でもこの時代で呼ばれているのかわからない。そして有名な場所でなければ、王都の記憶すら曖昧なはずのエリヤが、知っていておかしくないかどうかもわからない。

こんな些細なことにも、上手く返答できない事が、エリヤを消沈させた。

「何も考えてなくて……。どこ行こうとしてたんでしょう？ どこか公園みたいなおところってありますか？」

エリヤはなんだか面倒になって、ボケてたふりをする。と、くすりと笑われた。

「なら、良い場所を知ってるから、連れて行ってあげるよ」

けれど特に追求するでもなく、バカにするでもなく、ジェイスは

エリヤを誘ってくれる。

「お仕事はいいんですか？」

「一段落ついたところだからね。それに君は事件の参考人らしいと聞いているから、その護衛をするのだから、仕事の一環と考えてくれればいいよ」

「それなら……」

だからエリヤは頼んだ。

王都をあちこち見て回りたい、と。

エリヤが知ってもおかしくない場所、未来にしかない場所を把握しておきたい。

それに、

(何かあった時、逃げ方がわからないのは怖いものね)

銃で撃たれた時、どこへ逃げればいいのか。

手に慣れない武器を持っていない自分が逃げようとして、かくまってくれそうな場所はどこにあるのか。

たぶんそうだった怖さは、町を知ることができれば緩和できるのだ。

銃を撃ち合うのを見て泣いてしまった理由の中には、自分がどうしたらいいのか、どう逃げたらわからないからこそその恐怖もあったと思うのだ。

それが把握できれば、次になにかあった時、きっと泣かずに済むだろう。

「あれが去年建てられた劇場だよ」

指さされた建物を見て、エリヤは(うわぁ)と思う。

劇場なんて行くこともないエリヤだったが、未来では立て直しされてきた物だというのは一目でわかる。

重厚な石造りの建物は、柱の水が流れるような彫刻からして、荘厳だ。出入りする人も、心なし上等な服を着ている気がする。

あげく、入り口近くに横付けされるのは、どれも黒塗りの馬車だ。場所はそのままなので、一応外観を覚えておけば目印にはなるだろうかと、エリヤは唸りながら考える。

「これがヴェルトラ橋だ。大きいだろう」

王都を流れる一番大きな河、ヴェルトラ。そこに掛かる橋は、橋脚が何本も河に突き立っている。橋桁部分を支えるためには、これだけ沢山の支えが必要なのだろう。

金属が緩いアーチを作り、支柱も二本しかなかった一〇〇年後の橋とは、姿形がもう段違いだ。

そこを「ほんとに大きい橋ですね」と作り笑いをしつつ、エリヤはうふふあははと喜んだふりをして渡る。

ちなみに河岸も整備されてないので、別の河みたいに見えた。

「さ、お待ちかねの公園だよ」

やってきたのは、推測した位置からして、100年後にもある噴水公園だろう。

記憶にある公園よりも少々狭い感じの広場を、囲むように木が伸びている。

そして噴水はなかった。

(噴水公園のこと、話さなくてよかった……)

エリヤはこっそり胸をなで下ろした。

公園のあちこちに散在する屋台も、木の看板に手押し車を改造し

た物と、レトロだ。

木陰に置かれた木のベンチに座ったエリヤは、ジェイスが買ってきてくれた、砂糖のかかっていないチュロスを見て……ノックアウトされた。

技術の問題だ。

銃の構造を組み入れた術式機関で車などを作っている時代ではないので、運搬は全て馬などのお世話になっている時代。それどころか、耕作にも術式機関が使われている100年後と違い、生産力も段違いだろう。

だから庶民の口に、ふんだんに甘味が使われた菓子は入らないのだ。

チュロスを砂糖でコーティングはしないのだ。

エリヤは涙目になりながら、甘みのほのかな菓子をかじった。

「おいしいかい？」

「はい、甘さがちょうど好みくらいで」

甘すぎるものが苦手なエリヤに、砂糖コーティングのないこれは非常にちょうど良かった。そこがまた泣けてきた。

ほんの少しでいいから、見覚えのある物を見つけて安心したかったのに、今日見た場所はことごとくそれを外していた。

だからエリヤは言ってみただ。

「あの、アヴィセント・コートって見れます？」

100年経っても外観は変わっていないなかつたはずの、建物だったから。

## 5章 貴方の部下と散策します 6

「珍しい所に行きたがるんだな」

言われて、エリヤはハツと気付く。

そうだったアヴィセント・コートって今の時代は思いっきり監獄状態……。

そんな場所に連れて行けなどという人は、観光客もなかなか居ないだろう。

「あー、えっと、そのあたりでグレイブさんが私を拾ったっていつたので。どこにいたのか見たら、いろいろ思い出すかなって」

「思い出す？」

不思議そうに尋ねられて、エリヤは首をかしげる。

グレイブから聞いていないのだろうか。

「実は、記憶がちよつと……無い部分が多くて。それで少しでも思い出せればと思っただんですが」

「そうなのか。行方不明者リストを見ていたのは知っていたけれど、君自身が行方不明者だったんだな」

「あ、でもここまでずいぶん長い時間裂いていただきましたし、ご用時があるならここまででいいですよ！ 場所を教えてもらえれば、一人で……」

「だめだめ」

ジエイスは微笑んで言った。

「あそこへ行くまでの道は、治安が良くない所が多いんだよ。そんな所に女の子一人で行かせるわけにはいかないからね。君という都民を守るのも仕事のうちだから、気にしないようにね」

優しく言われて、エリヤは思わず顔が熱くなる。

守る、だなんて言われたのは初めてだった。

けれど一瞬後には、別な『守る』という言葉思い出してしまう。

守ってやれなくてごめんね。

むしろ、私達を守ってくれたことに感謝しますよ。

両親の遺体を目の当たりにした後、駆けつけるまで時間がかかったと、謝罪した祖父母の言葉。

そして、エリヤが犯人を殺したことで、命が助かった政府の人の言葉だ。

守ると言う言葉は、良い物ばかりではない。

「行こうか」

うながされたエリヤは、表情をひきしめてついていく。

歩き初めてすぐ、やはり案内を頼んで良かったとエリヤは思った。道が全然違う。

整地されて広々とした林や丘が広がっていたはずの周囲は、古い建物が積み重なる細い路地ばかりの所だった。

家の建築もすごいことになっている。

二階建ての屋根の上に、さらに適当に木で組んだ家をのせていたり、橋の下のアーチ部分を埋めるかのように、木材で小屋のようなものが填っていたり。もうなんでもありだ。

無理矢理建築が多いせいか、日当たりなどのことも考慮なんてされるはずもなく、どこか湿った空気が満ちている。

こんな所に倒れていたなら、あつと言う間にカビが生えそうだし。きつと泥とかもくっついていただろう。

綺麗にしてくれただろうフィーンに、何かの折に礼を言っておか

なくては、とエリヤは思った。

「日も暮れてきたからね。急ごう」  
さりげなくジェイスが手を繋いでくれる。

少し乾いて、エリヤよりもずっと大きな手。

自分とは違う手に触れていると、なんだか恥ずかしかったが、拒否するのは怖かった。

なにせ道端には、明らかに浮浪者とおぼしき人がぽつりぽつりと座り込んでいる。

それだけならまだしも、時折ぼろ切れになった服を纏った男や女が横路から歩いて来て、エリヤにぶつかろうとしたり、スカートの裾をひっぱられたりしてねだられるのだ。

「お嬢ちゃん、お金をおくれ」と。

未来の世界で、こういった人に遭遇したことがなかったエリヤは、怯えて思わずジェイスにしがみついてしまった。

ジェイスも無難に彼らを追い払ってくれる。

「今日は持ち合わせがないんだ。牢に入りたくないなら、それ以上はやめておけ」

そう言われると、皆ジェイスの黒緋の外套に目を止め、そそくさと散っていく。

ほっと息をついたエリヤは、しがみついたままだったことに気付いて慌てて離れようとした。

「す、すみません！ しがみついちやって、歩きにくかったですよね！」

けれどジェイスは笑って言う。

「これはこれでちょうどいいよ?」  
「一体何がちょうどいいのだろう? え? と思うエリヤに、ジェイスが続ける。」

「ああ、でもむしろこうした方がいいかな」  
そういつて、ごく当然のことといった風に、ジェイスは自分の腕にエリヤの腕を組ませた。

「うえっ!?!」  
「離れないようにしないとね」  
寄り添う男女にしか見えない状態なのに、ジェイスは実に爽やかに微笑む。

エリヤは焦りを感じている自分の方がおかしいのか? と思いつつ、いやいやこんな密着するって、友達ですらないのにありえない、とわたわたする。

何だろうどうしてだろう。  
ジェイスはなぜこんなことをするのか。  
抱えられて歩きながらも、エリヤはこのままでは良くない気がして反論を試みる。

「あの、こ、こういうことはお付き合いしてる男女がするものでは……」  
「ん? 時々父娘でもしてるのを見るけど?」  
「……………」

エリヤは納得してほっとしながらも、少し拗ねたい気分になった。そうか自分は子供なんだ……。  
思えば王都観光のついでにお菓子を買い与えられるというのも、



女の子への対応っぽいのと同時に、子供への対応と言われてもおかしくはない。

妙な敗北感を感じつつ歩いていたエリヤだったが、辺りを見回して注意が散漫だったのだろう。

どん、とぶつかられて、転びそうになった。

多分ジェイスと腕を組んでいなければ、確実に転んでいただろう。

誰がぶつかったのか。

走り去る人の姿を見れば、エリヤよりも背丈の小さい男の子だった。それだけならまだしも、その腕に抱えていたのは、

「ああああっ！ 帽子！」

手を頭にやれば、朝から被ったままだった帽子がない。

花飾りのついた黒い帽子は、色あせた服を着た子供が持って、現在逃走中だ。

「まって、返して！」

エリヤは慌てて走って追いかける。

なにせその帽子は、エリヤが自分で買ったものではない。おそらくはグレイブがお金を出し、ルヴェがわざわざ選んでくれたものなのだ。

人からもらった物を盗られたとなれば、二人に顔向けできないではないか。

けっこう素早い男の子に、エリヤはなかなか追いつくことができなかった。

何度も角を曲がり、そろそろ息が上がりそうになった頃。

白い氷の刃が降る場所へと飛び出していた。

## 5章 貴方の部下と散策します 7

「なっ……っ！」

エリヤは思わず足を止めた。

ほんの数歩前に突き建った白い氷の刃。

その先端は石畳を割り、広がったヒビにとけた水を染み込ませはじめる。

「来るな！」

氷の向こうに見えたのは、黒緋の上着を着た男性。

彼は少し先の角に隠れ、更に道の向こうにいる人物に向かって銃を向けた。

銃口の先へ目を向けると。白い手袋がひらめいた。

影のように黒い服を着た男は仮面に覆われて顔が見えない。その左右の手袋に握られているのは、銀と青の銃。

視認した瞬間、エリヤは建物角へ飛び込んだ。

同時に聞こえる、独特の作動音。

次いで今まで自分がいた場所に氷の刃が突き刺さった。

ぞつとしたエリヤだったが、すぐに攻撃者の様子を窺う。

ちょうどその時、公安官が犯人に向かって銃を撃った。

犯人は灰色の外套を翻しながら、左手の銃を撃つ。

壁のように広がる透明な氷。

そこに銃弾が当たって壊れた瞬間、鋭い雷が公安官が隠れた建物を直撃する。

「……やつ！」

えぐれた建物の角。

公安官はとつさに避け、怪我を負わなかった。

エリヤはほっとし……た瞬間、今度は自分がいる場所が攻撃される。

「わ！」

あわてて建物の影に逃げ込む。

建物の縁が凍り付いた。

それを見て、エリヤはようやく頭が回り始めた。

「あれが、もしかしてグレイブの追いかけてる、この時代の術式銃？」

確かにあんなものを持つていては、鉛玉の旧式銃では対処しづら  
いはずだ。

エリヤは辺りを見回した。

あの公安官だけでは、そのうちに追い詰められて、殺されるかも  
しない。

しかしジェイスの姿はない。

追いかけていたはずの、帽子を持ち去った子供の姿も、当然ない。  
代わりに、近くに別な公安官が倒れていた。

倒れた公安官は意識がないようだった。

その手の先には、一丁の銃が放置されている。

手放したのだろう銃を見て、エリヤは唾を飲み込んだ。

ジェイスを待つべきか。

でも一人で応戦している公安官が、それまで無事かわからない。  
自分も、狙われるかもしれない。

でも、また殺してしまったら。

唇を噛みしめ、エリヤは銃を手にする。

氷が溶け始めた建物の角に身を寄せ、覗き込む。

犯人の小柄な男は、再度銃を構えたところだった。

旧式銃の轟音みたいな銃声より早く、犯人は二丁ともを公安官に向けていた。

銃弾を止めて碎ける、分厚い氷の壁。

矢のように飛ぶ電撃。

エリヤは素早く一步を踏み出し、両手で銃を構えた。

狙うのは、銃だ。

崩れ落ちる氷を弾きながら飛んだ銃弾は、狙い変わらず犯人の銃に当たる。

衝撃に、犯人は銃を片方取り落とす。

犯人は驚いたように静止した。

エリヤはさらにもう一方の銃も狙ったが、それよりも先に身を翻した犯人は、駆け去ってしまった。

「は……っ」

止めていた息を吐く。

吸って、緊張がほぐれたところで、エリヤはそのまま座り込んだ。今頃になって手は震えだしている。

硬質な音を立てて、銃が手から落ちて転がった。

間違っただけで当たってしまったら。それが恐かった。

けれど大丈夫だ。ちゃんと狙い通りにできた。  
しかしほっとするのはまだ早かった。

「エリヤ……？」

問いかけられたエリヤは、はっと顔を上げる。  
いつのまにか、目の前にジェイスが居た。

ぼんやりしている間に、追いかけてきてくれた彼が到着したのだ  
ろう。合流できてよかった。

そう思ったエリヤは気がゆるみ過ぎていたのだ。

「ジェイスさん、あの、その方をなんとか」

エリヤは足が震えて立てないのだ。様子を見てほしいと言えば、  
ジェイスはなぜかこわばった表情でうなずいた。

どうしたんだろう。

ジェイスが倒れたままだった公安官の様子を見つめながら、エリ  
ヤは首を傾げる。

「大丈夫だ。怪我はあるが、命にかかわるほどじゃない」

「ジェイス？」

そこへ、先ほどまで銃撃戦を行っていた公安官が戻ってきた。

彼はすぐ、仲間やジェイスに駆け寄った。そして倒れていた仲間  
をたたき起こすと、肩をかして立ち上がらせる。

そこでエリヤを振り返って、苦笑いして言った。

「先ほどは助かった。お嬢さん」

「あ、いいえ」

礼を言われて、本当に自分が助けになったのだとエリヤは実感で  
きた。

仲間の治療のためだろう。そのまま早々に立ち去る公安官を見送

っていると、ジェイスに尋ねられた。

「君は、本当に全て忘れているのかい？」

「え……？」

振り向けば、ジェイスはまだ硬い表情でエリヤを見下ろしていた。

「さっきのを見ていた。君は銃を扱えるんだね、エリヤ」

「あ、その……ごめんなさい。勝手に銃を使ったりして、あの、でもこのままじゃ殺されるかもって」

言い訳は遮られる。

「さっきだって泣きそうな顔をして……。銃を撃つことが反射行動だけなら、そんなことはありえない」

言われて、エリヤは息を飲んだ。

そうだ。哀しむのも、辛いと思うのも、記憶がなければありえない。

「何を隠しているんだ？」

一歩近づき、ジェイスはエリヤの傍に膝をついて視線を合わせてくる。

エリヤは思わず引いてしまいそうになった。

「ああ、怯えなくていい。君を尋問したいわけじゃない」

「え？」

「もし、話して俺が協力できることがあればと、そう思ったんだよ。そしてジェイスはようやくやく笑みを見せてくれる。」

「仲間を守ってくれて、ありがとう。だからそんな君が辛そうな表情をしていると、見ている俺の方も辛いんだ」

ジェイスはそっとエリヤの頬に手を伸ばす。

「信じてくれるまで待つよ。だからもし誰かの手が必要になったら、俺に言っただけいいんだ」

言われたエリヤは、のど元まで言葉がでかかる。

ジェイスは公安官だ。グレイブが最悪の状態に陥らないよう、それとなく手を回してくれるかもしれない。

そうしたら、きっとエリヤは安心してここで暮らせるだろう。

グレイブが死ぬこともなく、良くしてくれたフィーンも哀しむことはなくなる。

でも。

記憶があることがバレてしまったら、なんて言われるだろう。まさか荒唐無稽な『未来からきた』なんて話を信じてくれるわけがない。

そう思えば、浮かんだ言葉は飲み下すしかなかった。

## 6章 君が眠る間に 1

刻一刻と、空は黒く染まっていく。

度々起こる魔術を使つての事件に怯え、人々は煉瓦に囲まれた夜道には出てこない。

ひっそりと建物の中で息をひそめ、不安を忘れるために眠りにつく。

そんな中、グレイブは再び鉄の街へ向かつて歩いていた。

「……副長官」

黒緋のコートを翻して歩くグレイブに、隣にいた壮年の公安官が囁き声で注意を促してくる。

グレイブは黙したままうなずいた。

視線を走らせても、暗い路地には人影は見えず、誰かが放置した空き瓶が風に押されてころがっていくだけだ。

けれども彼感覚には、自分の部下以外の存在がひっかかっていた。

視線を感じて上を見上げる。

煉瓦の一階部に木造の二階部を建て増した住宅。その屋根で光がひらめいた。

とっさに飛び退ったその場所に、紅の炎が襲いかかる。

石畳を焦がす様子を見もせず、グレイブは持っていた銃を構えた。

白銀の装飾が銃身に絡む銃。

エリヤの銃だ。

引き金を引く。その瞬間飛び出したのは、



『うひやはひやはひやは』

『ハーツハーツハー！』

『きやははははは！』

金色の輝きと共に、無数の『向日葵』が大口を開けて笑いながら銃身から伸びていく。

「うわっ！」

屋根の上から叫び声が上がリ、再び炎が吹き出す。

が、幻影のような向日葵は消えることなく伸び上がる。

人影がそれを避けるように立ち上がり　そのまま屋根から転がり落ちた。

「か、確保！！」

路地などあちこちに隠れていた優秀な部下達が、屋根から落下した人物を捕縛しに駆け寄る。

それを、さすがのグレイブも呆然として見つめてしまった。

二十三年の人生で、こんな酔狂な魔術など見たことがない。敵と同じように炎でも吹き出すのかと思っていたグレイブも、さすがに斜め上な状況についていけずにいた。

「副長官、そ、それは？」

グレイブと一緒に炎を避けた公安官が、恐る恐るといった風に尋ねてくる。

「偶然入手したものののだが、似た代物を持つことで敵の動揺を誘うつもりだったのだが……」

飛び出してきたのは、動揺どころか、味方まで呆れさせる代物だ

った。

尋ねた公安官も笑うべきか驚くべきかわからないような表情のまま固まっている。この突飛な事象にもめげずに犯人確保に動いた部下達は、賞賛されるべきだろう。

給料を上げてやらねば。

そう考えながらグレイブは手に持った銃を見つめる。

殺傷能力の欠片もない魔法が飛び出す銃。ある意味、銃声に怯えて泣き出す持ち主らしい代物だ。

ただこれでは逆に、彼女が『何者かに脅されて』作らされていたとは到底思えなくなってしまった。

「本人が自分の意志で作ったのか……？」

だから倒れていた時も、大切に抱きしめるように持っていたのではないだろうか。

確かめねばならない。が、それは後だ。

「犯人確保しました！」

黒緋の外套を纏った部下三人が、グレイブに報告してくる。

一体自分を狙ったのは何者なのか。

部下達に歩み寄ったグレイブは、取り押さえられて足を押さえて呻く犯人の姿に、眉を動かす。

裾のすり切れた服を何重にも着込んだ少年だった。その着込み具合は、おそらく外で寝起きするため防寒着としているからだろう。

大通りと違い、ガス灯の光が届かない暗い路地では、少年の髪の色は暗色にしか見えない。

「いてえ〜！ いてえよおお」

足を押さえているのは、落下の時に痛めたのだろう。

「聞きたい事を全て吐けば、治療の手配をしてやる」

一言告げると、少年は泣きそうな表情のままグレイブを見上げ、

「あ、悪魔……」

と呟いて目を見開く。

グレイブの評判を聞き知っている者のようだ。これだけ怯えていれば、素直に吐くだろうとグレイブはさらに促す。

「さあ、吐け」

「あ、あああの、頼まれたんだ、かかか金、金やるからって!」  
どもりながら少年はしゃべり出した。

「あんたを脅かすだけでいいって。普通の銃だと思ったから、だから……」

グレイブは心の中であるほど思った。

確かに銃の軌道自体は、グレイブの立っていた場所からかなりずれていた。だからグレイブも、横にいた公安官もあっさりと避けられたのだ。

「お前に依頼したのは何者だ？ 特徴を述べろ」

「くく、黒い服装で、フード被ってて顔はよくわかんなかった。

怪しかったけど、金さえくれればそれで良かったから……」

もっと覚えていることを言えと睨めば、少年は震える声で付け足す。

「あまり背が高くなかった。男で、真っ白な手袋してた」

「そうか」

グレイブは一つづつなぞく。

「殺意が無かったことは認めよう。治療はする。だが牢入りだ」  
グレイブが決定を伝えると、少年はひっと息を飲む。

「連れて行け」

短い指示に従い、部下達は少年を抱えるようにして連れて行く。

「一応取り調べはしますが、張本人ではないようですね……」

壮年の公安官は、少年から取り上げていた魔術をはき出す銃を見つめながら、ふうとため息をついた。

「それは俺が預かっておく。あの少年の治療が終わったら、とりあえず牢に入れたら、今日は解散していい。ご苦労だった。明日になつてから尋問しておくように」

「承知致しました」

壮年の公安官はグレイブに銃を渡すと、先に行ってしまった他の部下達を追いかけて歩いていく。

入れ替わりに、今まで別行動をしていたジェイスが歩いてきた。

## 6章 君が眠る間に 2

確かジエイスからは、エリヤが外へ出たので付添いをすると伝言を受け取っていた。

何か問題があつて、わざわざ報告しに来たのか。

グレイブは端的に尋ねる。

「問題が？」

「ええ、まあ」

応じて、ジエイスは苦笑う。

「なかなか手強い子ですね。仲間でも出てこないかと裏道も連れ回してみましたが、一応そんなそぶりもなかったですよ。本人の芝居が上手いのでなければ、道もよくわからなかったようですし」

どうもジエイスは、わざと治安の悪い場所へエリヤを連れて行つたようだ。

道もよく知らないようだった上、わざとジエイス一人をつけただけで放置したのに、誰も接触してこないというのなら、やはり彼女が『犯人側』の人間である可能性は低いようだ。

グレイブは内心で安堵する。

「で、その道はどこに行く途中の道だ？」

「本人が、自分の倒れていた場所を見たいと言つんで、アヴィセント・コート近くへ」

なるほど、とグレイブはうなずいた。

が、ジエイスは「けど」と続ける。

「ちらともしゃべりませんが……隠し事はあるみたいですね」

「確信を持つようなことでもあつたか」

「白手袋の元凶らしき男と遭遇しましたよ」  
グレイブは眉をひそめる。

「イーニスとグランが先に奴と遭遇して、銃撃戦をしてみましたね。そこに子供に帽子をとられて追いかけていったエリヤちゃんが巻き込まれたんで、観察させてもらいました」

危機的状況だというのはわかっていた。

あれ以上、残ったグランが危険な目に遭いそうなら、ジェイスも出て行くつもりだった。

それよりも先に、エリヤは自ら銃を拾い上げたのだ。

「なかなか筋がいいですね。奴の銃に当てたせいとか、奴も驚いてその場は引いていきました。が……あの子は、魔法銃に慣れすぎている」

言われ、グレイブは外套の下に隠した銃を思い出す。

エリヤが使っていたと言われれば、納得できるような、殺傷能力のない銃。

「魔法による攻撃の避け方にしても、相手の防御の隙を突くやりかたにしても、何も覚えていない人間のやり方とは違いすぎました」  
ジェイスの評に、グレイブは自然と奥歯に力が入る。

「そうか……もう少し、心当たりを探って、結論を出す」

「了解、副長官殿」

立ち去りかけたジェイスは、ほんの2・3歩で足を止める。

「なんだ？」

「いえ。一つお願いしておこうと思ひまして」

ジェイスは一拍おいて切り出した。

「様子を見てる限りはそんなそぶりはなかったんですが、油断させようとおちよつと過多に接触しましたんで。もし、俺のことを気にしてるようなら、次に彼女を側に付けるのは、別な奴にしてください」  
最後にジェイスはそつと付け加えた。

「副長官殿自身も、もし疑い続けるなら、ほどほどにするべきですよ」

\*\*\*

「ほどほどに、しているつもりなんだが……」  
ジェイスの進言に、グレイブは眉をよせながら自宅へ向かった。  
フィーンの喫茶店の明かりを避け、住宅用の出入り口から入る。

今度はルヴェがいる様子もない。おそらく外出したままなのだろう。

おそらく目的の人物はここにいるだろうと、グレイブは自室の扉を軽く叩く。

十数秒待ったが返事はなかった。

「フィーンの店にいるのか？」

夕食がてら、そちらに移動している可能性はある。それ以外の場所にエリヤが行くわけがないのだ。

グレイブと一緒に歩いていても、しきりに周囲を見回していたあたり、本当に王都の様子に見覚えがないようだった。それはジェイスにも保証されている。

見知らぬ街を、好きこのんで探検するのは、子供と旅行者ぐらいのものだ。

では眠っているのか。

「もしくは……」  
グレイブは昨日、一人静かに泣いていたエリヤを思い出した。

記憶が曖昧だと言ったエリヤの言葉を、全て信じたわけではなかった。

なにせ銃を持っていた人間だ。事件に関係がある人間ならば、グレイブの部屋にいるとわかったなら、何か不審な行動を起こすだろうと思っていた。

だからわざと、何か行動を起こすかと放置していたのだ。

しかしどこにでもいる少女のように、彼女は泣いていただけだった。

少し気遣っただけで微笑んだ姿に、グレイブは妹のことを思い出した。

離れて暮らさざるをえず、いつも心細い想いをさせている妹と同じように、エリヤは安堵したような笑みを浮かべたから。

そのことを考えると、再び泣いているのなら不安を解消してやるべきではないかと思えてきた。

だからグレイブは部屋の扉を開けたのだが。

「……眠っていたのか」

部屋の奥、壁際に置かれた寝台の上で、部屋着らしい簡素な生成のコットを身につけたエリヤは、座ったまま寝入ったかのような状態で横たわっていた。

このままでは風邪をひくだろうと、グレイブはエリヤを上掛けの中へ押し込んでやる。

肩まできっちり上掛けに包んでやったグレイブだったが、そこでむっと口を引き結んだ。



フィンやルヴェならば、捜査に必要であれば容赦なく叩き起しただろう。どうして自分は今、エリヤを起こさないようにしているのか。

数秒考えた末に思い浮かんだのは、ジェイスの言葉だ。

あれは、エリヤにあまり入れ込むということだ。情けをかけているうちに、ほだされてしまっただけは捜査にさしつかえる。

グレイブはエリヤを揺り起こそうと思った。

が、上掛け越しに細い肩を掴んだ瞬間、蝋燭の炎を吹き消したようにその決意は消失する。

「なぜだ……」

眩きに反応したように、エリヤがみじろぎする。

起きるかもしれない。

先ほどの銃撃でも感じたことがない緊張感に、グレイブは思わず息を詰めた。

しかしエリヤは、そのまま大人しく寝息をたてはじめ、再び動かなくなる。

ほっとすると同時に、自分が相手に影響を与えている事に、くすぐられるような妙な感覚をおぼえてグレイブは戸惑った。

不可解な、と思いつつ。

結局彼は何もエリヤに尋ねることもできず、部屋を出て行った。

7章 貴方の上司とお会いします 1 (前書き)

読んで下さってる皆様、

お気に入りに入れて下さった皆様、ありがとうございます!!

## 7章 貴方の上司とお会いします 1

目覚めて最初に思いだしたのは、昨日銃を撃ったことだった。少し手が震えるように感じる。

「大丈夫、こんどはちゃんとやれたもの」  
殺す方法しか知らなかった、子供のままじゃない。

グレイブが追いかけている犯人は、エリヤ達と同じ時代の人間に違いない、と襟やは確信を深めはじめていた。

犯人の持つ術式銃は複数だった。他にも持っている人間がいるというのだから、間違いなく技師としての知識がある人物だ。

そして……いくらなんでも、術式銃を開発したばかりのこの時代に、あれほどの種類のものをつくることなどできないはずだ。

であれば、どこかで学んだ者。

エリヤやルヴェと同じ、未来から来た人間なら、道具さえそろえば可能なのだ。

それに犯人を捕まえなければ、おそらくああやって……エリヤの父を殺した人のように、いろんな人を傷つけるだろう。

実際に直面して、そして自分の手で立ち向かったからこそ、エリヤは「止めなければ」と強く思った。

そして止めることができれば、グレイブは死なずに済むだろう。

世界を変えてしまう責任はとれない。

ルヴェとの会話を思い出す。

エリヤにだってそんなことはできない。

でも少しだけ思うのだ。  
もしエリヤが過去へ来たことに意味があるなら。  
それはきつと

\*\*\*

エリヤは、今日も再びグレイブについていこうと決めていた。  
銃を作っている者たちにとって、一番邪魔なのはグレイブだ。  
自分の後見人を守ることもできるうえに、犯人をつかまえるなら、  
彼と一緒にいる方が都合がいい。  
捜査協力をお願いされていたのだから、きつとグレイブもエリヤ  
を連れて行くと思った。  
が。

朝食をさっさと食べ終えたグレイブは、何も言わずにさっさと一  
人で出て行ってしまふ。

「え？」

エリヤはまだ二口分ほど残ったラメルを手に、呆然とした。

「なんで勝手に行っちゃうの……？」

しかも何も言わずに。もしかして、昨日の様子に捜査協力は頼め  
ないからと、見放されたのだろうか。そう思ってしまういそうなほど、  
グレイブの態度はそっけなかった。

「ああ、気にすることないわよ」

やきもきするエリヤに、ルヴェエがオニオンとハムを挟んだラメル  
を両手で持ちながら教えてくれた。

「昨日エリヤが随分怯えてたみたいだったから、今日はそれを気にして連れていかないことにしたんじゃない？ 女の子だから配慮したつもりなんだろうけど、何も言わないところが不親切よね、グレイブって」

あーんと大きな口を開けて、ルヴェは二つに折ったラメルにかぶりつく。

エリヤはもう一度グレイブが出て行った扉へ、視線を転じる。

そして出かけるつもりで横に置いていた帽子を掴むと、急いでグレイブを追いかけた。

その行動が優しさからのものだとわかる。ルヴェに言われなくても、エリヤはそれを疑ったりなんてしない。

でも、聞いて欲しかったと思うのは我がままだろうか。

だってエリヤは言えないのだ。

何が危険なのか、彼がもしかしたら、この事件の末に虐殺を起こしてしまうかもしれないこと。

気遣ってくれるような優しいこの人が、処刑されてしまうかもしれないことも。

だからせめて、そばにいればわかる限りは守れるのにと、思ってしまうのだ。

店から走り出たエリヤは、右手のずっと遠く。まだまばらな人の波の向うに、背の高い後ろ姿を見つける。特徴的な黒緋のコートを着ているから、グレイブに間違いない。

「ごめんなさい！」

エリヤは謝りながら人の波を突っ切り、グレイブを追った。

まだ二日しか着ていない古典的な衣服は、裾が長くて走りにくか

った。腕を振る動作すら、肩に羽織った長めのケープが邪魔をする。

それでもエリヤは走った。

グレイブはエリヤに気付かないようにどんどん先へ進んでいく。建物の影の向きから考えて、グレイブは王都東の外縁部へ向かっているようだ。そちらには昨日訪れた鉄の街もある。

思い出した瞬間、エリヤはグレイブが返してくれていた白手袋を身につけた。

防御術式が縫い込まれている手袋をしていれば、何かあった時に役立つ。敵が魔術を使うのならばなおさらだ。

が、グレイブが途中で北へ向いはじめたので、鉄の街へ行くつもりはなさそうだと分かった。

「どこいくんだろ？」

足早に歩くグレイブを見失わないように追いかけるながら、エリヤは首をかしげた。

昨日の狙撃を、グレイブは自分を標的にしていたと言っていた。未来から落ちてきたばかりのエリヤが狙われる理由もないので、それで間違いないだろうと思う。だから狙撃者を調べるために出かけたのだと思うのだが、違うのだろうか。

そうでないのなら、なぜエリヤをおいていったのだろう。

でも、それも当然かも知れない、という否定が心の中に浮かぶ。

エリヤは何も話していないのだ。

もしグレイブに『自分は似た銃を造れる技師の端くれだ』と教えていたなら、対応も違っていただろう。ほんの少し、馴染みのない武器に驚いただけで、普通の女の子よりは胆力もあるんだと判断してもらえたかもしれない。

けれどグレイブの中では、エリヤは銃撃戦で泣き出す記憶喪失の子供なのだ。銃を持って戦えるわけじゃないエリヤを連れて歩くのは、あんな風に狙撃される可能性のあるグレイブにとって、足手まといにしかならないだろう。

そう思うとなんだか気力が萎えてしまった。

走る気持ちは失せ、エリヤはその場に立ち止まる。

帰ろうか、と思った。

正直に未来から来たと言えない以上、グレイブはエリヤを連れて行ってはくれないだろう。

けれどいえない。

言って、グレイブにまで見捨てられたらと思うと、怖くて言えないのは……やっぱり利己的なのかもしれない。

しばらくそのままうつむいていたエリヤは、もうグレイブは先へ歩いて行ってしまっただろうと思った。顔を上げて、グレイブの姿が見あたらなかったら帰ろうと決める。

息をすって、えいと頭を上げた。

そのまま息が止まりそうになった。

「なぜついてきた？」

目の前にグレイブがいた。いつもの無表情ではないかわりに、柳眉がつり上がった険しい表情をしている。エリヤは、怖さに思わず一歩引いてしまった。

「あ、あの。なんであたしが追ってきたってわかったの？」

「追いかけてきた事にはすぐ気付いた。待ち構えて説得するべきかと考えていたが……」

グレイブはふっと小さく息を吐く。

「道の真ん中で隙だらけの様子で立ち止まるな。また拐かされても知らんぞ？」

続けて「帰れ」と言われて、エリヤは急いで主張した。

「だ、だつて協力するつて言ったから！」

「協力しないと放り出されると思ったのか？ 安心しろ、そこまで無体なことはしない。保護した人間を危険に晒すような真似をさせた俺が悪かつたんだ」

「違うの、あの」

本当のことは言えない。代わりに言えるのは自分の気持ちだけだ。

「恩返しがしたいんです！ だから連れて行って下さい！」

思いがけず大きな声で言ってしまう、エリヤは恥ずかしくなつて視線だけで辺りを見回す。大通から外れた路地には、折良く誰もいなかった。

ほつとしたところで、グレイブが尋ねてくる。

「恐くはないのか？」

ここで躊躇してはいけない、と思った。エリヤがすかさずつなずくと、グレイブはいつもの無表情に戻つて告げた。

「ならば連れて行きたいところがある」



## 7章 貴方の上司とお会いします 2

グレイブが連れて行ってくれたのは、昨日行きそびれた監獄離宮  
アヴィセントコートだ。

「ふえ……」

視界一杯に立ちはだかる灰色の石壁に圧倒されたエリヤは、思わず壁の先を追って首を上向ける。

真上を見上げるような位置に石壁の天辺があり、曇りがちな空は半分に分断されたように見えた。

「口を開けたままでいると、ゴミが入るぞ」  
注意されてエリヤは前に向き直る。

監獄離宮とあだ名されているだけあって、入り口の警備は強固だ。エリヤには古典的に思える鉄扉の前には四人の赤い上着を着た衛兵が槍を持って立ち、門の内側には十人の衛兵が待機している。

彼らはグレイブの顔を見知っているのだろう、彼が近づいただけで肅々と中へ迎え入れてくれた。

緊張に拍動する胸を押さえていたエリヤだったが、恐ろしいほど高い塀の向うへ足を踏み入れたとたん、意外さに目をまたたいた。

「なんか、なごやかそう？」

目の前に広がるのは、よく手入れされた庭園だった。

所狭しと家が建ち並んだ街路とは違い、広々とした芝と花壇が美しく配置され、葉を茂らせた木が柔らかな影を落としている。

咲いている花々のほのかに甘い香りもして、そよ風に舞飛ぶ蝶の姿を見ていると、別世界に迷い込んだような気分になった。

そんな光景が町三つ分ほど広がっている。

唯一、そこが監獄離宮らしいと思えるのは、庭園の向うにあるはずの建物を隠す、もう一つの高い壁だ。けれどこちらは赤茶けた煉瓦でできていて、灰色の壁の威圧感とは比べものにならないほど穏やかそうに見える。

グレイブは見慣れているのだろう、美しい風景を一顧だにせず、石畳の道を先へ進んでいく。

少し歩き疲れたと思いはじめたところで、煉瓦の壁の前にたどりついた。そこにも衛兵が二人いて、グレイブとエリヤのために扉を開いてくれる。

ようやくその全貌が見えたアヴィセント・コートは、アーチを描く出窓が並んだ美しい白亜の建物だった。

「これが監獄？」

魔力を持つ人間が、強制的に閉じ込められる場所だということには、明るい。

エリヤは信じられない気持ちで、グレイブと共に宮殿の中へ入った。

内部も美しく整えられている。玄関ホールの磨かれた石の床は靴音をよく響かせ、衛兵は何人もいるものの、グレイブに一礼する以外は特に監視の目を向けてくることもなく、ゆったりしているように見える。

むしろ一番外側の門にいた衛兵の方が、威圧感が強かった。とエリヤは思い返す。

そんなこんなで、身分違いの豪邸に招待されたような気分になりかけたエリヤだったが、あくまでここは幽閉場所なのだ。

「ぐ、グレイブ……さん」

「なんだ？」

エリヤがぐるぐる見回している内に、衛兵の一人と一言三言ほど話し終わったらしいグレイブに、声をかける。

「あの、どうしてあたしをここに連れてきたんでしょうか？」

歴史的建造物。

しかも過去の使用真つ最中の状態を見られるということまで心が浮き立っていたエリヤだが、考えてみれば変なのだ。どうしてこんな場所にエリヤを連れてこようと考えたのだろうか。

まさか、エリヤがちまつとした量であっても魔力を持っていると気付いて、ここに押し込めるために連れてきたのだろうか。

エリヤの怯えを感じ取ったのか、グレイブは「妙な想像はしなくていい」と前置きした。

「お前をここに幽閉するために連れてきたわけではない。むしろ……ここに覚えないかと思ってな」

「覚えない？」

アヴィセント・コートに入ったことはない。だが『入った事がない』事を覚えているとバレてはまずいので、エリヤは口ごもる。

「初めてだと……思います」

「記憶がないのだから仕方ない。では、見知っていないか中にいる人間に聞きに行くでしょう」

一体誰に？

と言いたいエリヤを置き去りにして、グレイブは先ほど会話をしていた衛兵に尋ねていた。

「アルスメイヤは在室か？」

「お部屋におられます。いつものお客様も一緒に」

「……そうか」

女の子の名前？ とエリヤは首を傾げる。

「お前に引き合わせるべき人間がいる。ついてこい」  
一体それが誰なのか、尋ねる間も与えずグレイブは歩き出した。  
公安副長官だけあってアヴィセント・コートは勝手知ったる場所  
なのだろう。グレイブは自宅の中のように迷いなく進む。

足の長さの違うグレイブは歩くのも速い。

エリヤは遅れないように気を付けているうちに、エントランスか  
ら続く中央階段を昇り、二階の廊下を歩き、中庭を見下ろす回廊を  
通り抜けた末に、優美な白木の彫刻扉の前へたどりついた。

グレイブが扉を叩く。

すると中から、男性の声が応じた。

（え？ アルスメイヤって男？）

女性名を使う男がいないでもないが、と思ったエリヤだったが、  
扉が開いてその理由に納得がいく。

淡い、水色と桜色の色調で整えられた部屋だった。

その中で浮かび上がるように見えるのは、琥珀色の家具とソファ。  
部屋の主はソファに座っている少女だろう。太陽の光を細く依っ  
たような髪を長くのばした彼女は、深い青のドレスを着ている。

お姫様がいる………と見つけて見つめていると、少女がエリヤと視線  
を合わせ、微笑みかけてくる。

少女の向いにあるソファから、少女とさして変わらない ある

いはエリヤとそう年が変わらない 少年が立ち上がった。

こちらはグレイブと同じ黒緋のコートを着ていて、淡い色調の部  
屋の中で恐ろしく目立っている。

髪は深い琥珀の色。どこかで見たことのある整った顔だちの少年は、髪と同色の瞳でグレイブに笑いかける。

「先に来ていたよ、グレイブ」

するとグレイブが、その場で胸に手を当て一礼した。

目を丸くするエリヤの前で、そのままグレイブは丁寧に応じる。

「常よりご厚情を頂き、誠にありがとうございます。陛下」

「へい……っ!？」

思わず声を出してしまい、エリヤはとっさに口を押さえた。が、最後の一言しか防げない。

おかげで姿勢を戻したグレイブやお姫様のような格好の少女、件の少年までが一斉にエリヤを振り向いた。

「気まずい。」

その一方で、どうしてエリヤがこの少年に見覚えがあったのかわかった。過去に来たと分かった日、新聞で見ていたのだ。現在の国王ヴィオレントの絵姿を。

そんな人がなぜ監獄離宮にいるのか。

焦りと困惑で頭がぐるぐるしはじめたエリヤの頭を、グレイブが軽く叩いて宥めてくれた。

「慌てるな。言わなかったのは悪かった」

「だ、だってヘイカなんでしょう!？」

貴族制度が有名無実化した未来でも、国王になんて会ったことはない。

どんな対応をしたらいいのかと、無駄に手をばたばたさせていると、くすくすと笑い声が聞こえた。

笑っているのは、お姫様みたいに綺麗な少女だ。

「グレイブ様が悪いと思いますわ。陛下がいらつしやっても、ここはあくまで私的な空間。だから臣下の礼をとらないようにと常々言われていましたのに。でも、いつも隙のない方が珍しい事」

「アルスメイヤ……」

グレイブが不服そうな表情になる。

それも気にせず、アルスメイヤと呼ばれた少女は続ける。

「あと、私の元へ女性の方を連れてきたのも初めてですわね」

言葉に含みを感じて、エリヤはなぜか胸が騒ぐ。グレイブに気安く名前を呼ばれている、綺麗な人。そんな人がエリヤを連れてきたことを揶揄する理由を想像し、まさかと思う。

グレイブと付き合っているのだろうか、と。

だとすると、先に部屋に来ていたヴィオレント王はどうなのだろう。この少年王もアルスメイヤと親しげだ。

「それは嫉妬ですか？ アル」

愛称で呼ばれたアルスメイヤは、楽しげにヴィオレントに答える。

「そうかもしれませんが。だってあんなに可愛い方連れてくるのですもの。ねえグレイブ様。その方はどのような方なのか、教えて下さいませんか？」

可愛らしく拗ねたように言われたグレイブだったが、彼の方は普通に尋ねられたのと変わらない対応をする。

「彼女の話をして来たのは確かだ。おいで、エリヤ」

グレイブは、そつとエリヤの腕を掴んで引いて部屋に入る。扉の閉まる音を聞きながら、エリヤはソファの傍に立った。

するとヴィオレントが立ち上がる。

「女性を立たせて置くのは忍びない。お嬢さん、どうぞ座って下さい」

「う、えっ、でも……」

王様を立てさせて自分が座っているものか。相手は王様なのだ。戸惑ったエリヤは、とっさに横にいたグレイブを見上げた。

グレイブは初めて見るような嫌そうな表情をして、ヴィオレントに苦言を呈する。

「一般庶民を困らせないで下さい、陛下」

「どこに困らせる要因が？」

本当にわからない様子で、ヴィオレントは首をかしげる。

「エリヤは、アスルメイヤとは違います。あなたに慣れていないのに、国王が立つから座ってくれと言われて、はいそうですかと言えぬわけがない。彼女に座ってほしいなら、気兼ねしなくてもすむように陛下はお座りになったままでいて下さい」

「別に私は立っていてもいいのだが……。お前がそう言うなら従おう」

ヴィオレントは納得していない様子ながらも、アスルメイヤの隣に腰を落ち着ける。

確かにヴィオレントが座ってくれるなら、エリヤも少し気が楽だ。最後の一押しにグレイブに促され、彼の隣に座った。

王様と差し向かいになってしまいが、それでも肩が当たりそうなほど傍にグレイブがいてくれるので、緊張は少し抑えられる。

## 7章 貴方の上司とお会いします 3

「では、今日ここへきた理由をお話しましょう」  
グレイブは常と変わらぬ様子で話を進めた。

「まず彼女は、私が路地で倒れていたところを拾った者で、エリヤといえます。親や故郷を探してやりたいのですが、記憶を失っていて、不可能でした。そこで行方不明者のリストなどを当たりましたが見つからず、些少なりと魔力があるようなので、一時でもここにいた可能性がないかと思って連れてきたのです」

実にグレイブらしい素っ気ない報告に、アルスメイヤが先に反応した。

「それで私を訪ねてくださったのですね」  
彼女は納得したようにうなずき、それからじっとエリヤを見つめてくる。

ふわりと、柔らかな刷毛で撫でられたような感覚を頬にかんじた。さわられた、とエリヤは思った。

けれど実際にはアルスメイヤの手は動いてすらない。

でもこの感覚には覚えがあった。元の時代で、魔力を測定するときに受けた術がこんな感じだった。

(魔法……?)

魔力によるものだとすれば、アルスメイヤは実に魔力の高い、そして制御の上手な人のはずだ。

そもそも魔力は扱い辛い。

すぐに跳ね回る子犬のように落ち着きのない魔力を、自力で炎や



水に変化させるのはかなり難しく、そのため魔力の暴走事件が起きやすかったのだ。

が、人は術式を研究し、そこに魔力だけを注げば思い通りの効果が現れるように工夫してきた。それを生活の様々な場面で用いているのが未来の世界だ。

エリヤの魔力測定をした政府の係官すら術式を用いていたのに、アルスメイヤはそれすらしていない。彼女はやがてふつと息をついた。

「おそらく、このアヴィセント・コートにいたことのある方ではありません。私の魔力の痕跡を残しておく『楔』の存在がありませんので、まず間違いない……と思います」

「君が言葉を濁すのはめずらしいね？」

ヴィオレントの問いに、アルスメイヤは困った様な顔で答えた。

「うっすらと私の魔力の気配があるような気がしたんです。けれど、この離宮自体に魔力を逃がさないように術をかけていますから、おそらくそこを通り抜けた残り香かもしれません。それにエリヤさん位の魔力の量なら、普通の人として暮らして来れたでしょうから、この離宮に来るような状況にはなかったと思いますわ」

魔力が少ないと太鼓判を押された感じがして、エリヤはちよつと落ち込んだ。

「そうか。魔力があるなら、一度ここに幽閉された後で攫われた可能性を考えたのだが……違ったか」

グレイブが断定してうなずいた。

話の流れから、アルスメイヤは魔力で幽閉された人に印をつけていたようだ。

それが術者である彼女に感じ取れないので、アヴィセント・コー

トには居なかつたと判断したらしい。

魔力を計るだけならまだしも、人に魔術で印までつけられる彼女は一体なんだろう。

ここにいる以上、彼女も魔力を持つから幽閉されている人のはずだ。

けれど豪華な部屋を持ち、幽閉者の管理をしているらしい上、国王や公安副長官が会いに来るのだ。

「あの、アルスメイヤさんはどういう方なんですか？」

尋ねると、ヴィオレントがため息をついた。

「グレイブ……君はそんなことも説明しないで連れてきたのか？」

「知らなければ外に漏らすこともないかと思ひまして」

しれつと答えるグレイブに、ヴィオレントはすっかりあきれ顔だ。

「済まないね、エリヤさんと言ったかな？ グレイブは四角四面の人間なものだから、機密の扱いにも融通が利かないというか、離宮の中に入れた時点でもう機密どころじゃないとは思うんだが」

片手を額にあてるヴィオレントは、苦悩を滲ませながらエリヤに話してくれた。

「アルスメイヤは王家の親族なんだ。王家の人間が魔力を持つことを隠すために、彼女をこの離宮にとじこもってもらうしかなかった。だからここは本来、彼女の家なんだよ」

エリヤはああ、と納得した。

一目見た瞬間お姫様だと思った感覚に間違いはなかったのだ。そして王族であっても、この時代では魔力を持つ限り排除の対象となるのだ。

「でも、お家を他の人の幽閉所に開放してらっしゃるんですか？」  
「魔力を持つ人間を普通の牢に入れるわけにはいかないんだよ。誰かがその魔力を抑えねばならない。アルスメイヤは生まれながらに高い魔力を持っていた上、それを買って出してくれたんだ。それに、基本的には『保護』するためにここに幽閉しているんだ。外の世界は、魔力を持つ者に厳しすぎるから」

ヴィオレントの言葉に、エリヤはなるほど、とうなずいた。

この時代の様々な迫害については歴史として学んでいる。

魔力を持つ人間は、半数は幼少時にそれが発覚する。無自覚に魔力を使ってしまうからだ。そして実の親に人知れず処分される者も多かったという。

生き延びても、隠し通せなければ他者によって迫害される。

犯罪をおかした上で捕まり、幽閉される者はごくわずかなのだ。

するとアルスメイヤが静かに言葉を添える。

「私が保護することはできません。けれど守られていても、ここはやはり狭い世界でしかありません。いつか……。私が死んだ後の世でもかまわないのです。魔力を抑制する術を手に入れ、そして他の人々に受け入れられる世界に変わってくれればと、願うことしかできません」

アルスメイヤの哀しげな表情に、エリヤは教えたい衝動に駆られる。

それは叶う夢だと。

十数年後にはこの離宮自体が使われなくなり、煉瓦の塀の向うにある庭やその周辺は穏やかな墓所として使われるのだ。離宮はお化け屋敷扱いされるけれど、そこにはもう、誰もいない。

「いつまでかかるか分からない。けれど私もグレイブもできる限り

のことを続けていく。だからきつと、貴女の願いは叶うよ」

ヴィオレントが優しく彼女に告げる。

小さくうなづくアルスメイヤに、グレイブも穏やかなまなざしを向けていた。

三人の様子から、エリヤにもその絆が伺えた。

ヴィオレントは同じ王族として彼女と交流があったのだろう。そしてエリヤには彼がアルスメイヤに惹かれているのだと感じられた。一方のグレイブも、ヴィオレントへの忠誠心からではなく、アルスメイヤ個人に親愛の情を持っているように見えた。

ヴィオレントへは敬う姿勢を崩さないのに彼女にはぞんざいな態度をとる所から、個人的な交流を持っていたのだろう。

グレイブも、アルスメイヤが好きなのだろうか。

ふと思い浮かんだ疑問に、エリヤは胃が縮むような感覚におちいる。

なんとなく考えてはいけないような気がして、エリヤはその疑問を忘れようとした。

「では用が済んだので戻ります」

グレイブはあっさりと立ち上がった。

遅れまいとしたエリヤと一緒に、ヴィオレントまで立ち上がる。

「僕もそろそろお暇しよう。ではまた」

そう言ったヴィオレントと振り返りもせず出て行くグレイブに、アルスメイヤは寂しげな笑みを見せたのが印象的だった。

## 7章 貴方の上司とお会いします 4

アルスメイヤの部屋を出て、再び長い廊下を歩き出す。

ふと声が聞こえて見下ろすと、中庭にまだ子供と言っているいい年頃の少女が二人いて、笑いながら花壇を走り回っている。

幽閉されている子供だ。

けれど拘束されている様子もない。本当にアルスメイヤやヴィオレントが言った通り、ここにいる魔力を持つ人々は『保護』されているのだろう。

迫害されていたこの時代の魔力の高い子供達が幸せそうにしていることに、ごく自然にほっとする。

嫌われるのはいつだって恐い。

元の時代でさんざ強い魔力持ちの同級生にからかわれ、揶揄された続けたエリヤはそれをよく知っている。

「君は優しい人だな、エリヤ」

一歩先を歩いていたヴィオレントが、エリヤを振り返って見ている。

思わずときめいてしまいそうな顔立ちで、嬉しそうに自分を見られて、エリヤはなんだか落ち着かない気分になる。

「アルスメイヤの見立て通りなら、君は迫害などされたことがないはずだ。それとも記憶がないから、君は純粹に誰かのことを見ることができるのかな」

ヴィオレントはちらりと中庭に視線を向け、それから向き直って前に歩き出す。

「この国に生まれれば、必ず大人達から『魔力を持つ者は災いをもたらす』と言われて育つ。だから魔力が暴走すると、過敏に反応し、恐怖から魔力を持つ人間を殺してしまうんだよ」

「そう……なんですか？」

記憶がない設定ならば、こう答えても不自然ではないだろう。考えつつ問いかけると、ヴィオレントはくすりと笑う。

「実際、被害を出すことは度々あるんだ。けれど本人とて自ら望んでそうしたわけではない。そして大半は、落ち着かせれば暴走も収束する。それがわかっていても、幼い頃から植え付けられた偏見が邪魔をして、なかなかまっすぐにこちらの言葉を聞いてはくれないものなんだよ」

だからアルスメイヤはここから出られない、とヴィオレントは言った。

「そんな状況がなかなか改善できなくてね。だから君が嬉しそうにあの子達を見ている姿に、ほっとしたんだ。知らないからこそ全てがそのままの姿で見えるんだろうね。グレイブのことも」

「グレイブさんのこと？」

どうしてそこでグレイブのことが出てくるのだろう。グレイブも同じ事を考えたようだ。

「私がおか？」

「鏡で自分の顔を見るといい。そんな威圧的な顔をしてばかりいるから、ほとんどの人間が君を遠巻きにしていることに気づいているか？ けれど、エリヤさんは困れば必ず君を頼って見ている。君の本質を見てくれるということだよ」

ヴィオレントの言葉に、エリヤは顔が赤くなりそうなほど恥ずかしくなる。

エリヤにとってグレイブは恩人なのだ。だからつい頼ってしまふことを申し訳ないと思ってるのに、持ち上げられてしまっていたたまれない。

ちらりと横目でグレイブを伺えば、彼はいつも通りの無表情のままだった。

「それよりもグレイブ。アヴィセント・コートに彼女がいたかどうかを調べるにしても、ここまで来る必要はなかっただろう？」  
ヴィオレントは探るような目をグレイブに向ける。

「エリヤさんをアルスメイヤに合わせる必要があった？ それとも彼女に魔力が少なそうなことがわかっていながら、それでもアヴィセント・コートにいた疑いを持つような理由があったか……」

「未だにここから出て行った、複数の者の行方がわかっておりません」  
グレイブは無表情のまま答えた。

「その一人かと思ったのです。アルスメイヤとて顔の特徴を話したところで思い出せないでしょう。離宮を幽閉目的で使い始めてからまだ十年も経っていませんが、居る人間だけでも結構な人数になりつつありますから。もしそんな一人であれば、エリヤの記憶を取り戻す足がかりがみつかるかもしれないと思っただけです」

すらすらと並べ立てるグレイブに対し、ヴィオレントはうるんげな眼差しになる。

「それを僕は信じていいのか？ 一応ここは、機密施設に相当する場所だ。実際、君は自分からアルスメイヤの家名すら教えていないようだね？ そこに身元を探すためだけに、見知らぬ少女を連れてきたと言う、その言葉を」

ようするに、ヴィオレントはグレイブの言葉を疑ったままなのだ、

とエリヤにもわかる。

けれどもこのまま黙認して、グレイブを信用してもいいのかと聞いているのだ。

「私の忠誠に代わりはありません」

グレイブは年下の少年王に、きっぱりと言い切った。

揺るぎない態度に、ヴィオレントは苦虫をつぶしたような表情になる。おそらくは強い言葉でゆさぶって、真意を聞き出したかったが、グレイブが白状しなかったことに呆れているのだ。

それは多分、グレイブを心配しているからだ。

「君を見てると恐くなるんだ。僕やアルスメイヤのために、いつか命を捨てそうで」

その物言いから伺えるように、目的のためには何でも一刀両断にして歩いているようなグレイブのことだ。

ヴィオレントも忠誠には全く疑いを抱いていないのだろうけれども、代わりに、何もかもを隠して自分一人抱えて処理しようとするのではないかと言いたいのだ。

ヴィオレントの考えを想像したエリヤは、はっとする。

まさかグレイブの虐殺と処刑は、ヴィオレントが心配したような事態が起こったせいではないだろうか。

そう思うと、一層ヴィオレントの言葉を重く感じた。

このままでは危惧した通りにグレイブが行動し、彼を永遠に失ってしまうのだ。

「陛下が望む限りはそのようなことは……」

ヴィオレントはグレイブの言葉を遮った。

「君の約束は、僕は信用しないことにしている。今までだってさん



ざん煮え湯を飲まされ続けてきたんだ」

「しかし陛下……」

さらに釈明をしようとしたグレイブを放置し、ヴィオレントはエリヤに向き直る。

何だろっ、と首をかしげたエリヤに彼は言った。

「エリヤ。この堅物を宜しく頼むよ」

「……うっ？」

ヴィオレントはさっとエリヤの手を取り、手の甲に口づけを落とした。

言葉を無くすエリヤに、ヴィオレントは鮮やかな笑みを見せて背を向ける。

三人は既に宮殿の外へ出ていたのだが、外殻の門の近くにはヴィオレントを待っていたと思われる衛兵が何人か待機していた。

「陛下！」

驚いたようなグレイブの声にもヴィオレントは振り返らず、待っていた衛兵と共に先に門の外へと出ていってしまった。

## 7章 貴方の上司とお会いします 5

呆然としていたエリヤは、やがてヴィオレントの唇の感触を思い出し、恥ずかしくなったと同時に冷や汗が吹き出す。

どうしよう。

どうしようもないけど、手の甲に口づけなんて場面を複数人に見られてしまった。

いやでもここは百年前の世界だ。こういった挨拶の習慣が廃れてないだけで、ああでも、こんなのは自分の生きてた時代にはもうあとかたもなかったのだ。こんなこと王様にされて、自分はその辺に転がってる一般庶民なのに……。

脳内だけはパニック状態で、思考があっちこっちに飛んでいた。けれど体の方は硬直したままだったのだが、

「エリヤ」

グレイブが肩に触れた瞬間、硬直が氷解したように声が出るようになる。

「こ、こ、こ」

「こ？」

「こわかった……」

総括すると、周りの目と、王様に接近された緊張感で、恐いと感じただのだ。

へなへたと座り込んだエリヤは、小さく吹き出す声に驚き、顔を上げた。

グレイブはいたずらをした子犬を見るような目で、エリヤを見て

いた。

「あの方は、少し軽率なことをなさる時がある。慣れないことで驚いただろうが、貴族の挨拶みたいなものだ。気にするな」

事実を並べているだけの言葉。

でもそれが、エリヤを気遣ったのものだと感じられるのは、グレイブが優しくエリヤを見つめてくれているからだろうか。

エリヤは、その視線から目が離せなくなる。

まるで針で固定された、標本の蝶のようだ。

しかし不意にグレイブがその笑みを消す。

もつたいない。

そう思った瞬間、グレイブに突然抱き寄せられ、もろともに地面に伏せる。

「なっ……!?!」

疑問の声は爆発音にかき消された。

グレイブが庇いきれなかった肩や足に、熱波と土が当たって悲鳴を上げた。

何が起こったかわからない恐怖に、手足が縮こまりそうだった。

が、素早く起き上がったグレイブに、引っ張り上げられるように立たされ、走らされる。

ほとんど小脇に抱えられるようにして移動するエリヤとグレイブを、炎の固まりが追いかけるように着弾しては土をえぐる。

魔法だ。

そう分かった瞬間、エリヤの頭が回転を始める。

滑り込むように隠れた木の影から見れば、離宮外郭の塀の上に人

影が立っているのが見えた。  
グレイブが銃を抜いて構える。

でも銃弾は炎に影響も与えず、敵にも距離がありすぎて届いていない。

このままではグレイブが死んでしまう。

焦ったエリヤの視界に、グレイブのコートの裏、懐しから見慣れた銃のグリップが覗いているのが見えた。

とっさにエリヤはグレイブの胸に手を突っ込む。

グレイブが驚いている間に、エリヤは人影に向かって銃を構えた。

今グレイブを死なせるなんて、そんな恩知らずなことをするぐらいならと、自分の秘密がバレることもどうでもいいと思えた。

「おい、それは向日葵しか……！」

グレイブの制止の声は無視し、エリヤは叫んだ。

「解除、精霊歌の印！」

銃身の金具が光を放つ。瞬間に光は銃口へ伝播し、銃口の金具が生き物のように蠢き絡み合った。

エリヤは引き金を弾く。

体の中から活力が奪われるような感覚が襲う。魔力が銃に奪われたのだ。

銃口から、白い光が放たれる。

甲高い、女の叫び声にも似た音を連れて。

白い光に触れたとたん、敵の炎はかき消えた。

しかし次の攻撃は目前まで迫っていた。孤を描いて落ちてくる炎の固まりが一つ、木を半ばからなぎ倒し、次の炎が迫る。

「エリヤ！」

グレイブが庇ってくれようとする。

けれどこのままでは彼が怪我をする。いや、怪我だけでは済まない。

「これで、なんとか！」

エリヤは全力でグレイブを押しつけ、炎へ向かって白い手袋を履いた自分の右手をのばした。

岩を叩き付けたような衝撃。一瞬の熱さ。

痛みに歯を食いしばったが、炎は霧散した。

「さすが防護用……」

手袋は魔術銃作製時の爆発や術の失敗に耐えられるように作られているだけあって、見事に魔法の炎を防いでくれた。

けれど油断はできない。

じんじんと響くような痛みを堪えながら辺りを見回す。が、あちこちに落ちた炎の固まりが落ちて爆発し、土煙が舞い上がって視界が悪い。

見えないことに怯えながら銃を構え、地面に膝をついたまま辺りを見回したエリヤは、やがて土煙が晴れた時、灰色の塀の上から敵の姿が消えていたのを見た。

敵はいなくなった。

ほっとしながらも、エリヤは泣きたい気分だった。

絶対に変だと分かったはずだ。

記憶がないのなら、使い方がわからないはずの銃を扱ってみせてしまった。

しかもグレイブの『向日葵』発言から、彼が銃の安全装置の解除方法を知らないままだったことがわかる。それを知っていたエリヤを、どう思ったのだろう。

嘘つき、と言われるだろうか。

騙していたから、牢送りだと言われるだろうか。

でも自分はグレイブを守りたかったのだ。自分を拾ってくれた優しい人を。それだけは後悔すまい。

そう心に刻んだエリヤの右手を、グレイブが自分の手で包み込むようにする。

いまだしびれとじわじわと痛む手を、気遣うみたいに。

「……手は、平気か？」

もしかして、怒っていないのだろうか。

恐る恐るようすを伺えば、グレイブはいつも以上の険しい表情をしている。

エリヤは思わず体をこわばらせた。

「全て、話せることを話して貰おう」

淡々と言い渡され、エリヤは唇を噛みしめながら、小さくうなずいた。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 1

まず、グレイブはその場の処理を行わなければならなかった。離宮を守る衛兵達が集まり、グレイブは彼らに指示を与えるのに忙しくなる。

エリヤはその中の一人に付き添われ、手袋をポケットに仕舞い、濡れた布で手を冷やしていた。

手袋自体はさして煤けたりもしなかったのだが、熱と衝撃を全て防ぎきれるものではなかったらしく、軽い火傷をしたようだった。

エリヤにとってはグレイブを守った勲章であり、秘密がバレてしまった証。

ぼんやりと赤くなった手を見つめている間に、グレイブに呼ばれて駆けつけたらしい公安官達が離宮の中へ大挙してやってきた。

その中の一人が、エリヤを家まで送ってくれと申し出てくれた。エリヤがここにおいても邪魔になるだけだ。

うなずき、歩き出す前にグレイブを探して振り返った。

沢山の黒緋のコートを着た部下に囲まれたグレイブは、エリヤの視線に気付く余裕はなさそうだった。

そうして大人しく家に帰り、一礼して去る壮年の公安官を見送りながら、エリヤはふと思った。

もしかして心配してくれたから送ってくれる人を手配したのではなく、エリヤが逃げないよう、きちんと家に戻るのを確認させたのではないかと。

その考えは、エリヤの胸に痛みをもたらず。

嘘をついていたエリヤを、もう信用してもらえないかもしれない。その想像は酷く苦しく、エリヤはグレイブの部屋に入ってケーブを

脱ぐと、ソファに腰掛けたままぼんやりと手を見つめ続けていた。

しばらくして部屋の扉がノックされる。

やってきたのはフィーンだ。

「朝、急に飛び出して行ったから心配してたけど……何かあったのかい？」

ぼんやりしたままその言葉を聞いていると、フィーンはエリヤの顔をのぞき込んでくる。

そうだグレイブが狙われたことを話しておかなければ、とエリヤは思った。あんな狙われ方をしたのだ。グレイブの家であるここもいつ狙撃されるかもしれない。

「あの、グレイブが狙われて、怪我しそうになって」

フィーンもまたグレイブを恩人だと思っている。だから驚き、安否について尋ねられると思ったのだが、

「エリヤは？ 君は大丈夫？ 怪我はないみたいだけど、恐かっただろう」

フィーンは心配そうな表情になると、エリヤを抱きしめてくれた。いつも守ってくれるグレイブとは違う、柔らかな感触。

もう亡くなった母親や、育ててくれた祖母の抱きしめてくれる腕を思い出し、エリヤは思わず泣きそうになった。

泣いてすがって、フィーンになにもかも打ち明けたくなる。でもそれはできない。

言えばフィーンにまで変な目で見られるのが恐かった。蔑視されるのは、もとの時代でもう懲り懲りだった。

唇を噛みしめて黙っていると、やがてフィーンが諦めてくれた。

「君はルヴェと一緒にだね。頑固なところも」



そう言つて、フィーンはミルクティーを用意してくれた後は、エリヤを一人にしてくれた。

せつかくの好意だ。冷めるまま放置するのは本当に恩知らずだろうと、エリヤはミルクティーに口をつけながらルヴェエについて思い出す。

「そつだルヴェエ……」

ルヴェエもまた、エリヤと同じ未来から来た人間だ。

フィーンの口ぶりからすると、どうやら姉に全てを話しているわけでもないらしい。

「あたしと同じ、なんだ」

きつとルヴェエも、突飛なことを言つて姉のフィーンに嫌われなくなつたのだろう。

ルヴェエならばエリヤの気持ちをわかつてくれるだろうか、と考えた。

話したい。

ゆっくりとミルクティーを飲み干したエリヤは、ルヴェエを探しに行こうとソファから立ち上がりかけた。

が、部屋の扉が予告無く開く。

現れたのはグレイブだ。

いつも見ているはずの無表情な顔が、ひどく恐ろしく見える。

グレイブはソファの近く、書き物机の椅子に座る。が、黙つたまままだ。

きつとエリヤが約束通り話すのを待っているのだろう。そう思つたエリヤは、恐くて震える声で、ぽつりぽつりと話した。

「あたしは、たぶん未来から来たんです……」

あの日、エリヤが外の様子を見て驚愕した理由。

そして新聞の日付を見て知った、過去へ移動した事実。

最初は自分でも受け入れられず、嘘であってほしいと思ったこと。けれどエリヤが知っていた王都とは違う町の様子にあきらめ、次に頭がおかしいと思われるのが恐くて、言い出せなかった事を。

「あの銃。あれは、あたしの暮らしていた時代にある銃なんです」  
銃のことに話しが及ぶと、じっと目を閉じていたグレイブがエリヤを見る。

「信じられないでしょうけど、一〇〇年後には扱いづらかった魔力を、ああやって術式印を組み込んだ物を使って制御して、生活に利用してるんです」

そうして馬車からは馬が必要なくなり、火をおこすのも魔力を利用して行なわれるようになった。昔のままなのは、常に魔力を使っていられない灯りなど、わずかな代物だけだ。

「それでも、銃はあまり持っている人はいません。あくまで武器ですから。あたしは……そういった銃を造る技師の卵だったんです」

だから銃を持っていた。銃の扱いも心得ていた。鉄の街の狙撃で、音に気付いたのはそのためだ。

グレイブはため息混じりに言った。

「お前は、明らかに用法をわかっていて、使った様子だった。だから記憶を失ったというのは嘘で、犯人の仲間だと分かって捕まるのが恐くて言い出せなかったのかと思っていた」  
そしてゆるく首を横に振る。

「しかし一〇〇年後か……」

そのまましばらく沈黙してしまう。

口には出さないが、信じがたいと思っっているに違いなかった。さすがに未来から来たと言われてもすぐには受け入れられないのだろう。

けれどエリヤの真実はこれだけだ。信じて欲しい。そう願うしかなかった。

「少し考えさせてくれ」

やがてグレイブはそう言って立ち上がった。

「あのっ！」

ここまで話したのだ。

もしかしたらエリヤは頭のオカシイ人間だと思われて、もう話を聞かないと決めてしまったら、二度とこんなことを言う機会はなくなる。

だから伝えておきたかった。

「アヴィセント・コートは、一〇〇年後には閉鎖されて、庭も公園や墓地になってます。誰も、幽閉されたりしてません」

グレイブは少し目を見張ってエリヤを見て、それから部屋を出て行った。

一人残されたエリヤは、脱力してソファの背にもたれかかる。

「全部、言っちゃった……」

信じてもらえる確率は低い。むしろ巨大犯罪組織が狂った学者かなんかに銃の製作を手伝わされていたとも言え、すぐに信用してもらえたかもしれない。

けれど真面目なグレイブは、必ずありもしない犯罪組織や学者を探そうとするだろう。そんな徒労をグレイブにさせるわけにはいかない。なにより嘘だったと分かれば、より深くエリヤに不信感を抱

く。

彼に嫌われるのは嫌だった。

それなら、エリヤのことを妄想が過ぎる人間だと思ってくれた方がまだマシだ。

唯一良かったのは、アヴィセント・コートのことを話せたことだ。笑い話としてでもいい、アルスメイヤに伝われば少しは喜んでくれるかもしれない。その様子を見て、きっとグレイブも心がなごむはずだ。

「でもアヴィセント・コートは……」

エリヤはグレイブに言えないままだった。

あなたがいつか虐殺を行なってしまうなどとは。

その結果、アヴィセント・コートが必要なくなるのだという事も。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 2

グレイブは再び出かけたようだった。

沢山の魔力持ちを幽閉している離宮で騒ぎがあったのだ、副長官の彼は仕事が山積みだろう。

日が暮れるまでエリヤは鬱々として過ごしていた。

何度かフィーンが心配して見に来てくれたが、その優しさに甘えて、平常通りになることもできず、かといって話すことも出来ずによい心配させてしまったと思う。自己嫌悪するも、エリヤ自身にもどうにもできなかった。

だから、ルヴェエがやってきたとき、思わず飛びついてしまったのも仕方がないだろう。

「ルヴェエ！」

泣く一歩手前の気持ちで抱きつくと、細身のルヴェエはたたらを踏んだ。転ばなかったのは、その背中が閉じた扉に支えられたからだ。

「どうしよう、どうしようルヴェエ！」

「ちよっ、何？ どうしたのよエリヤ！」

壁に押しつけられる形になったルヴェエは、目を白黒させていた。

「全部バレちゃったの！」

「バレたって何を？」

「あたしが今の時代の人間じゃないって」

「はあっ!？」

ルヴェエの驚く声に煽られるように、エリヤは目に涙が浮かんできた。

「み、未来からきたって、言っちゃった……どうしよう。グレイブに、見捨てられちゃう……」  
ちゃんと説明しなくちゃいけないのに、それ以上は言葉が嗚咽にかわってしまった。

ルヴェもしばらくの間呆然としていたが、やがて我に返ったのか、エリヤを宥めながらソファに座らせてくれた。ルヴェ自身も隣に座り、エリヤが泣き止むまで待つてくれる。

なんとか涙を押さえ込んだところで、ルヴェに説明を求められた。

「で、君は今日グレイブを追いかけて行ったはずだけど、その後何があつたの？」

「グレイブと一緒にいたら、変な人に、術式銃で攻撃されて」

泣いた直後で頭も上手く回らないが、アヴィセント・コートのことだけは除外した。アルスメイヤやヴィオレントのことはさすがに話すわけにはいかない。

「魔法攻撃を受けたの？」

聞かれてエリヤはうなずいた。さすが同じ時代に暮らしていた相手だけあって、話が早い。

「それで、咄嗟にグレイブがもってたあたしの銃で応戦しちゃって」

「あたしの銃？」

「父が銃技師で、その形見を持ってたの。グレイブが預かってたんだけど……」

「それを使ったせいで、グレイブに疑われて話した……と」

エリヤはうなずいて肯定した。

「はあああ」

ルヴェは天井を仰いで、次いでうなだれた。

エリヤの方は相変わらず暗澹とした気持ちだったが、少しだけ心

が落ち着く。

全て話してしまえる相手がいて良かったとしみじみ思う。自分一人で抱えていたら、不安で恐くて、落ち着かなくてたまらなかつただろう。

「それにしても、なんでグレイブを追いかけて行っちゃったの？」

「だって……。グレイブの事件の、真実が知りたかったの」

エリヤは唇を噛みしめる。

グレイブの捜査協力をしていると見せかけてついていけば、虐殺事件の原因ぐらいはわかるかと思っただのだ。

「私、歴史を変えちゃいけないって言ったわよね？」

「でも恩人が死んじゃうのよ？」

それを思うと、また涙がこみ上げてきそうだった。

「何もできないかもしれない。だけど理由がわかったら、もしかしたら誰も死んだりしない方法が見つかるかも知れない。できなくても、状況を把握しておけば、処刑される前にグレイブを逃がせるかもしれないじゃない」

「そんなことしようと思ってたの？」

「ルヴェが歴史を変えるようなことしちゃいけないって言うのはわかる。だけど恩を返すぐらいのこともしちゃだめってことはないでしょう？ グレイブ一人ぐらい、頑張れば私一人でも隠しておけるかなって」

無謀だと言われるのではないかと思った。

なにせ自分が生きてきた時代とは違うのだ。

けれどグレイブは、道端で倒れていた見ず知らずのエリヤを拾ってくれた人。たとえそれが捜査情報を得られるからという理由でも、そうしてくれなければ、エリヤは全く知らない土地同然の王都で、路頭に迷っていただろう。

するとルヴェエは腕を組み、なぜか意味深な視線をむけてくる。

「……惚れちゃった？」

「は？」

言われた単語がすぐに理解できず、聞き返してしまう。

「エリヤ、お姫様だっこされて帰って来ちゃったじゃない。あの様子見てたら、ころっといつちゃったのかなって思ってた」

「ころっとつて、え？」

惚れた？

ルヴェエに言われた単語を思い返ししながら、エリヤは無意識に自分の両手で頬を押さえていた。

惚れるというのは、エリヤがグレイブを好きだということだろうか。

次にお姫様だっこされた時のことを思い出し、エリヤは自然と顔が火照ってくる。

攻撃されたのはグレイブなのに、エリヤを庇ってくれた上、歩けなくなったエリヤを運んでくれた。恥ずかしかったけれど、間違いなく自分を保護してくれると信じられるグレイブの腕に、とても安心したのを覚えている。

優しい人だと思った。

だけどころつとといった……のだろうか？

「まあ自覚がないのか、ほんとに恩を感じてるだけなのか知らないけど」

ぐるぐる考え続けるエリヤに、ルヴェエが苦笑う表情で言った。

「辛いならグレイブの傍から離れる？」

「離……れる？」



「あの人、エリヤはよく知らないかもしれないけど、犯人は容赦なく殺すし、事件のためなら関係者を脅すことぐらい平然とやってのける人なのよ。子供でも容赦なし。だから悪魔呼ばわりされたりして。そんな人だから、まずエリヤの事を信じて庇ってくれるか…」

自分の考えていた最悪の像をルヴェエの口から聞かされ、エリヤは唇を噛みしめる。

「あの人ね、魔法に関わる事件ばかり扱ってる人なのよ」

その理由はエリヤにもわかる。おそらくは、魔力を持つ人間を保護するため。そして何よりもアルスメイヤのためだ。

アルスメイヤのことを思い出すと、エリヤは胸が痛んだ。

「この時代に銃を扱えるっただけで、おそらくグレイブはエリヤを監視対象として扱うでしょう。疑いが晴れるまで、きっとこの家に軟禁状態じゃないかしら？ その間に、例の悲劇なんて起きたら…」

ルヴェエが顔を覗き込んでくる。

「見たくないでしょう？ 何もできず、疑われたままその日を迎えるなんて、きつと辛いわ」

頬にあてていた手から力が抜けて、膝上に落ちる。

エリヤはうつむいた。

このまま、その日を迎えるのは確かに拷問に似ている。諦めて虐殺事件と処刑されることをグレイブに話したところで、もうきつと信じてはくれない。

それよりは、と思った。

ルヴェエに隠してもらっておいて、処刑の時に助け出す機会を窺った方がいいのではないだろうか。

本当は、グレイブに虐殺事件なんて起こさせたくない。そんなことをしたから、優しい彼は自害するような気持ちで処刑を受け入れたのだろう。でも止められないなら、せめて彼だけでも助けられるようにしておきたかった。

二度、三度。エリヤは繰り返し考えた。

そして何度も同じ結論に行き着いて、ようやくルヴェにうなずいた。

「あたし、ここから離れる」

ルヴェは悲しそうに笑って「よし」と応じてくれた。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 3

「そしたらすぐに出ましょ。グレイブが帰ってこないうちにね。必要なものは後で届けてあげる」

言われてエリヤは、ルヴェと一緒に部屋を出た。

そこで階段を上ってきたフィーンと行き合うが、

「姉さん、ちょっとエリヤが元気ないみたいだから、買い物連れてくわ」

「そう？ もう暗いから気を付けて」

フィーンは怪訝な顔をしたものの、ルヴェの言葉にうなずいて送り出してくれた。

外へ出てから、エリヤはルヴェが心配になって尋ねた。

「後でグレイブにあたしを連れ出したってバレちゃうんじゃない？」

「大丈夫大丈夫。はぐれてわかんなくなっただって言い張れば、グレイブだって追求できないでしょ」

軽い調子で答え、ルヴェは手をひらひらと振る。

そしてエリヤの左手を掴んで、先導して歩き始めた。早足で。

大通りをよぎって路地に入り、しばらく無言だった。エリヤとしても、おしゃべりをする気分ではなかった。逆になりに難かった。

歩きながら考えたのは、ルヴェと繋いだ手のことだ。

ルヴェの手は細めで、手の平の大きさとか節の太さのあたりで、かろうじてエリヤと差がある程度だ。

不快なわけではない。

ただ無性に、グレイブの手の暖かさが懐かしい。自分の手を包み込んでくれたグレイブの手は大きくて、意外に暖かかった。

「それにしても銃技師がお父さんだったのかあ」  
ふいに、ルヴェがしみじみとエリヤに切り出した。

「私も銃技師になりたかったのよね」  
ルヴェの言葉に、エリヤは目を丸くする。

「銃技師に？ 学校に通ってたの？」

「うん、ちよつとの間ね。その後すぐに過去にきちゃったから……。武器に使うだけじゃなくて、花火の打ち上げとか、花吹雪の幻影とか、音楽を鳴らしたり何にでも応用できるじゃない？ しかも銃技師資格を持っていれば、各術印の構成資格は全部フリーだし」

「ああ、そうだよね。同じクラスにも、銃を作りたいわけじゃないけど、他の資格も一気に取得できるからって学校に通ってる子が沢山いたみたい」

基本的に銃は武器だ。

平時には平和利用されてはいるものの、基本的には武力紛争や戦争でこそ銃技師の名が喧伝される代物だ。だから銃技師資格を得ても、武器や戦争に関わりたくない者は沢山いる。

けれど他の学校では、各要素それぞれの資格しか取得できない。だから全てが学べる銃技師の学校へ入るのだ。

ルヴェはエリヤの言葉にうんうんと同意していたものの、勢い良く振り返ってエリヤに詰め寄った。

「ちよつ、同じクラスって！？ まさかあんたも？」

「うん、あたしも銃技師の学校にいたんだよ、ルヴェ」

お揃いであることが嬉しくて、何より学校の話をそれなりに仲良くしてくれるルヴェと話せてうれしかったエリヤは、笑顔でうなずく。

「だけどね、あたし魔力が弱いから成績悪くて。実はちょっとだけ過去の魔法がほとんど使われてない時代に来て、ほっとしてるんだ」

少なくとも、魔力が弱くていじめられることはない。代わりにアルスメイヤなど、魔力が高いがために世間から冷たくされている人もいる。

「それにしても過去も未来も極端ね。魔力のある無しがもてはやされる極端な状態じゃなく、ゆるやかに、どちらも認められる世界にならなければ、あたしだってあんなに……」

あんなに、未来で悲しい思いをし続けることはなかったのに。既に遠く離れた未来に対して、エリヤは物思いにふける。

「エリヤったら気概が足りないのねえ」  
しかしルヴェエの意見は違うようだ。

「未来の知識を使って、見返してやる、とは思わないの？」

「……え？」  
変な言葉を聞いた。そう思ったエリヤの髪を、少し煙たい風がゆらしていく。

見つめるルヴェエの顔は、薄暗い路地の中で白く浮き上がって見える。でも、笑っている。きっと冗談だと思った。

「やだなルヴェエ。あたしは見返すとかより、そういうのに疲れちゃったから関係ないところにいたいわ」

「エリヤは欲がないのね」  
ルヴェエの笑顔は崩れない。

「私は、どうせなら歴史に名前を刻んでやりたいわ。だから」

ルヴェは路地裏の、見知らぬ建物へ向かっていく。  
薄暗くてもわかる煉瓦積み の頑丈 そうな、それでいて大きすぎな  
い建物。煙たい風。きつと工房だ。

「争う気がないなら、ここで大人しくしててもらおうわ」

「ルヴェ？ 何を言ってるの？」

エリヤの手を引いて、ルヴェは工房の扉に手を掛ける。ルヴェは  
返事をしてくれない。

何か嫌な感じがしてエリヤは足を踏ん張って抵抗した。

「グレイブから離れたいんでしょ？」

しかし元々ルヴェは男だ。引き倒されそうになりながら、押し開  
けられた扉の向こうへひきずられた。

「ちよつ、ルヴェつ、やだっ！」

ルヴェは一体何をするつもりだ？

わからないけれど、ろくでもない事だということだけはエリヤに  
も察せられた。

全力で藻掻こうとしたが、扉の中から伸びた手に、一気に引きず  
り込まれて扉を閉められた。

「おい、こいつを殺して来るんじゃないや無かったのかよ？」

ルヴェが手を離しても、エリヤはもう一人に抱え込まれて身動き  
がとれない。でも見知らぬ人間に拘束されていると思うと、よけい  
に恐くなって手足を振り回そうとした。

「解除、ガラハドの毒」

衝撃は軽かった。

けれど一瞬のまばゆさに目を閉じた次の瞬間、体から力が抜けて  
いき腕や足が弛緩する。

「な……」

撃ったのは、目の前にいるルヴェだ。

銃口の前で絡む術式がきしむ音をたてて離れていき、銃そのものはルヴェのスカートの隠しに納められる。

「ルヴェ、どうし、て」

口も上手く回らない。

「おっと」

倒れかけたエリヤの体を背後にいた男が抱え、作業場とおぼしき場所の台に横たわらせられる。そしてようやく、自分を拘束していた男が誰だったのかわかった。

グレイブと行った銃器の店。

その職人、ローグという名前だったか。顔はしつかり覚えていないけれど、耳に何個もつけた金輪のピアスに覚えがある。

そこではつとエリヤは思い出す。

店で見た、銃身内部に刻まれた旋条。見覚えがあると思ったのだ。

あれは金影螺旋。

魔術の基本的な術印である螺旋に、魔力を呼び出す印が絡まっている。まっすぐに飛べと念じれば、わずかながらに持ち主の魔力を使い、鉛玉に魔法が絡まり、念じた効果をわずかながら発揮する。

だからあの店の銃は、急に銃の性能が上がったのだ。

「で？ 質問に答えるよルヴェ。なんでこいつを殺さなかった？」

ローグの質問に、ルヴェは肩をすくめてみせる。

「だって、この子も銃技師の知識を持つてるらしいのよ？ それも私より少し後の年に学んでる。だから私が知らない知識を吐かせて

からでもいいと思って」

殺すのはいつでも出来る。そう答えて、ルヴェエはエリヤに近づいてくる。

「ルヴェエ……」

「そんな悲しそうな顔しないでちょうだい。できればあんたのことは殺したくはないのよ。同じ仲間でしょ？」

首をかしげ、可愛らしく言うルヴェエ。

「でもグレイブに関わるのはやめなさいって忠告したのに、聞かなかったのはエリヤよ？　せっかくだからあなたを餌にして、グレイブを殺さなくちゃ」

楽しげに、ローグが差し出した紐でエリヤの両手首を後ろ手に縛る。エリヤはグレイブを殺すという単語に暴れそうだったが、手足が動かずそれも叶わない。けれど表情でわかったのだろう。

「驚くことじゃないでしょう？　どうせ歴史でもグレイブは死ぬのよ。それが忠誠を誓った王の手によるものになるか、私が殺すかの違いだけ」

でも歴史は変わってしまう。

グレイブが死ねば、虐殺は起こらないのだ。

「どう、して？」

「馬鹿ねえエリヤ。私の望む歴史に変えるために決まってるじゃない。せっかく未来の技術を持って過去に来たのよ？　せっかくだから、死ぬのがグレイブ一人で済むように行動してるだけ。沢山の人がおかげで助かるのよ？　その邪魔をしてほしくなかったから、あなたには歴史を変えるのかって脅したのよ」

「そんな……」

ルヴェエは真摯な気持ちで、歴史を変えるなど言っていたとばかり



思っていた。だから未来のことなども考えて、せめてグレイブ一人だけでも助けられる道がないかと悩んだのに。

けれどルヴェはさっさとエリヤを放置し、ローグと話し始めてしまふ。

「ほかの人達の準備は？」

「それなりだな。おい！」

ローグの声に、奥の扉が開いた。数人が作業場と思われる広い場所へ入ってきた。

既に目を開けるのも億劫になっていたが、エリヤは現状をとにかく知りたくて、必死に観察した。

その誰もが、職人のようだ。手に持っているのは銃。

（違う、術式銃だ）

白金や金と二種類の色の違いはあれど、それは全て銃身に過剰とも言える装飾のふりをした『術式』が描かれた銃だ。

こんなに沢山の銃を、いつの間に誰が製作したのか。

驚きながらも、答えはエリヤ自身の心の中から浮き出てくる。

ルヴェだ。

仕事だと言って朝から晩まで大抵不在にしているルヴェ。

おそらくそうしてローグの工房などに入入りし、密かに銃を量産していたのだろう。

（グレイブに……）

知らせたい。

このままでは、術式銃の使い方が分からない彼は殺されてしまふ。

そう思ったが、エリヤは身動きができない。それどころか、だんだんとも思考も上手く働かなくなっていく。

「最も邪魔な悪魔を排除したら、もう何も気にすることなくこの銃の作り方を教えてあげるわ。そうしてみんなで魔力があっても差別されない世界を作りましょう?」

ルヴェの言葉を信じられない思いで聞きながら、エリヤはとうとう意識を失った。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 4

「わたし、たぶん未来から来たの……」

そう言われた瞬間、グレイブの心に浮かんだのは疑惑だった。当然の思考をしたはずなのに、すぐに自己嫌悪に陥った。

どうして自分は、彼女を信じてやれないのだろうか。

「そうか。完全に撒かれたな」

公安官庁の一室。堅牢な黒い執務机に肘をついていたグレイブは、部下の報告にうなずいていた。

あの攻撃の直後、駆けつけた衛兵の数名が先に敵を追いかけた。しかし敵は何種類もの銃を用意していたのだろう。風を操って宙を駆け、やがて衛兵達の目をくらませてしまったようだ。その後更に大人数を投入して犯人が消えた辺りを捜査させたが、結局見つからなかったのだ。

「申し訳ございません」

渋い表情で頭を下げる部下に「気にするな」と声をかける。

「相手は魔力持ちだ。今までも正攻法では捕縛できなかった。別なやり方を考えるしかないのだろう」

部下は顔を上げる。

「では、以前から計画していた通り、アヴィセント・コートの罪人を？」

「力さえ使わなければ暴走はあり得ない。捜査に同行させる許可をとろう。そうなれば、魔力の痕跡を感じて、行方を追いやすくなる」

暴走させてしまうほどの魔力を持つ者ならば、魔力の気配に敏感だ。その感覚を辿らせれば、普通に捜査するよりも格段に精度が上がるだろう。

「しかし……志願する者がいますかね？ いたとしても、公安官達も対応できるかどうか」

部下の懸念についてはグレイブも考えていた。

生まれながらに迫害されてきたのだ。あの穏やかな箱庭から出て再び世間の凍り付くような風に当たれと言われて、尻込みしない者はいない。

一方で、公安官達はそんな風に怯えた魔力持ちの人々を見てきたので、総じて同情的だ。最初こそ世間と同じ感覚を持っていたようだが、容赦のないグレイブの対応に、なおさら可哀想だという気持ちをかき立てられている。

しかし他の多くの人々は違う。

公安官が連れているのが魔力持ちだと分かった瞬間、石を投げてきてもおかしくはない。

結果公安官が魔力持ちを庇ったなら、人々は公安官にも反感を抱くだろう。

思考を重ねるため目を閉じかけたグレイブだったが、扉をノックする音に顔を上げ、飛び込んできた男の姿に右眉を跳ね上げる。

「どうした」

まだ若い公安官は、走ってきたのかぜいぜいと息をつきながら白い紙片を差し出してきた。

「ふ、副長官、これを」

受け取った紙片は、グレイブも見慣れているフィーンの店の注文を書き留める紙だ。珈琲や紅茶といった商品名が並ぶ欄の上から、

走り書きされているのはフィーンの字だ。

《エリヤが外へ出たまま、姿を消した》  
見た瞬間、グレイブは立ち上がった。

「どちらにせよ搜索は一時中断だ。今日はもう皆を休ませろ」

グレイブは扉を開けて部屋を出た。

公安官庁の中では、まだ早足だった。あまり焦る姿を晒して、行き交う者の不安を煽りなくなかった。それは権限を望んだ自分が得た官職と、引き替えの義務のようなものだ。

しかしそこでグレイブはふと我に返る。

(焦る?)

どうして自分は焦っているのだ。エリヤが逃げたと思っ  
ているからか。

「逃げる……か？」

念のため見張りをフィーンに頼んでおいたとはいえ、エリヤはグレイブが戻るまで大人しく部屋で待っていた。

それを見て、グレイブはほっとしたのだ。

エリヤには何ら後ろ暗い所などないのだと。

何よりあれだけの荒唐無稽な話しを口にした以上、もうエリヤに逃げる必要などない。きっとグレイブの答えを待っていると思っ  
ていたのだが。

「何故外へ出た？」

そこでふと思い出すのは、エリヤが告白してきた時のこと。

とても思い詰めた瞳をして、グレイブを見ていた。

嘘をついているというよりも、信じてもらえるかという不安と、  
頬に滲んだ諦めの影は自分でもありえない話しをしていながら、彼

女にはどうしようもなかったからではないだろうか。

それでも今すぐ判断はできないとグレイブは思ったのだ。あまりに事が異常すぎた。

本当に過去へ人が移動するというのなら、魔法が関与していてもおかしくはない。けれどグレイブには何も分からなかった。せめてアルスメイヤに確認させてからと考えたのだ。

けれどエリヤは家を出た。

答えを保留したことで、逆に信じてもらえないと早々に絶望したのかもしれない。

そう考えつくと、グレイブはわけもなく走り出していた。

「副長官、馬車を……」

「いらん」

公安官の一人が、近くにあつた馬車を寄せようかという言葉に、すげなく答えて走り続ける。

なぜこんなにも自分が焦るのかわからなかった。

けれどゆっくりと馬車を寄せ、じつと家まで揺られることに耐えられないことだけはわかつていた。

こんな風に走っていてさえ、ここ数日のエリヤの表情や言葉が脳裏を廻るのだ。

拾った時、父親を呼ぶか細い声。

目覚めた時に、外の風景を見て衝撃を受けていた事も、演技とは思えなかった。

鉄の街からの帰りに、グレイブを庇ってみせたくせに、恐がって泣いてしまったエリヤ。

アヴィセント・コートでも、エリヤはグレイブを助けるために銃を手にとり、あの白い手袋で炎すら遮って見せた。そんなことをすれば、かならず自分の正体について追求されるとわかつていただろ

うに。

そして観念した様子でグレイブに告白したはずだった。

追求されることから逃げなかった。

なら、グレイブの答えから逃げたのだ。

信じてもらえないのが、恐くて。

「ちっ……」

舌打ちして、グレイブはフィーンの店を目指した。

宵が深くなつた時間だ。

フィーンの店も、扉に営業終了の札を出していた。けれど必ずここにいると思つて駆け込めば、カウンターにいたフィーンが驚いた様子で息を飲んだ。

「……エリヤは!？」

問いかけたグレイブに、フィーンはグラスの水を差しだしながら答える。

「ルヴェが気晴らしに出かけるつて連れて行つたみたいなんだ。変にそこで疑いをかけたら、不審がられると思つて止めなかつたんだけど……。そしたら、途中でいなくなつたつてルヴェが真っ青になつて返つて来たんだ」

「どこへ行くとは?」

「ルヴェが言うには鉄の街の方だつて言つてた。捜査員の人にも言つただけだ。聞かなかつた?」

聞かなかつた。いや、尋ねることすら思いつかなかつたのだ。

自分の焦りようを思い知らされて、グレイブは額に手を当てる。

「グレイブ、私も探しに出ようか?」

「いいや。知らせてくれただけで十分だ」  
そして身を翻し、再び外へ飛び出した。

通りに出たグレイブは、今度は行き合った馬車に飛び乗った。  
鉄の街へ行くなら、走るよりもこちらの方が早い。何より、行き先を聞いて少し落ち着いたのもあった。

「しかしなぜあそこに？」

エリヤが鉄の街に行ったのはグレイブと一緒に一度きりだ。知り合いがいるわけでもないはずだ。

馬車を止めさせて降りる。鉄の街の手前にある路地に着いたのだ。夜になったのと、最近の事件が治まらないことからか、酔った人間の一人もいない。  
静かすぎた。

グレイブは懐から銃を出しながら、辺りの気配を探った。

一人、二人、三人……十人はいる。

そこで閃光が路地に弾けた。

警戒していたグレイブは路地の角へ隠れて避け、続く炎も彼には当たらなかった。

代わりに煉瓦が焼け焦げ、石畳の隙間から伸びかけていた草が炭化してくすぶる。

「傷害罪の現行犯だ」

グレイブは角から腕を伸ばし、銃を構えて照準を合わせる。

紺の瞳が一瞬、金の輝きを帯びた。



## 8章 貴方の秘密を教えてください 5

目を覚ますと、辺りには誰もいなかった。

エリヤは起き上がるうとして、後ろ手に縛られた状態でもがき、

「うわっ」

作業台から落ちてしたたかに尻を打った。

「うつつ、情けな……」

痛むけれど、とりあえず起き上がることはできた。そろそろと立ち上がりながら、工房に完全に人がいないことを確認して、エリヤは紐を切る物を探す。

「ない、ない、ない」

鉄を固定するペンチみたいな器具やらはあるものの、ナイフやハサミのたぐいが見あたらない。

しかもいつの間にか手を縛る紐の一端が作業台の足につながられていて、広範囲には動き回れなかった。

まるで繋がれた犬みたいで、ますます泣きたくなる。

「でも、なんとかしなくちゃ」

自分が気を失ってどれほど経つのかはわからない。けれどグレイブに知らせなければ。そのためにはこの紐を切って、脱出する必要がある。

エリヤは作業台に座り直し、自分の手を戒める紐を見つめた。

白っぽい、麻紐のようだ。おかげで手首がちくちくするし、こすったのか赤くなっている。でも、きつと燃えやすいだろう。

エリヤは目を閉じて自分の手に集中した。

手をよじり、指先が紐に当たるようにした上で、指先から魔力が

流れ出すところをイメージする。

「銃でできるなら、紐だつて出来るはず」

金属がくじり曲がるためには、それなりの温度が必要だ。そのため魔力を注ぎ、熱した上でイメージ通りに変化するよう覚え込ませるのだ。

紐ならば、鉄が溶ける温度ならば発火するはず。

「燃える燃える……」

眩きながら念じる。

流れ出したエリヤの魔力が、紐を内側から発熱させはじめる。

手首が熱くて痛い。でも我慢した。このままでは火傷で水ぶくれになるだろう熱さに泣きそうになりながら耐え、一気に両手首を左右に引いた。

「あつっ！」

紐はなんとか切れた。

エリヤはすぐ水を求めて走り回り、隅にあつた水差しの水を手首に掛け、ほっと息をつく。ひりつく痛みは残ったが、大事な程度だろう。

元の位置に戻れば、熱を込めた紐は炙られたように黒く変色して床に落ちていた。

「さて、ここを出なくちゃ」

手を裾で拭いたエリヤは、ポケットの中に入れたままだった手袋を履く。銃もない状態では、これしか防御手段がない。

次いで外へ続く扉にとりつき、聞き耳を立てる。

けれど閉じている状態では、分厚そうな鉄の扉は向こうの音など届けてくれない。かといってここで待ち続けたあげく、ルヴェ達が戻ってくるのと鉢合わせるのは嫌だった。

息を吸って、そろりと扉を開けてみる。  
特に音は聞こえない。代わりに、

「もう紐を焼き切ったか。多少頭は回るようだな」  
外で見張っていたのだろう男と目が合った。

日に焼けた顔をした中年の男に、エリヤは工房の中へ向かって突き飛ばされる。

「だから見張りなんて悠長な事しないで、こんな子鼠は殺しておけ  
って言ったのに、あのカマ野郎」

愚痴りながらも、男は淡々と手に持っていた銃をエリヤに向けた。  
銃口が火を噴く。

エリヤはとっさに右手を出す。

目の良さだけが自慢のエリヤは、あやまたずに炎を手で打ち払った。

「なっ！」

男が驚いた。

未来の技術である術式銃のことは知っていても、手袋のことについては知らなかったのだろう。

その隙を狙い、エリヤは横を駆け抜け抜けようとした。

「不意をついてもそのト口さじゃあな」

すぐに肩をつかまれて引き倒される。

痛みに呻いている間に、両手首を掴まれてまとめあげられ、銃口を顎につきつけられた。

火傷した手首を掴まれて、痛みにエリヤは悲鳴を上げた。

「ふざけたことしてくれるんじゃないかよ」

銃の冷たさが、顎から首へと移動する。

エリヤは背筋が凍った。

炎で確実に殺すために、首に魔法を打ち込む気だ。

けれどルヴェなどと違って、男は人を撃つのに逡巡もない。最初からエリヤを殺す気であるのだ。

命乞いしても無理。

諦めて、目を閉じたエリヤの耳に宣告が届く。

「死ね」

「死ぬのはお前だ」

耳をつんざく銃声と悲鳴。

恐怖に身をすくめたエリヤは、手首を離されたとたんにその場に座り込む。

そして自分が撃たれていないことに気付いた。

「え？」

けれど見回すより先に、誰かに抱きすくめられる。

ローグにされたような拘束とは違う。懐に隠すように抱え込まれたエリヤは、服から薫る匂いに、胸をつかれるような痛みを感じながらその人を見上げた。

「グレイブ……」

グレイブはローグから視線を外さず、二撃、三撃と射つ。

エリヤは、あれほど恐かった銃声が、今は自分を守る力強い音に聞こえることを不思議に思った。

一方の男は、肩から血を流して床を転げ回っている。

そのまま勝敗が決するかと思えたが、グレイブの銃の弾が尽きた。カチカチ、と撃鉄だけが鳴る。

それに気付いた男が、憎しみにたぎる形相で銃を撃つ。  
グレイブはエリヤを抱えたまま、横へ飛び退いて炎をさけた。

「子鼠ともども失せるこの悪魔野郎！」

男はさらに引き金を弾く。

エリヤはもう一度手袋をした手で遮ろうとしたが、グレイブに両手で抱え込まれてうごけなくなる。

庇う気だろうかと青ざめたエリヤの目に映ったのは、表情を変えないグレイブの顔だった。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 6

迫る炎を前に、淡々と告げたグレイブの瞳が金に色を変える。

瞬間、風と共に湧き上がる魔力が、炎を弾き、そのまま男へ襲いかかった。

「ひいっ！」

吹き飛ばされた男は壁にたたきつけられ、床に倒れて動かなくなった。

敵がいなくなったことを関知したように、風が金の煌めきに姿を変えて空気に溶けて消えていく。

「魔法……」

術式も術式銃も使わずに撃ち出された、魔法だ。

エリヤは恐怖も忘れて、自分を見下ろすグレイブをじっと見上げた。

「今のは、魔法で、だからグレイブって……魔力持ち？」

エリヤの呟きに、グレイブは「そうだ」と静かに答えた。

意外だった。

魔力を持つ人間を虐殺した人なのだ。憎んではいても、自身が魔力持ちだったとは、想像もしなかった。

一方で納得する部分もあった。

魔力の暴走を抑える一番手っ取り早い方法は殺すことだ。

だからグレイブ・ディーエは、魔力持ちの人々を殺したのだと思われていたはずだ。

けれど実際は、グレイブは魔力持ちの人々を離宮に匿っている。

本人を生かしたまま、暴走を止めるのはとても難しい。だがグレイ

ブが魔力を　しかも術式を使わずとも力を鮮やかに制御できる人間ならば、それが実行できるのだ。

思考が一段落ついたところで、体から力が抜けてしまう。

グレイブの腕からずり落ちるようにその場に座り込んだエリヤは、当面の危機が去った安堵にほっと息をついたが、

「それで、どうしてお前はここにいる？」

淡々とした中に混じる、わずかな苛立ち。

気付いたエリヤは、はっと身を固くした。

そうだ。自分はここへ逃げて来たのだ。追求されるのが怖くて。

思わずうつむいてしまったエリヤだったが、響いた銃声に再び体の中を緊張が駆け抜けた。

悲鳴が上がる。

それは今、エリヤとグレイブがいる戸口から見える、建物の陰からだ。

見知らぬ男が倒れ、それを踏み越えるようにしてジェイスが現われた。

「だめですよ副長官。ひとりで走って行ったと聞いて驚きました。何かあつては俺たちが困る」

「すまん、恩に着る」

ジェイスの軽い口調に、グレイブが重々しく応じた。

「ついでにエリヤを保護しておいてくれ。どうも俺の関係者だと思つてか、エリヤが捕まっていたようだ。俺は残った犯人達をかたづけ」

「了解。頼まりました副長官」

ジェイスの答えを聞くと、グレイブはさっさとその場を立ち去っていく。

エリヤはほつとしつつも寂しくなる。

同時に、そんな自分の気持ちに戸惑う。追求されては困るのに、なぜグレイブに行つてほしくないと思うのか。でも捕まって殺されかけた所だったのだ。助かったとはいえ、怖さはまだ残っている。

不安になつて当然だろうと自分に言い聞かせる。

けれどそうして納得した後も、目はグレイブに釘付けになっていた。

ふいに、グレイブが足を止めて振り返る。

自分の視線に気付いたのかと、エリヤがどきりとした。

「そこで待っている。聞かせたいこともある」

「え……」

問う間もなく、グレイブは建物の向こうへと歩み去つてしまふ。

呼び止めようと動きかけた右手を、エリヤは自分の左手でおさえ  
た。

聞かせたいのは、グレイブが魔法を使えることについてだろう。

今までエリヤに知らせずにいたのは、おそらくこの時代の状況からして仕方のないことだったのだろう。

でもその理由を話そうといつてくれた、グレイブの気持ちが嬉しい。  
い。

心の中でそつと喜びを噛みしめていたエリヤは、腕をつかまれて  
現実に立ち戻る。

「で？ 捕まっていたのは本当のようだが、一体何があった？ 副  
長官殿は優しい解釈をしたようだがな。君は魔法を撃つ銃を使える  
つてことは、奴らの仲間だったのが、仲間割れしたのか？」

腕を掴んだジェイスの言葉に、エリヤは息を飲む。



「な、仲間じゃないわ。急に捕まって……。それより！ グレイブは魔力持ちってどういうこと？」

「まあ、見てしまったら気にはなるだろうな」

ジェイスはふっと息をつく。

それから数秒、間を開けて言った。

「そうだな。君が今まで黙りこくっている「あの銃をどうして使えるのか」っていう理由と引き替えになら教えてやってもいい」

エリヤは思案した。

自分の秘密は、話せばきつと信じてもらえない。銃を使えるとかかった以上、どちらにせよエリヤはアヴィセント・コートに幽閉されてしまうだろうから。

ならばここで暴露してしまっても、もういいだろう。

それでエリヤの『荒唐無稽な話』をジェイスが思い出して、グレイブを助けるきっかけになるかもしれない。

何より、グレイブが魔力を使えるのに副長官などしている理由を知れば、彼が虐殺をするきっかけや理由がわかるかもしれない。

エリヤはうなずいた。

「副長官殿が辺りを見回って戻ってくるまで、まだ時間がある。最初から話そう」

そしてジェイスは語った。

グレイブが歩んできた今までの人生について。

## 8章 貴方の秘密を教えてください 7

彼 グレイブ・ディーエは、十七の年まで、家名を持たない孤児だった。

魔力があることが分かったとたん、庶子だった彼は、母親共々公爵家から放り出された。

王家に連なる公爵家から魔力持ちが出たことを厭ったのだ。

そもそも魔力もちは、血筋にかかわらず生まれくる。

親に強い魔力があっても、その子供はほとんど持たずに生まれてくるのが常だ。

だからこそ魔力を持って生まれた子は「失敗」として、幼いころに発覚したなら出生そのものを抹消される。長じて発覚しても、それを理由に殺されることもある。

母親はグレイブに魔力を使わず生きて行くよう言い含めながら彼を育てたが、体が弱かったため、早々に病でこの世を去った。

グレイブは十歳で王都の片隅で一人生き抜かなければならなかった。

そのために彼は、母親の禁じた魔力を使うことすら厭わなかった。

魔力を操るのは、紐で繋いだ家畜を操るのと同じ。

素質だったのだろう。グレイブにとって、魔力の制御はその程度のものであった。そんな彼にとっては、嵐を連れて店を襲撃し食べ物を持ち去ることなど造作もなく、銃にさえ気を付ければ誰もグレイブの行動を阻止することなどできなかった。

誰もがグレイブを恐れ、避けた。

グレイブの方も、そうでなければ生きて行けないのだからと、人と関わらなくなった。

「力があれば何でもできる。そう思っていた」とグレイブは語ったらしい。

それが変化したのは、魔力を暴走させた子供を見つけたことだった。

グレイブには馬の手綱を操る程度のことでも、他の魔力持ちには難しく、そしてそれが出来ないからこそ本人自身も悩み苦しむことを知った。

以来、何人かの魔力持ちの子供を助けたグレイブは、彼らを庇い続けて暮らす親や、魔力をなんとか抑えながら普通の人として暮らす者に手厚く迎えられる、生きることだけ考えていた生活から、穏やかな日常に身を浸すことができるようになった。

ジェイスとであったのもこのころだ。

仲間として信頼を置いていたことから、グレイブは公安官として彼を引き入れたのだという。

そうしてグレイブが思い浮かべるようになったのは、自分の家族の事。

当然、グレイブは自分と母親を捨てた父親のことを恨んでいた。せめて母親の無念ぐらいは叩き付けたい。

そうして公爵家へ忍び込んだグレイブが見たのは、屋敷の片隅で幽閉された、アルスメイヤだった。

アルスメイヤは公爵が改めて迎えた正妻の子供だ。

そして公爵家がのろわれているかのように、彼女もまた大きな魔力を持って生まれてしまった。

正妻は愛情深い女だったのか、アルスメイヤの魔力を六歳までは隠し通せたようだ。けれど心労がたたって、正妻が病床につくよう

になつて、事が露見してしまつた。

使用人さえ、誰もが恐ろしがつて、アルスメイヤは一日一食すらろくに運んでももらえない生活を送っていた。

陽のあまり差さない公爵邸の隅で、幼いアルスメイヤはやせ細つた力ない体を横たえ、餓死の恐怖に震えることしかできずにいた。グレイブは庶子だったからこそ、まだ閉じ込めて殺されるようなことはなかつた。

けれどアルスメイヤは逃げ場すら与えてもらえない。そして逃げてもいいのだと、言ってくれる人すらいなまま、訳も分からず死にかけていたのだ。

激昂したグレイブは、アルスメイヤを連れて行くことにした。

ここにいるよりは、下町で理解者に囲まれている方がどれだけ恵まれた生活ができるかわからない。

そして公爵家の敷地を、妹を抱えて走っている時に会つたのが、公爵家を訪問していた先代国王とまだ王子だったヴィオレントだった。

グレイブは国王をなぎ倒してでも脱出しようと考えた。

けれど彼は考えたのだ。

国王を害したのなら、恐い魔力持ち相手でも城の兵は自分を追つてやってくる。そうなれば、アルスメイヤや自分を理解してくれる者達まで害されるだろう。

逡巡したグレイブに、先に話しかけたのは先代国王だった。

「お前は人さらいか？」

グレイブは真正直に「これは俺の異母妹だ」と答えた。

「父親が子供を殺そうとしているから、俺が引き取ることにした」  
「その子は公爵家の娘か」

「魔力持ちだから餓死させられそうになった。見逃せば殺さずにいてやる、そこをどけ」

先代国王はグレイブの要求を聞くと、なぜか目を丸くし、それから大笑いした。

どうも十歳そこそこの子供が、国王相手に上から目線で命令してきたのがおかしかったらしい。

「なぜその子に誰も近づきたがらないのか知っているか？ 魔力を暴走させ、使用人達や公爵自身に大けがを負わせからだ」

危険な子供をそのままにはしておけない。そのための措置だと言う国王を、グレイブは鼻で笑った。

「暴走するほど精神的に追い込んだ人間は裁かれないのか？」

「なら、お前なら管理できると？」

「もちろんだ」

うなづくグレイブに、国王は言った。

「その子は生まれながらに心臓が弱いそうだ。お前が連れて行って、暴走が抑えられても、医師がいなくては死んでしまうだろう。私の離宮をお前にやる。代わりに、私の目の前でその子が暴走しないよう管理してみせる」

当時のグレイブは、国王は『国一番の大金持ち』という認識しかなかった。だから哀れな妹に医師と食事を手配してくれるというのならと、うなずいた。

結果、アルスメイヤは体力を付けていくと心臓の発作も起こさないうようになった。何より、アルスメイヤを公爵家の恥として、公爵

自身が彼女を殺しに来た時も魔力を暴走させかけたが、グレイブがそれを素早く納め、ついでに公爵を捕縛してみせたことで、先代国王は彼を信頼するようになった。

魔力を持つ者への対処は、長年の悩みの種だったのだ。

しかし魔力を持つ者がそれを納め、また犯罪すらも対処できるならばこの上ない。

先代国王はグレイブに新たな貴族としての家名を与え、年若い彼に公安官の役職を与えた。

そうして魔力もちを飼いならそうとした。

だが、ヴィオレント国王は違うという。

アルスメイヤは、先代国王に重々言い含められた侍女たちと、グレイブがつれてきた他の魔力持ちの少女達に囲まれ、ようやく安らかな日々を送れるようになった。

それをもたらしたのが先代国王だとわかっていても、大人達に酷い目に遭わされてきた彼女は、グレイブや同じ年頃の少女達以外にはひどく警戒していた。

そんなアルスメイヤを可哀相だと、心を傾けてくれたのがヴィオレントだ。

同じ年頃の彼にアルスメイヤは懐き、ヴィオレントも彼女を大切に思うようになった。

けれどどんなに思っても、アルスメイヤは表舞台には出て行けない。

彼女が自ら保護を申し出た魔力持ちの子供達も、離宮から出たならば過酷な現実が待っている。

だからグレイブは、魔力を持つ者が恐れられず、普通に受け入れられる社会にするため公安官という立場で動き続けている。

これまでの間に、グレイブや彼がひっそりと入れた魔力持ちの公安官によって暴走をおこした子供や、魔力持ちの犯罪者を捕縛することによって、人々の恐怖感は薄れてきている。

それなのに術式銃で魔術を使い、人々を恐怖に陥れたなら、再び同じ状況に戻ってしまうのだ。

「だからあの魔術を吐き出す銃を、知識を持つ者ごと消滅させるのが、グレイブの願いだ」

## 9章 私のわがまま聞いてください 1

「消滅させるって何？」

言いながらエリヤははっと思いつく。

銃は、製造できる知識を持つ者を全て殺さなければ、必ず新たな銃が造られてしまう。

「まさか、虐殺って」

グレイブが術式銃を、この時代から消滅させるために行なったことなのか。

その時、炎が風に煽られる音が聞こえた。

振り向けば、建物の屋根を越えて立ち上がる、炎が見えた。

「おい、エリヤ！」

そのとたん、エリヤは走り出していた。

死なないで、殺さないで。

それだけを念じながらエリヤは駆け続けた。

たぶん、こうして多人数で追い込まれてしまったからだ、と思うのだ。

グレイブは戦うべき相手が多すぎて、そして術式銃を持つ人間のあまりの多さに、全員を殺すことで過ぎた力を封じようとした。

魔力を持つ者が、不必要に恐れられないように。

けれどそれは自分をも殺す道。

おそらく強い魔法を使ったせいで、グレイブの力も隠しておけなくなっただ。

だから グレイブは自ら死罪を選んだのかもしれない。



たどり着いたその場所で、リーヴェは息を飲んだ。  
端々に倒れる人の姿。

その中心に立ち尽くしているように見える、グレイブがいる。

「グレイブ！」

名前を呼びながら駆け寄れば、振り返った彼は顔をしかめた。  
その表情におびえそうになりながら、エリヤは言いつのる。

「ねえグレイブ、お願いだから殺さないで！」

半分泣き声になりながら、エリヤはグレイブのコートを掴んだ。

「ジェイスから聞いたわ。グレイブが何をしようとしてるかって。  
だけどこのまま銃技師を殺し続けたら、あなたは虐殺した罪を背負  
って死ななくちゃなくなる！」

「……未来では、そうなっているということか？」

淡淡としたグレイブの言葉に、エリヤは唇を噛み。ややあつてう  
なずいた。

「そうよ……。あなたは未来で、虐殺事件の大罪人として処刑され  
ちやうのよ」

「そうか」

グレイブは、エリヤの言葉にうなずいた。

「そうかって……！ それだけ！？ だって死んじやうのよ？ あ  
の王様にあなた自分を処刑させるつもりなの！？」

「彼は王だ。必要があれば処刑の決断も下す必要がある。それは解  
つておいでだろう」

「ばかつ！」

エリヤは思わず怒鳴った。

「どうして死んじやうのよ！ お願いだから死なないで！ 父さんみたいに死にたくないのに死んじやう人だっているのに、なんでグレイブは死ぬ道しか探そうとしないのよ！ ……私が探すから。死ななくてもいい、そして魔法をみんなが怖がらなくなる方法を探すから……」

涙が目に浮かび、思わずグレイブのコートに顔を押しつける。

「エリヤ……？」

グレイブが、とまどうように名前を呼ぶ。

エリヤは嗚咽をこらえながら、そのままどうか「わかった」と言っ  
て欲しいと念じていたが……。

「そうはさせないわ」

声と共に降り注ぐ、軌跡を描く稲妻。

その場にしゃがみこんだエリヤを、グレイブが前に立って庇う。  
稲妻の残滓が空中で火花を散らし、グレイブの魔力の壁に跳ね返  
った。

グレイブはまっすぐに前を向いていた。

脇道から飛び出してきたルヴェと、沢山の銃を持つ男達の方を睨  
みながら。

「あなたも邪魔なのよエリヤ。あたしたち以外に、銃を作れる人間  
がいちゃ困るのよ。それにしても」

ルヴェはせせら笑う。

「あんたが魔力持ちだとは思わなかったわグレイブ。私の暴走を止めた時だって、殴りつけて失神させたくらいなのに」

「その方が手っ取り早いからだ」

平然と答えるグレイブに、ルヴェは眉をひそめる。

「ほんつと動じなさすぎて嫌になるわ。あたしがここにいることに、何か感想とかないの？」

「それよりその危険物を製造したのはお前かルヴェ。二度目は見逃せない。大人しく捕まれ」

ルヴェの苛立ちなど気にもせず、グレイブは淡々と要求を述べる。

「ふん、どうせ歴史は変わらないわ、グレイブ・ディーエ。私が今ここで殺さなかったって、あなたはいずれこの街で開発された魔力を持つ銃と、その技術を会得した技師達を皆殺しにして、処刑されるのよ。そして大犯罪者として歴史に刻まれる。百年先までもね」  
エリヤは思わずグレイブの顔を見上げた。

一人だけでなく、他の人間にまで自分が死ぬ運命だと宣告されて、傷つかない人がいるだろうか。

銃を構えながらルヴェとのやりとりを聞いていた者達は、既に聞き知っていたのか、グレイブが怯えることを期待して笑っている。

しかしグレイブは、毅然として言い切った。

「それがどうした」

その言葉に、エリヤはグレイブの覚悟を知った気がした。

「どうしたって……」

さすがのルヴェも戸惑う。

それを綺麗に無視して、グレイブはエリヤに問いかけてきた。

「エリヤ、お前が百年前の人間だというなら、魔力を持つ者はまだ差別されているのか？」

妹を守るため、自分を虐げた世界を変える役に立ったのか。それだけを願っているグレイブに、嘘は言えなかった。

「誰も、誰も差別されてないよ。むしろちょっとでも魔力がないと笑われるくらい」

悔しい思いをしても、あの時代に魔力の有無で殺される人はいなかった。

それを聞いたグレイブは決然とうなずく。

「俺の目的が果たされる保証があるなら尚更だ。お前達を抹消する」

## 9章 私のわがまま聞いてください 2

「頭のおかしい男と話してられないわ。とつとと死んで!」

一歩踏み出したグレイブに、うるたえながらルヴェが叫ぶ。

十数の銃口が光を放った。

炎や氷が乾いた破裂音と共にグレイブの周囲ではじけ、金の粉に姿を変えて消えていく。

エリヤはグレイブの力の強さに目をみはった。父の術式銃ですら、こんな強い威力の魔術は見たことがなかった。

撃った方も愕然とし、そしてめちやくちやに連射しはじめる。

「お前は早く建物の中に隠れる」

言うなり、グレイブはエリヤに彼女の銃を放りなげ、歩き始める。

「うわっ」

受け取ったエリヤの方は、グレイブが遠ざかったせいで火の粉がふりかかってきて、慌てて扉の向こうへ退避した。

グレイブは、危険な目にあわなければエリヤが言う事を聞かないと思ったのだろう。その予想通りに逃げてしまったエリヤは、扉の影から銃を構えて外をのぞいた。

銃があるなら、グレイブの援護ができる。

時折、飛び散る火花や紫電が錆びた扉まで飛んで来る。さすがに感電したくないエリヤは、壁際に移動する。

そして目に見える位置が変わったエリヤは、屋根の上から今しもグレイブの背後に飛び降りようとした子供の姿を見つけた。

金の髪の男の子。

彼もまた銃を持っていた。

銃で撃つのでは間に合わない。エリヤの魔術はグレイブの防御術にはじかれる。

「グレイブ!」

叫んだ声に、グレイブが振り返った。

けれど遅かった。

魔力で作った防御の壁の中だったのだろう。

近接した場所へ飛び降りた男の子の銃は、鋭い氷の刃を銃剣のように現出させ、グレイブの腕を切り裂いた。

息を飲みつつも、エリヤはすぐに自分にできる行動を選択した。

「上手くいくか……解除、雨の針！」

エリヤのなけなしの魔力を吸い取り、銃の様子が変化する。

今までの戦いをみていると、エリヤは気づいていた。

ルヴェは、一世代前までの知識しか持っていない。もしくは、銃技師の学校で一年目に学ぶ前世代の技術だ。

だからエリヤの銃が、様々な術を使える最新の技術がどこかされているとは思わなかったのだろう。

空へ向かって放たれた光が、大粒の雨のように急落下して降り注ぐ。

何をしたんだと頭上を見た者も、エリヤにたいした真似ができるわけがないと思った者も、等しく金の雨に触れた後で、

「うわあああかゆいいいい！！！」

「なんだこりゃ！」

「誰か、誰か背中を！」

一斉に全員が体中をかきむしりはじめた。

背中に手が届かない者など、近くの壁に走って背中をこすりつけながら腹を掻いている。

いい年をした男達が叫び声を上げながら奇妙な動きをしている光景は、かなり異様だった。

しかし、その様相に驚いて立ち尽くした男の子を、隙をついたグレイブが突き飛ばし、首筋に手をたたき込んで昏倒させた。

「全員麻痺するはずだったんだけど……」

術を放ったエリヤの方もびっくりしていた。

微妙にエリヤの魔力が足りないせいだろうか。麻痺が弱くかかったせいも、対象者全員がかゆがりながら悶絶している。攻撃どころ

の状態ではなくせたものの、ある意味地獄の苦しみに喘ぐ敵達に、思わず同情しそうになった。

が、エリヤはすぐに走り出した。

「止めて！」

一人、魔術の使い方を心得ていたルヴェだけが、この痒みの術を逃れていた。

ルヴェの銃口は、腕を庇って立つグレイブに向けられている。

閃光が放たれた。

飛び出し、グレイブへ向かっていくのは何本もの氷の槍だ。

エリヤの手袋をした手が届いた。

一本を手袋の防御術で弾き飛ばす。

そのまま片腕を庇って不安定な体勢になっていたグレイブを押し倒す。

他の数本はエリヤの服や髪を切り裂いていく。

そこへさらに炎が襲いかかったが、グレイブが魔術で防御の壁を再度作ったのだろう、エリヤにまでは届かない。

それでもエリヤはグレイブにしがみついたままでいた。

「馬鹿！ 早くそこをどけ！」

「いやよ！ このままみんな殺して自分も死ぬつもりでしょう！」

死なせない！」

自分が張り付いている間は、グレイブは無茶はできないはずだ。

「どうしてだ。このまま歴史通りになってもお前に不都合はないはずだ」

不思議そうに言うこの男が腹立たしかった。

自分一人が汚名を着て、全ての悪を引き受けて死ねばいいと本当に思っているのだ。

それがひいては、虐げられ続けている魔力持ちの人々を保護することにつながるのだからと。

「わかってるわよそんなこと！ だってあなたは、そうやって虐殺の末に処刑される運命だって、未来じゃ子供向けの教科書にまでそ

う書いてあつて！」

悔しくて、エリヤは涙で視界がにじみそうになる。だから瞬きしながら叫んだ。

「あたしは最初、だからあなたのことが恐くて、殺されるんじゃないかって……。拾ってくれて、それからもずっと庇ってくれたのに、そんな自分の行動を思い出す度にとつてもイヤだったのよ！」

知れば知るほど、疑った自分を嫌悪した。

理由がなければ決してむやみに人を殺したくないと思ってる人だったのに、ただの殺人鬼だと思っていた自分を恥じた。

「だから、あなたがその命を捨てるって言つなら、あたしにちょうだい。そんな嫌な未来ならあたしが変わえてやるわ！」

決意を込めて放った言葉に、グレイブは一瞬目を見開いた。

「歴史を変える覚悟があるのか？ おそらく大勢の人の運命を変えることになる、俺にでも分かる事だ」

「そうかもしれない。でも、どうせ歴史を変えられるなら、みんなでもっと良い未来を作ればいいじゃない！」

きっぱりと言い切る。

するとグレイブは、あのととても柔らかな笑みを見せてくれた。

「いいだろう。俺の運命をお前に預ける」

言われた瞬間、エリヤは今まで怯えていた全てが怖くなくなり、自分はなんでもできそうな気がした。

だからグレイブに一言指示を出し、エリヤは言葉をはき出した。

「解除、虹の行進！」

銃の生み出す輝線。

そこから子猫と子犬が虹や花弁ともに吹き出した。

「なにこれ？ 安全装置の幻？」

攻撃が来ると思っていたルヴェエは、意表をつかれたようだ。

が、これは安全装置を解除しない場合、撃ち出される幻ではない。

「うえっ、なっ！」

ルヴェエは飛び出した子猫と子犬に踏まれ、虹によるけたところを



どつかれる。

「なにこれ幻影じゃない!?」

驚くルヴェ。

しかしその時には、ルヴェの背後には、自らの魔力で空へ飛び上がり、忍び寄ったグレイブがいた。

「そこまでだ」

鮮やかな手腕でルヴェは組み伏せられ、術式銃も取り上げられる。「なによなによ! そんな力を持つてるくせに、どうしてみんなを閉じ込めるのよ!」

手を後ろにひねられ、背中を膝で踏まれながら、ルヴェは暴れながら反抗した。

グレイブは冷徹に諭す。

「そうして全てをなぎ倒した後、何が残る? 相手を殺すことで得るものなど、結局は魔力を持つ者以外は排除する世界だ。お前は自分の姉を殺したいのか?」

「違うわ! 姉さんに死んで欲しいわけじゃない! 姉さんは私が守るもの!」

「だがお前の仲間はどうだ? 仲間のその知人はどうだ? そいつら全てにお前の姉だけを特別扱いをしろと言って、納得させられるのか?」

「でも、あたしのこの気持ちはどうするのよ!」

ルヴェは血を吐くようにさげんだ。

「この時代に来て、でも右も左もわからなくて、よかれと思って魔力で人を助けたら殺されかけたのよ! 逃げるために女物の服まで着て、それでも殺されることに怯えながら隠れたその恐怖がわかる!? 報いを味あわせていいじゃない!」

言い切つて、息をつきながらルヴェはグレイブを睨んでいた。

「それじゃ、もっと酷いことになるのよ、ルヴェ」

エリヤの言葉に、二人が彼女の方を向く。

「あたし達の時代の事を思い出して。魔力が生活に利用されて、そ

れが便利だからもてはやされて、みんな魔術を学ぶ学校へ通いたがるようになってたでしょう。だけど魔力の大きさは個々人で差がはつきりしてる。あなたは魔力が大きいから感じなかったかもしれないけど、あたしは少ないからって随分いじめられたわ」

エリヤはルヴェエがじつと聞いていてくれるのを確認し、続けた。

「グレイブが虐殺をして、それで魔力を持つ人が可哀相だからって変化していった世界でもそうなのよ。力でねじ伏せた先の世界じゃ、もっと過激に魔力の足りない人は差別されるわ。今を生きてる人達には、恨みや苦しみにもがくのに精一杯でこんなこと言っても分かって貰えないかも知れない。だけど未来から来たあなたなら、もっと広い視点で見ることができるとしよう？ …… フィーンさんを守るために、わかって」

エリヤはルヴェエから目をそらさず、願った。

じつと見つめ合っていたルヴェエの瞳に、やがて涙が溢れ、そのまま泣き出す。

わかってくれたのだ。

過去へ落ちてきて、辛い思いをしたかもしれない。だけど守ってくれたフィーンのためならば、恨みを抑えることを選択してくれたのだ。

そう感じたエリヤは思わずもらい泣きしそうだった。

グレイブも大人しくなった、と思ったのだろう。

ルヴェエを押さえつけていた手を離れた。

が、なぜか指をルヴェエの額に当てたかと思うと、その指先から紫電がはじけた。ルヴェエは「ぎゃ！」と悲鳴を上げて昏倒する。

エリヤがぎょっとしているのに気付いたグレイブは「気絶させただけだ。完全に捕縛するまでの応急措置だ」と告げてきた。

ようは今ここに拘束する縄がないから、気が変わって逃亡しようとした時のために、身動き取れないようにしたのだろう。

本当に目的のためなら手段を選ばない人だ。

立ち上がったグレイブは、座り込んだままだったエリヤに手をさ

しのべる。そうしてエリヤを立ち上がらせても手を離さず、代わりに自分がその場に膝をついた。

「え？ 何？」

「改めて、礼を言いたいからだ」

戸惑うエリヤに、グレイブは告げた。

「誰も殺さず、全てが納められたのはお前のおかげだ。ありがとう。それにお前の技術にも助けられた。感謝する」

エリヤはグレイブの言葉に、思わず泣きそうになった。

自分の努力の成果が、誰かを傷つけずに解決できる助けとなったのだ。

一度は辛くて投げ出しそうになったけれど、無駄じゃなかったのだと証明されたことが、それをグレイブに認めて貰えたことがなにより嬉しかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7614v/>

---

願いは金に輝く時の影に

2011年12月8日23時54分発行